

姫路市所在

市之郷遺跡Ⅱ

—(都)大日線緊急街路整備工事に伴う発掘調査報告書—

2010(平成22)年3月

兵庫県教育委員会

姫路市所在

市之郷遺跡Ⅱ

—(都)大日線緊急街路整備工事に伴う発掘調査報告書—

2010(平成22)年3月

兵庫県教育委員会



遠景（南東から）



I 区全景（北から）

卷頭図版 2



I 区SK16 出土土器



弥生前期 出土土器



弥生中期 出土土器



II区出土 炭化米

卷頭圖版 4



出土打製石器



出土磨製石器

例　　言

1. 本書は姫路市市之郷に所在する市之郷遺跡の発掘調査報告書である。市之郷遺跡では多くの調査を行っており、今後とも同名の報告書が予定されていることから、書名を市之郷遺跡Ⅱとした。
2. 調査は、兵庫県中播磨県民局県土整備部姫路土木事務所が計画施工する都市計画街路事業大日線に伴うものである。姫路市教育委員会では仮称姫路駅周辺遺跡№3 地点として扱っているが、周知の遺跡であり地名もある市之郷遺跡として報告する。
3. 分布調査は平成5年度に、確認調査は平成17年度に、本発掘調査は平成18年度に行った。すべて兵庫県教育委員会が調査主体となり、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所が調査担当した。
4. 本発掘調査は、平成18年度に渡辺　昇・長瀬誠司・柏原正民が担当した。
5. 調査で使用した方位は国土座標第V系を使用し、水準は兵庫県姫路土木事務所および姫路市建設課設定の2級基準点を使用した。
6. 基準点の測量ならびに平面図の図化は㈱サンコムに委託して実施した。遺物出土状態や土層断面図は調査員・調査補助員が実測した。
7. 道構写真は調査担当者が撮影した。空中写真は、㈱サンコムに委託して撮影したものである。
8. 整理作業は、平成20・21年度の2ヵ年に渡って、兵庫県立考古博物館で行った。遺物写真は株式会社タニグチフォトに委託して撮影した。
9. 索引は本文目次の通りで、編集は増田麻子の協力を得て渡辺が行った。
10. 本書にかかる遺物や図面・写真などの資料は、兵庫県立考古博物館（加古郡播磨町大中1-1-1）ならびに兵庫県立考古博物館魚住分館（明石市魚住町清水立合池の下630-1）に保管している。ご活用ください。
11. 発掘調査・整理調査にあたって、地元関係者をはじめ多くの方々・機関のご協力・ご指導を得ました。感謝致します。

姫路市教育委員会・大谷輝彦・小柴治子・青木哲哉



図1　市之郷遺跡の位置

本文目次

例言

I	はじめに	渡辺	1
1.	調査に至る経緯		
2.	本発掘調査の経過		
3.	整理作業の経過		
II	遺跡の環境	長浜	5
III	遺構	長浜	9
IV	出土遺物	渡辺・古谷	15
V	市之郷遺跡における放射性炭素年代（AMS測定）	群加速度分析研究所	56
VI	おわりに	渡辺	59

挿図目次

図1	市之郷遺跡の位置	i
図2	調査風景	1
図3	調査風景	2
図4	市之郷遺跡の範囲と調査地点	2
図5	調査地点位置図	3
図6	整理作業風景	3
図7	整理作業風景	4
図8	整理作業風景	4
図9	周辺の遺跡	7
図10	石器の形式分類	38
図11	楔形石器の形式分類	40
図12	金属器実測図	43
図13	暦年較正年代グラフ	58
図14	調査地遠景写真	60
図15	出土遺物	61

表 目 次

表1	石器計測表	41
表2	出土遺物観察表	44～55
表3	試料一覧	57

卷頭図版目次

- | | |
|----------------------|--------------------|
| 卷頭図版 1 上 遠景（南東から） | 卷頭図版 3 上 弥生中期 出土土器 |
| 下 I区全景（北から） | 下 II区出土 炭化米 |
| 卷頭図版 2 上 I区SK16 出土土器 | 卷頭図版 4 上 出土打製石器 |
| 下 弥生前期 出土土器 | 下 出土磨製石器 |

図版目次

- | | |
|----------------------|----------------|
| 図版 1 調査区全体図 | 図版21 出土土器 (9) |
| 図版 2 I区遺構 平・断面図 | 図版22 出土土器 (10) |
| 図版 3 I区遺構 住居跡・土坑 (1) | 図版23 出土土器 (11) |
| 図版 4 I区遺構 土坑 (2) | 図版24 出土土器 (12) |
| 図版 5 I区遺構 土坑 (3) | 図版25 出土土器 (13) |
| 図版 6 I区遺構 土坑 (4) | 図版26 出土土器 (14) |
| 図版 7 II区遺構 平・断面図 | 図版27 出土土器 (15) |
| 図版 8 II区遺構 土坑 (1) | 図版28 出土土器 (16) |
| 図版 9 II区遺構 土坑 (2) | 図版29 出土土器 (17) |
| 図版10 III区遺構 平・断面図 | 図版30 出土土器 (18) |
| 図版11 III区遺構 土坑・溝 | 図版31 出土土器 (19) |
| 図版12 III区遺構 流 路 | 図版32 出土土器 (20) |
| 図版13 出土土器 (1) | 図版33 出土土器 (21) |
| 図版14 出土土器 (2) | 図版34 出土土器 (22) |
| 図版15 出土土器 (3) | 図版35 出土石器 (1) |
| 図版16 出土土器 (4) | 図版36 出土石器 (2) |
| 図版17 出土土器 (5) | 図版37 出土石器 (3) |
| 図版18 出土土器 (6) | 図版38 出土石器 (4) |
| 図版19 出土土器 (7) | 図版39 出土石器 (5) |
| 図版20 出土土器 (8) | |

写真図版目次

- | | |
|--------------------|------------------------|
| 写真図版 1 上 遺跡の遠景 南から | 写真図版 2 上 I区遺構 全景（垂直写真） |
| 下 遺跡の遠景 北から | 中左 I区遺構 全景 南から |
| | 中右 I区遺構 全景 北から |
| | 下 南半部 南から |

写真図版 3	上 SH01 北から	写真図版16	上 流路断面 (a-a') 南西から
	中 SH01断面 東から		中 流路断面 (b-b') 南から
	下 SK01 東から		下 作業風景
写真図版 4	上 SK01断面 東から	写真図版17	出土土器 (1)
	中上 SK02断面 西から	写真図版18	出土土器 (2)
	中下 SK03断面 東から	写真図版19	出土土器 (3)
	下 SK05 東から	写真図版20	出土土器 (4)
写真図版 5	上 SK05土器出土状況 南から	写真図版21	出土土器 (5)
	中 SK07 西から	写真図版22	出土土器 (6)
	下 SK07断面 西から	写真図版23	出土土器 (7)
写真図版 6	上 SK06 東から	写真図版24	出土土器 (8)
	中 SK06断面 東から	写真図版25	出土土器 (9)
	下 SK10・SD01断面 東から	写真図版26	出土土器 (10)
写真図版 7	上 SK16 西から	写真図版27	出土土器 (11)
	中 SK16土器出土状況 西から	写真図版28	出土土器 (12)
	下 SK16完掘 北から	写真図版29	出土土器 (13)
写真図版 8	上 II区遺構 全景 (垂直写真)	写真図版30	出土土器 (14)
	中 II区遺構 全景 北から	写真図版31	出土土器 (15)
	下 SK01 東から	写真図版32	出土土器 (16)
写真図版 9	上 SK01土器出土状況 東から	写真図版33	出土土器 (17)
	中 SK02 南から	写真図版34	出土土器 (18)
	下 SK04 西から	写真図版35	出土土器 (19)
写真図版10	上 SK05 東から	写真図版36	出土土器 (20)
	中 SK05断面 東から	写真図版37	出土土器 (21)
	下 SK05土器出土状況 東から	写真図版38	出土土器 (22)
写真図版11	上 SX01、SK08・13 南から	写真図版39	出土土器 (23)
	中 SX01断面 (a-a') 西から	写真図版40	出土土器 (24)
	下 SK08断面 南から	写真図版41	出土土器 (25)
写真図版12	上 III区遺構 全景 (垂直写真)	出土金属器	
	中 III区遺構 全景 北から	出土炭化米	
	下 南半部東壁土層断面 西から	写真図版42	出土石器 (1)
写真図版13	上 III区遺構 全景 北から	写真図版43	出土石器 (2)
	中 調査区南端東壁際土坑 西から	写真図版44	出土石器 (3)
	下 SK01 東から	写真図版45	出土石器 (4)
写真図版14	上 SK02断面 北から	写真図版46	出土石器 (5)
	中 SK02土器出土状況 西から	写真図版47	出土石器 (6)
	下 SD03・04・05 西から	写真図版48	出土石器 (7)
写真図版15	上 SD02土器出土状況 西から	写真図版49	出土石器 (8)
	中 SD03 西から		
	下 SD03土器出土状況 北から		

I はじめに

1. 調査に至る経緯

姫路市内の洪滞緩和とスマーズな通行を図るために市内外環状線の機能を持った街路大日線が兵庫県姫路土木事務所によって計画されていた。国道312号の大日交差点から市之郷に向かうものである。

その間は市街地となっており、買収部分から順次確認調査が実施されていた。今回対象となった部分については、周辺の開発や既調査結果から遺跡の存在する可能性は非常に高いものと思われていた。I 区東側には市之郷庵寺の礎石が置かれている薬師堂が存在し、市之郷庵寺の寺域北限もしくは隣接地であろうと想定されていた。南側の姫路市立すこやかセンター建設に先立つ発掘調査でも関連構造が検出されている。

確認調査は平成17年度に実施された。2回に分けて実施し、5月30日と6月16日の2日間行った。調査は兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所調査第2班吉識雅仁が担当した。その結果、弥生時代の堅穴住居と思われる遺構が検出され、1地区を除いて本発掘調査が必要とされた。それによって、今回本発掘調査を行った部分についても市之郷遺跡が広がっていることが考えられた。

2. 本発掘調査の経過

本発掘調査は平成17年度に実施した。調査計画が詰まっていたこともあってスマーズに着手することができなかったので、変則的な調査となった。調査を担当する予定のチームが朝来市の調査に入っていた段階で入札を行わざるを得なかつたので、県道西側のⅢ区についてはデスク担当の企画調整班柏原が先行して12月中旬から調査に入り、1月上旬から長濱が合流する形となつた。その後、北近畿豊岡自動車道の上工山古墳群の調査を終えて、1月中旬から渡辺が参加した。県道西側のⅢ区からⅡ区、そして県道東側のⅠ区の順で調査を行つた。車両や歩行者が多いため、調査区はフェンスで囲い事故防止に努め安全に留意した。上層のアスファルト・コンクリートは場外処分地に搬出し、人力掘削の土は調査区内に仮置きし、各々埋め戻しを行つた。各調査区とも遺構面の調査を行い、個別写真・実測などの作業を行い、足場による全景写真とヘリコプターによる空中写真撮影を行い図化作業も行つた。3月18日に遺物・写真類や器材を搬出して、市之郷遺跡の調査を終了する。

調査の組織

〈調査主体〉 兵庫県教育委員会

〈調査事務〉 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

所長：平岡憲昭

主幹：輔老拓治

総務課 課長：織田正博

企画調整班 主査：柏原正民

課付：福田 究

調査専門員：吉田 昇

〈調査担当〉 調査第1班 主査：渡辺 昇・長濱誠司

企画調整班 主査：柏原正民



図2 調査風景



《調査参加者》 森本文子・赤壁千恵子・高田裕一
覚野郁子・菊島昌子・藤田一泉
佐藤朋子・清水洋子

図3 調査風景

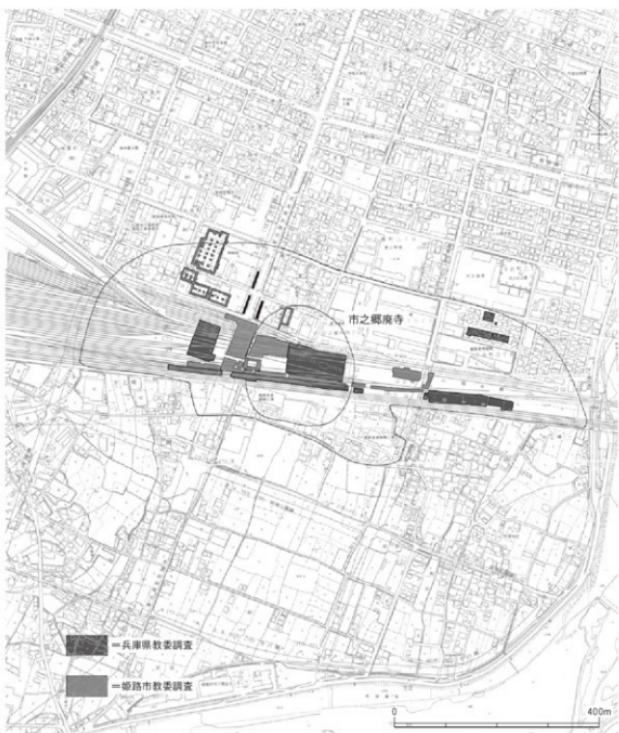


図4 市之郷道路の範囲と調査地点

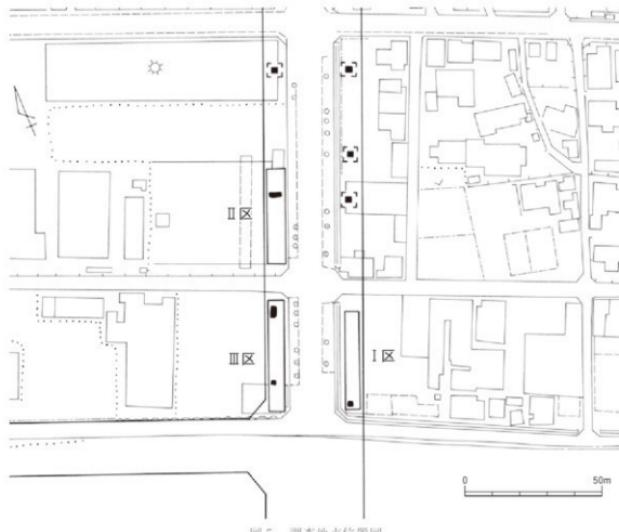


図5 調査地点位置図

3. 整理作業の経過

整理作業は現地調査事務所で発掘調査の進捗に応じて一部土器洗浄などを実施していった。

本格的に作業に入ったのは、整理作業契約を交わした平成19年度からで、3カ年に渡って作業を行った。平成19年度は主に魚住分館で遺物の洗浄作業・注記作業を実施した。平成20年度に組織は兵庫県立考古博物館に変わり播磨町に引越しを行い作業を行った。接合復原作業から実測作業を行った。II区からはじめIII区・I区へと作業を行った。平成21年度は継続して実測作業とトレス・レイアウト作業を行ない、報告書刊行までを実施した。

調査の組織

《調査主体》 兵庫県教育委員会

(平成19年度)

《調査事務》 兵庫県立考古博物館

《事務担当》 埋蔵文化財調査部長：若生見彦

主幹：岡崎正雄

総務部 総務課長：若狭健利

主任：橋本弘昭

整理保存班 調査専門員：西口和彦

主任：菱田淳子



図6 整理作業風景

《調査管理》 担当課長補佐：森内修造
《調査担当》 調査第2班：渡辺 昇・長瀬誠司
嘱託員：島村順子・藏 幾子・奥野政子・荒木由美子・藤池かづさ・吉村あけみ

（平成20年度）

《調査事務》 兵庫県立考古博物館

《事務担当》 埋蔵文化財調査部長：若生晃彦

主幹：岡崎正雄

総務部 総務課長：若狭健利

課長補佐：山下裕恵

整理保存班 調査専門員：森内修造

主査：菱田淳子

《調査管理》

主査：櫻宮 正

《調査担当》

調査第2班：渡辺 昇・長瀬誠司

嘱託員：古谷章子・増田麻子・栗山美奈・加藤裕美・佐々木聰子・大西美緒
西口由紀・島村順子・藏 幾子・藤池かづさ・吉村あけみ



図7 整理作業風景



図8 整理作業風景

（平成21年度）

《調査事務》 兵庫県立考古博物館

《事務担当》 埋蔵文化財調査部長：若生晃彦

総務部 総務課長：前川浩子

主査：大西晃彦

整理保存班 調査専門員：森内修造

主査：櫻宮 正

《調査管理》

主査：菱田淳子

《調査担当》

調査第1班：渡辺 昇・長瀬誠司

嘱託員：古谷章子・増田麻子・栗山美奈・岡崎輝子・加藤裕美・吉田優子
島村順子・藏 幾子・吉村あけみ

II 遺跡の環境

(1) 地理的環境

姫路市は兵庫県の中西部に位置する。その南側は瀬戸内海に面し沖合に家島諸島が点在する。また北側は標高200m級の山地が東西に広がっている。近代に入り姫路県、播磨県を経て兵庫県に編入、1889(明治22)年に市制が敷かれる。その後周辺の町村を合併して市域を拡大、さらに「平成の大合併」により2006(平成18)年に周囲の播磨都夢前・家島町、神崎郡寺町、宍粟郡安富町と合併し面積534.27km²の現在の市域が形成される。また1996(平成8)年には中核都市に移行している。市街地は市川などの河川によって形成された県内有数の平野に位置する。1600(慶長5)年池田輝政によって築かれた姫路城の城下町から発達したものである。近代以降大阪鎮台営所、師団司令部と県立尋常中学校、姫路師範学校などが設置され、播磨地域の政経中枢都市であるとともに、県庁所在地である神戸市に次ぐ兵庫県第2の都市としても歩んでいる。

市街地付近は古代山陽道をはじめ西日本へ至る主要街道が東西に通過し、これを基点に周辺地域へ至る街道が放射状に延びていた。これらの街道は今日でも国道2号などの主要道路になっている。また近代には鉄道が開通し、常に交通の要衝地でもあった。

姫路市に深く関わるものを市川は、朝来市生野町を源とし神崎郡、姫路市を貫流し瀬戸内海に注ぐ、全長約77kmを測る兵庫県下第2の河川である。市街地は河口から約5kmさかのぼった西岸にある。南流する市川は市街地の北側でそれを避けるように東側に流れを変えている。この現在の河道は姫路城築城に際し付け替えが行われたとする説もある。

遺跡の所在する姫路市市之郷は、姫路城城下町の南東部にあたる。かつては城下町の外縁部であり、市之郷や阿保などの集落が点在する田園地帯であった。調査区北側、国道2号沿いにある神尾天神社付近が小高くなる他は水田が広がり、その中に藪や墓地が島状に点在していた。繁栄する市街地に対してさびしい場所だったと言われる。景観が一変したのは国鉄の操車場設置以降であり、水田の埋立てが進み、線路沿いに倉庫が建ち並び、周辺の集落も市街地と一体化していった。

(2) 周辺の歴史的環境

姫路市街地は早い時期に都市化が進んでいるため遺跡の状況は明らかでなく、わずかに工事中に遺物の出土が報告される程度であった。しかし姫路駅周辺の連続立体交差事業やそれに伴う区画整理事業などに関連して市街地の発掘調査が進み、播磨国の中心部の状況が明らかになりつつある。

绳文時代

この時期の遺跡は市街地の西側に集中する。辻井遺跡(28)は中期の屈葬された人骨、晩期の土器棺などが検出された著名な遺跡である。今宿丁田遺跡(25)では後期前半の埋甕、土坑が検出されている。英賀保駅周辺遺跡第4地点(24)では後期の土器が出土し、付近に生活跡があるものと推定される。堂田遺跡(23)でも晩期の土器が出土している。

弥生時代

弥生時代に入ると遺跡数は増大する。遺跡は長期にわたり存続し、規模の大きいものが多い。

前期後半から始まる遺跡に千代田遺跡(13)、八反長遺跡(22)がある。市之郷遺跡に隣接する北条遺跡

(11)では前期末の旧河道、姫路駅周辺第2地点(3)や豆腐町遺跡(6)では前期の溝などが検出される。

今宿丁田遺跡(25)、辻井遺跡(28)では中期の住居跡が検出される。姫路駅周辺第2地点(3)では中期後半の土坑・住居・溝などが検出されている。船場川東区整遺跡は集落が弥生時代中期以降古墳時代まで存続し、多数の住居跡が検出される。この時期、注目する遺物として銅鐸鋳型の出土がある。名古山遺跡(30)では住居内から製安樂文銅鐸、今宿丁田遺跡(25)では扁平紐式四角画製安樂文銅鐸の石製鋳型が出土している。銅鐸のものは発見されていないが現市街地の西側地域で銅鐸生産が行われていた可能性がある。

弥生時代後期の遺跡としては西延末遺跡(14)、今宿丁田遺跡(25)、今宿遺跡(26)があり住居跡を検出している。八反長遺跡では後期末から古墳時代初頭の方形周溝墓が検出される。

古墳時代

市之郷遺跡の所在する市川西岸の古墳の分布状況は、市街地化や姫路城築城により不明であるが、市川下流域の東岸では前期から後期にわたる首長墓の変遷がうかがえる。独立山塊上に所在する御旅山古墳群内には前期の前方後円墳があるものの、この中に大型古墳はみられない。このうち3号墳(46)からは三角縁神獣鏡が出土している。中期に入ると全長145mの前方後円墳である壇場山古墳(41)、統いて全長約50mの大円墳である山之越古墳(42)が築かれる。どちらも長持形石棺を直葬し、被葬者は播磨国造に近い人物が想定される。宮山古墳(43)は5世紀半ばに築造され、壇場山・山之越古墳に継ぐ首長墓と推定されるが、初期須恵器や金製垂飾付耳飾など朝鮮半島に由来する遺物が出土している。後期になると丘陵や山脈に群集墳が築造される。6世紀前半に築造された見野長塚古墳(44)は最末期に位置づけられる前方後円墳であり、初期の横穴式石室を埋葬施設とする。

長越遺跡(19)は船場川沿いの微高地に立地する古墳時代初頭～前期の集落であり山陰など各地からの搬入土器が多く出土している。

古代

市之郷遺跡の一部は、この時期播磨國府都に属していた。國府郡は16里からなる大郡であり、播磨國府が所在した。本町遺跡(12)で検出した建物群や出土瓦から播磨國府の一部と推定されている。また近隣の豆腐町遺跡(6)では掘立柱建物群、井戸などを検出し、出土遺物からも播磨國府、國府都衙に関連する遺跡と推定される。播磨國分寺と國分尼寺は市川左岸にある。國分寺跡(39)は調査により築地で囲まれた方2町の寺域が確認され、中軸線上に南門、中門、金堂、講堂が一線に並ぶことが判明した。また國分尼寺は金堂基壇、礎地などが検出された。古代寺院は市之郷庵寺(2)、辻井庵寺(29)、見野庵寺(45)がある。辻井庵寺(29)は調査により法隆寺式伽藍配置が想定される。この他に上原田(38)、小川(37)、白国(34)、平野(35)の庵寺があるが実態は明らかでない。今宿遺跡(26)では調査で多量の瓦が出土し、これまで未確認だった「今宿庵寺」の存在がほぼ明らかとなった。市之郷庵寺の南側に所在する阿保遺跡第2地点(9)では石帶、硯などの遺物が出土し、市之郷庵寺と関連する遺跡と考えられる。

北条遺跡(11)では土坑、井戸などを検出し、旧河道内からこの時期の土器などがまとまって出土している。英賀保駅周辺遺跡第4地点(24)では計画的な配置が想定される建物群が検出され、硯や墨書き土器などが出土している。これらは官衙関連遺跡か有力な集落であると思われる。

古代山陽道は播磨郡を通していったが、市街地化が進むこともあり、復元ルートは充分に解明されていない。国府に隣接して草上駅が所在したとされ、山陽道と美作道の分岐点となっていた。草上駅の所在地は明らかでないが、今宿遺跡(26)、今宿丁田遺跡(25)は有力な比定地である。

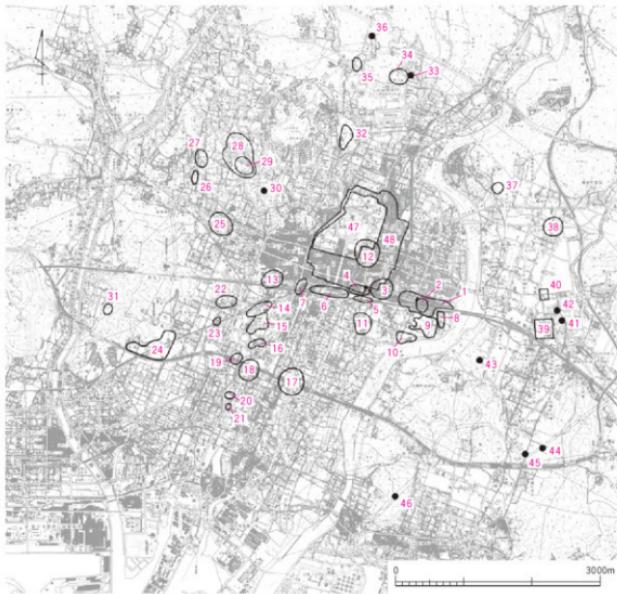


図9 周辺の遺跡

- | | | |
|---------------------------|--------------------|-------------|
| 1. 市之郷遺跡
(仮称姫路駅周辺第3地点) | 17. 三宅遺跡 | 34. 白国庵寺 |
| 2. 市之郷寺 | 18. 仮称船場川東区整遺跡第6地点 | 35. 平野庵寺 |
| 3. 仮称姫路駅周辺第2地点 | 19. 長越遺跡 | 36. 御奥塚古墳 |
| 4. 仮称姫路駅周辺第4地点 | 20. 仮称船場川東区整遺跡第2地点 | 37. 小川庵寺 |
| 5. 仮称姫路駅周辺第1地点 | 21. 仮称船場川東区整遺跡第4地点 | 38. 上原田庵寺 |
| 6. 豆腐町遺跡 | 22. 八反長遺跡 | 39. 播磨國分寺跡 |
| 7. 南畠町遺跡 | 23. 堂田遺跡 | 40. 播磨國分尼寺跡 |
| 8. 阿保遺跡 | 24. 英賀保駅周辺遺跡第4地点 | 41. 墓場山古墳 |
| 9. 阿保遺跡第2地点 | 25. 今宿丁田遺跡 | 42. 山之越古墳 |
| 10. 阿保遺跡第1地点 | 26. 今宿遺跡 | 43. 宮山古墳 |
| 11. 北条遺跡 | 27. 山穴遺跡 | 44. 見野長塚古墳 |
| 12. 本町遺跡 | 28. 變井遺跡 | 45. 見野庵寺 |
| 13. 千代田遺跡 | 29. 變井庵寺 | 46. 御旗山3号墳 |
| 14. 西延末遺跡 | 30. 名古山遺跡 | 47. 姫路城跡 |
| 15. 手柄山北丘遺跡・群集墳 | 31. 山所遺跡 | 48. 姫路城域下町跡 |
| 16. 手柄山南丘遺跡・群集墳 | 32. 八代山古墳群 | |
| | 33. 二塚古墳 | |

(3) 市之郷遺跡

市之郷遺跡（仮称姫路駅周辺第3地点）は姫路駅の東部に所在する微高地上に広がり、東端は市川に接する。その範囲は東西約1,000m、南北約350mである。遺跡は微高地の最も高位となる地点に立地しているが、さらに微細に見ると遺跡は複数の微高地から構成され、それぞれの微高地上に遺構が分布するようである。遺跡の中央付近には郡内最古の古代寺院である市之郷庵寺が所在する。

遺跡の大半は旧国鉄の操車場であったが、その建設の際に出土した弥生土器や瓦類、現在の薬師堂境内に所在する塔心礎が古くから知られている。これらが地元研究者により調査・報告され、播磨地域の考古学史的にも重要な遺跡となっている。遺跡の大半は長らく鉄道用地だったため実態が不明であったが、JR山陽本線の高架事業と鉄道施設跡地の再開発に伴い発掘調査が継続して行われ、多くの成果が得られている。

遺跡は弥生時代前期に始まり、前期末の墓、土坑、溝などが検出されている。また中期中葉では環濠の可能性のある溝が検出されるものの遺構・遺物は少ない。遺構・遺物が多くなるのは弥生時代中期後半からである。広範囲に集落が形成され堅穴住居、棟持柱を持つ大型掘立柱建物が検出される。その周辺では円形周溝墓、周間に木棺墓などが検出され、墓域を形成している。後期・古墳時代初頭も集落が形成され、堅穴住居、墓、掘立柱建物跡などが検出される。

古墳時代に入ても集落が営まれるが、中期のカマドをもつ堅穴住居から韓式系土器が出土しているほか、オンドル状造構が附属する住居跡も検出される。これら遺構・遺物から在地人の集落とともに渡来人の居住する集落があったことが明らかである。時代が下がるとともに韓式土器の在地化が進むが、古墳時代後期まで集落は存続していく。後期の集落では堅穴住居跡の他に大型掘立柱建物も検出され、ここに居住する有力者が後の市之郷庵寺の造営者となることが推定される。庵寺の西側では堅穴住居廃絶後、飛鳥時代の寺院建立にやや先行する時期に大型掘立柱建物跡群と井戸が造られる。

市之郷庵寺は鉄道用地内に寺域が想定され長らく幻の寺院であった。2008年に塔心礎が所在したといわれる土壇推定施付近の調査が行われ中心伽藍の仏堂跡基壇が検出された。付近では水煙の破片も出土していることから塔の存在も確実視されるが、遺構の残存は良好でないため伽藍配置など解明すべき課題が多い。寺院の周辺では寺域を区画するとみられる溝が検出されている。

市之郷庵寺が廃絶した平安時代以降も集落が形成され、掘立柱建物跡など多くの遺構が検出されている。特筆すべき遺構として中世末の梵鐘铸造遺構がある。この地は铸造に関する工人組織、野里勤物師の活動拠点になっていたと推定される。

参考文献

- 『平成18年度 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所年報』兵庫県立考古博物館 2007年
- 『TUBOHORI 姫路市埋蔵文化財調査略報 平成6年度(1994)～13年度(2001)』姫路市教育委員会 1999年～2002年
- 『市之郷遺跡』兵庫県文化財調査報告書266号 兵庫県教育委員会 2005年
- 『豆摘町遺跡1』兵庫県文化財調査報告書322号 兵庫県教育委員会 2007年
- 『北条遺跡』兵庫県文化財調査報告書255号 兵庫県教育委員会 2008年
- 『今宿遺跡1』兵庫県文化財調査報告書第333号 兵庫県教育委員会 2008年

III 遺構

(1) I区の調査

1. 概要

今回の調査では唯一道路東側の調査区である。東側約50mに位置する薬師堂には市之郷庵寺出土と伝えられる塔心礎が設置されている。遺構は南半部に集中し今回の調査では最も遺構密度の高い調査区である。ここでは竪穴住居を1棟検出したほか、多数の土坑を検出した。土坑の中には多量の土器を投棄したものがある。北半部で検出した一部の土坑が中世に属する他は弥生時代の遺構のみである。

2. 基本層序

現地表は約60cmの盛土によってなされたもので、その下に造成以前の水田面が残存していた。さらにその下層にも旧耕土層があり、その直下が遺構面となる。遺構面は、南半部は黒褐シルト質細砂層上面であるが、中央より北半は裸層が隆起しこの部分は遺構の分布が疎らである。遺構面の標高は11.9~11.8mを測り、北から南へゆるやかに傾斜する。

3. 遺構

竪穴住居

SH01(図版3 写真図版3)

平面は不整な円形を呈し西半は調査区外へ広がる。SD02と重複し、本遺構が切られる。規模は南北3.2m、検出面からの深さ約10cmである。壁面に沿って幅10cm、深さ3cmの浅い周壁溝が巡る。床面では複数の柱穴を検出したが、検出状況から主柱穴は4本柱と推定する。柱穴の規模は径20cm、深さ15~25cmを測る。

中央土坑は楕円形を呈する。60cm×50cm、深さ30cmを測り、断面は逆台形である。この土坑の南側に浅いくぼみがあり、厚さ5cm程度の炭の集積が認められた。くぼみの規模は90cm×20cmを測る。炭の一部は中央土坑に流れ込むような状況で堆積していた。所謂「I○土坑」に類する構造であろう。

土坑

SK01(図版3 写真図版3・4)

他の遺構との重複はない。平面は東西に主軸をもつ楕円形を呈する。長径1m、短径0.75m、深さ15cmを測る。埋土上層に土器・石器片を包含する。

SK02(図版3 写真図版4)

東壁際で検出した。東側調査区外へ続き全容は不明である。平面は楕円形を呈し、短径50cmを測る。深さは25cmで断面形は逆台形である。

SK03(図版3 写真図版4)

西壁際で検出した。現況では半円を呈するが、西半は調査区外へ続く。本来は南北に主軸をもつ楕円形となるのであろう。検出面からの深さは40cmを測る。埋土中・下層に土器片を包含する。

SK04(図版4)

調査区南半で検出した。柱穴と重複関係にあり本遺構が切られている。平面は長楕円形を呈し、西端

付近は消滅している。長さ2.35m、幅1mを測る。断面形は皿状で深さは5cm程度と浅い。

SK05（図版4 写真図版4・5）

調査区南半で検出した。平面は南北に主軸をもつ楕円形を呈する。長径0.9m、短径0.5m、深さ15cmを測る。断面形はU字状を呈する。南半部から土器・石器片が集中して出土した。

SK06（図版4 写真図版6）

調査区北半で検出した。平面は長方形を呈し西側は調査区外へ続く。検出長2.3m、幅1m、深さ20cmを測る。埋土が他の土坑のものと異なることから、中世以降の水田に伴うもの可能性がある。

SK07（図版4 写真図版5）

調査区南部で検出した。柱穴と重複し、本遺構が切られている。平面は東西に主軸をもつ不整な隅丸方形を呈する。長さ1.1m、幅0.95mを測る。断面は逆台形を呈し、深さは50cmである。埋土の上・中層に20cm以下の礫とともに土器片を包含する。

SK09（図版5）

調査区中央付近で検出した。柱穴と重複し本遺構が切られている。平面形は東西に主軸をもつ楕円形であり、長径1.1m、短径0.85mを測る。断面は皿状を呈し底は平坦である。深さは10cmと浅い。

SK10（図版5 写真図版6）

調査区南半で検出した。SD01と重複し本遺構が切られている。本来の平面は円形を呈したのである。径0.95m、深さ20cmを測る。底は平坦である。下層に土器を包含している。

SK12（図版6）

調査区中央付近の西壁際で検出した。遺構の大半は調査区外へ広がるため全容は不明である。SD02と重複し、本遺構が切られている。深さは15~20cmで底部は凹凸がある。

SK13（図版5）

調査区中央付近で検出した。他の遺構との重複は認められない。平面は東西に主軸をもつ楕円形を呈する。長径1.15m、短径0.5mを測る。深さは30cmで断面は箱掘り状である。埋土下層には炭を含み、底の東端付近に15cm以下の礫が4点集積している。

SK14（図版6）

調査区中央付近、東壁際で検出した。柱穴と重複し、本遺構が切られている。平面は東西に主軸をもつ楕円形になると思われる。径80cm、深さ35cmを測る。断面は逆台形を呈する。

SK16（図版5 写真図版7）

調査区中央付近で検出した。溝・柱穴と重複し本遺構が切っている。平面は南北に主軸をもつ隅丸長方形を呈する。長さ1.65m、幅1.35mを測る。深さは50cmであるが、北半は深さ15cmほどのテラス状を呈し、この付近を中心土器片が多量に出土した。

SK17

調査区北半で検出した。他の遺構との重複はみられない。平面は東西に主軸をもつ楕円形である。長径0.9m、短径0.6mを測る。深さは15cmで断面形はU字状を呈する。埋土の上層には炭・焼土が少量混じり、下層には土器片をわずかに包含している。

SX03（図版4）

調査区中央付近、西壁際で検出した。西側は調査区外へ続く。平面は東西に主軸をもつ不整楕円形を呈する。東西長1.55m、幅1.35m、深さ30cmを測る。

溝

SD01 (図版 6 写真図版 6)

南東ー北西方向に直線的にのび、その偏りはN50°Wである。検出長2.5m、幅45cm、深さ50cmを測る。南東端は調査区内で終結し北西側は調査区外へのびる。埋土は水平な堆積をみせる。埋土内より石器片などが出土した。

SD02 (図版 6)

調査区中央付近、西壁際で検出した。大半は調査区外へ広がるためその全容は不明である。検出長2.0m、検出幅40cm、深さ25cmを測る。底はほぼ水平である。

(2) II区の調査

1. 概 要

調査区は市之郷道路の北辺付近に位置する。遺構面は擾乱の影響が大きいが、中央付近で複数の土坑と柱穴を検出している。遺構面は1面のみであるが、重複がみられることから時期幅をもつと考える。

2. 基本層序

I区同様約45cmの盛土がなされ、その下に造成以前の水田面、さらにその下層に旧耕土層が1層ある。遺構面はこの直下である。調査区南部は礫層が隆起しているが北辺付近は灰黃褐色層と質極細砂層の上面が遺構面となる。

3. 遺 構

土 坑

SK01 (図版 9 写真図版 8・9)

調査区北端で検出した。柱穴と重複し、本遺構が切られている。平面形は北西ー南東方向に主軸をもつ長楕円形を呈し、長径2.8m、短径1.1mを測る。断面は浅い皿状を呈し、深さは8cmである。底の中央～南半にかけて土器片が集中している。

SK02 (図版 9 写真図版 9)

調査区北端で検出した。他の遺構との重複はみられない。南半部を擾乱で損なうが、本来の平面形は南北に主軸をもつ楕円形を呈するものと思われる。長径1.0m、短径0.8mを測る。深さは10cmで底面が火熱による赤色が認められる。埋土内には土器片が多く混じる。

SK03 (図版 8)

調査区北端で検出した。他の遺構との重複はみられない。南半を擾乱で損なっているが、本来の平面形は楕円形を呈するものと思われる。東西75cm、南北の現存長45cmを測る。深さは3cm程と浅く、底は凹凸がある。

SK04 (図版 9 写真図版 9)

調査区中央付近で検出した。SK10と重複し本遺構が切られている。平面形は不整な楕円形を呈し、長径2.1m、短径1.7m、深さ30cmを測る。埋土内には土器片の他に20cm以下の礫を包含している。

SK05 (図版 9 写真図版10)

調査区中央部の西壁際で検出した。西半は調査区外へ広がっている。柱穴と重複し、本遺構が切られ

ている。本来の平面形は東西に主軸をもつ長方形で、現長1.8m、幅1.15mを測る。壁面の立ち上がりは急で、箱掘り状を呈する。深さは30cmである。埋土内には炭や焼土が多く混じり、30cm以下の礫や土器片を包含している。

SK08 (図版8 写真図版11)

調査区中央部、SX01北端付近で検出した。平面は東西に主軸をもつ長方形を呈し、東西1.8m、南北1.3mを測る。深さは65cmで断面は逆台形を呈する。埋土には炭・焼土が混じり、最下層には炭化材が集積する。埋土内には石器剥片などを包含する。

SK09 (図版8)

調査区中央部東壁際で検出した。平面は南北に主軸をもつ梢円形を呈し、長径65cm、短径50cm、深さ25cmを測る。断面はU字状を呈し、埋土には炭粒を含む。

SK10 (図版9)

調査区中央付近で検出した。SK04と重複し本遺構が切っている。平面形は東西に主軸をもつ長方形を呈し、長さ1.5m、幅1.0mを測る。断面は浅いU字状を呈し深さは5cm程度である。埋土のしまりが弱いことから中世以降の水田に伴うものと思われる。

SK13 (図版8 写真図版11)

平面は長方形を呈し、SX01と重複する。規模は長さ4.3m、幅1.6mを測る。埋土には10cm以下の礫を多く含む。埋土は礫を多く包含し、その状況からSK10同様後世の水田に伴うものと思われる。

SX01 (図版8 写真図版11)

調査区中央で検出した。SK08、SK13の他に柱穴などと重複し、SK08を切り、SK13や柱穴に切られている。当初住居跡を想定したが調査により不整形の土坑状の落ち込みであることが判明した。規模は南北4.9m、東西3.4m、深さ25cmを測る。埋土は土壤化した上層と粗砂混じりの下層に分かれ、埋土内には土器片の他に15cm以下の礫を多く包含している。

(3) III区の調査

1. 概 要

調査区南西部にあたりI区とは道路をはさんだ西側となる。遺構は柱穴、溝が中央から南部に集中するが、遺構の密度はI区と比較してやや疎らとなる。北部は流路が北東ー南西方向にのび、その北側は礫層が隆起する。この部分では遺構は検出されていない。

2. 基本層序

他の調査区同様50~60cmの厚さで盛土・整地がなされ、その下には造成以前の水田面、さらに旧耕土層が1面認められる。遺構面はこの直下である。遺構面を構成するのは、南部では褐灰シルト～シルト質細砂、北部は褐灰シルト質細砂～極細砂である。本来はこの上面が遺構面となり、断面でもそれを確認しているが、土壤化がすんでいることから、遺構検出はこの土壤化層を削り込んで行っていく。そのため掘削中に土器がまとまって出土した地点があったが、これらは溝や土坑に伴う遺物のうち埋土上層にあったものの可能性があり、本来所属すべき遺構が不明のためSX01~03とした。

3. 遺構

土坑

SK01 (図版11 写真図版13)

調査区中央付近で検出した。平面形は南北に主軸をもつ楕円形を呈し、長径1.6m、短径1.1mを測る。断面は広いU字状を呈し、底は平坦である。深さは14cmある。埋土中には甕などの土器片を包含する。

SK02 (図版11 写真図版14)

調査区中央付近の東壁際で検出した。東側は調査区外へ広がり全容は不明であるが、本来は東西に主軸をもつ長方形を呈するものと思われる。検出長約1m、幅1.15mを測る。深さは20cmで断面は広いU字状を呈する。土坑内より土器片が多数出土した。

柱穴

掘立柱建物や樋を復元するには至っていないが、分布状況から中央付近と南半部の2群として把握できる。流路や溝の埋没後に掘り込まれているが、遺物は埋土内から弥生土器片が出土するのみで、須恵器などの出土が見られないことから、弥生時代に属するものと推定する。規模は径10~30cm、検出面からの深さは10~35cmである。

溝

SD01 (図版11)

調査区南半部で検出した。SD02と重複し本遺構が切っている。北西~南東方向にのび、偏りはN70°~Wある。直線的にのび西端は調査区内で収束し、東側は調査区外へ続く。検出長3.5m、幅40cm、深さ5cmを測る。

SD02 (図版11 写真図版15)

調査区南端で検出した。両端ともに調査区内で収束する。N20°~Eの方向をもち、北半はくの字状に屈曲する。SD01と重複し、本遺構が切られている。長さ4.5m、幅0.5m、深さ10cmを測る。断面形は浅い皿状を呈する。溝内より甕片が出土している。

SD03 (図版11 写真図版14・15)

調査区中央付近の東壁際で検出した。西端は調査区内で収束し、東側は調査区外へ続く。SK01、SD04、柱穴と重複し、本遺構がSK01、SD04を切り、柱穴に切られている。N32°~Wの方向をもち、検出長約3m、幅85cmを測る。断面形は逆台形を呈し、中央部が窪む。深さは20cmである。埋土上層より甕などの土器片が出土している。

SD04 (図版11 写真図版14)

調査区中央付近で検出した。SD05・07、柱穴と重複し、本遺構が切られている。直線的にのびその偏りはN23°~Eである。両端ともに調査区内で収束している。長さ6.8m、幅42cmを測る。断面形は浅い皿状を呈し、深さは6cmである。

SD05 (図版11 写真図版14)

調査区中央付近の東壁際で検出した。SD04と重複し本遺構が切っている。西端は調査区内で収束し、東側は調査区外へ続く。直線的にのびN50°~Wの方向をもつ。検出長約4m、幅30cmを測る。断面形は浅いU字状を呈し深さは8cmである。

SD06 (図版11)

調査区中央付近の東壁際で検出した。柱穴と重複し本遺構が切られている。西端は調査区内で収束

し、東側は調査区外へ続く。直線的にのびN50°Wの方向をもつ。検出長約2m、幅32cmを測る。断面形は浅いU字状を呈し深さは5cmである。

流路（図版12 写真図版16）

調査区北西隅で検出した。北東から南北方向にのびる。西側の肩部は礫層が隆起している。事情により調査は平面検出と断面観察にとどめ、完掘していない。なお溝状遺構SD07は、本流路の最終埋土であると考えられる。埋土内から弥生時代中期以降の遺物が少量出土している。

（4）小 結

今回の調査区は周知の遺跡である市之郷遺跡（仮称姫路駅周辺第3地点）の北辺付近にあたる。調査区北側については確認調査の結果、遺構が認められないか、遺構面が損なわれていることが明らかになっており、今回の調査が遺跡の北端の状況を示すものと思われる。市之郷遺跡はJR山陽本線の高架とそれに伴う市街地再開発により遺跡南半部にあたる鉄道用地内の発掘調査が大規模に行われてきたが、市街地と化した遺跡北半部の情報に関しては乏しいため、調査面積こそ広くはないが、遺構の分布状況など得られた情報は少なくないと考える。

検出された遺構の大部分は弥生時代に属するもので、I区北半およびII区で中世以降の遺構がわずかに検出されたのみである。なお、調査区南東部に伽藍が想定される市之郷度寺に隣接する遺構・遺物は、今回全く検出されなかつた。調査区は過去の調査成果から推定される寺域外ではあるが、遺構検出面はI～III区とともに旧水田層直下であり、伽藍周辺施設を含めた古代・中世の遺構および遺物包含層は一帯の水田化に際して削平され、損なわれた可能性もある。

市之郷遺跡の開始は弥生時代前期とされ、過去の調査では前期末の墓、土坑、溝などの遺構が検出されている。本調査区ではI区SK16、SX03が前期の土器を包含した遺構であり、包含層からも少數ながら土器が出土している。したがって当該期の集落の西端が本調査区付近であり、集落本体はI区東側にあるものと考える。

弥生時代中期後半は市之郷遺跡の盛期の1つであり、遺構・遺物の量が多くなる。遺跡内の広範囲に集落が形成され堅穴住居のほかに大型掘立柱建物も検出されている。本調査区でも主体となる時期であり、今回検出した遺構もその集落の1つとなるのであろう。堅穴住居はI区で1棟検出ただけだが、I・III区では柱穴がまとまって検出され、他にも復元できなかった堅穴住居あるいは掘立柱建物が存在した可能性がある。しかし遺構の密度はI区よりもIII区が疎らになる傾向にあり、前期と同様に遺構の中心はI区の東側に想定され、III区検出の流路付近が集落の西限になるのではないかと考える。流路はIII区の北東側へ延びていくため、I・III区とII区は流路によって隔てられることになり、II区付近には別の集落が存在することになる。流路北岸に立地する集落も西に隣接する商業施設建設に伴う発掘調査では遺構が検出されていないことから、本調査区付近が集落の西限になるものと考えられる。

過去の調査では集落の周辺部で円形周溝墓、周囲に木棺墓などが検出され、墓域を形成している状況がみられる地区もあった。本調査区内でも土坑や溝から比較的多くの土器の出土をみた。しかし溝は東西方向に延びるものが多く方形周溝墓を想定しがたい。また土坑も完全に復元できる土器が出土する状況がみられないため、施設土坑と考えられ、土器棺墓は想定しがたい。

後期以降は、遺構・遺物ともには認められず、この時期に調査区周辺に集落が営まれた可能性は低く、生活域が他へ移動したものと考える。

IV 出土遺物

(1) 土 器

1. I 区遺構出土遺物

SK01出土遺物（1～7）

1は口径11.0cmの小形の壺口縁部である。外傾し折り曲げて口縁部を形成している。やや下がったところで端面になっており、斜格子文の上に小さな円形浮文を添付している。内面は灰黄褐、外面にはぶい橙～黄灰を呈しており、石英・長石・チャートの砂粒を含んでいる。ヨコナデで仕上げる。

2は外傾し緩やかに内湾し端部丸い。最大径のところに径4mm前後的小孔を穿っている。2個残存している。内湾する部分はユビ成形で圧痕が多く残っている。内面はハケ整形のちナデ仕上げ。外面はナデである。端部外側に2条の凹線が認められる。下半は残っていないが台が付くものと思われる。内面にはぶい橙、外面にはぶい黄橙である。クサリ縁を含む。

3の体部は内湾し端部は水平に肥厚する。ナデ仕上げで端部周辺のみヨコナデを施す。外面には黒斑が見られ、灰黄橙～ぶい黄橙をしている。砂粒含む。

4は把手部である。手探ねで断面形は不定形である。ぶい橙で砂粒含む。

5は直立に近く内湾する体部からくの字に外傾し端部内外に肥厚している。端部中央に浅い凹線があり、端部近くは上部に僅かに反っている。体部内外面ともにハケ整形からナデ調整で、口縁部はヨコナデである。内面は橙、外面にはぶい黄橙で、器肉は黒褐のサンドイッチ状になっている。石英・チャートなどのクサリ縁多く含んでいる。

6は平底で外傾する体部に続く。底径7.1cmとやや大きい。強く被熱している。内面は浅黄橙、外面は赤橙～灰黄褐である。外面はヘラで粗く調整しており、内面と底面はナデである。石英・チャートの砂粒含んでいる。

7も底部で突出平底から外傾している。底は平たいが、僅かに上がっている。外面はヘラミガキであるが、細かいものではない。内面は黄灰、外面にはぶい黄橙で器肉は黒褐である。

SK02出土遺物（8～11）

8は外側に開いて端部は湾曲して僅かに垂下させ端部は大きく肥厚している。端部は面にならず丸みを持っている。端部には3条の凹線があり、上下に幅・長さの異なる割み目が施されている。端部中央には円形浮文を貼り付けている。1周せず単位があるようで、残存部では2個並んでいる。ぶい黄褐～黒褐でヨコナデ仕上げである。

9は前期の壺体部である。内傾し2条の沈線と貼り付け突帶を有する。ナデ調整で、内面灰褐、外面褐灰で石英・チャートの砂粒多く含む。

10は直口壺口縁部で端面に1条の凹線がある。外面にも5条の凹線が施されている。ナデ仕上げののちヨコナデが行われている。灰黄褐～ぶい橙で砂粒含んでいる。

11は鉢もしくは高杯口縁部である。内湾し端部は内外に肥厚し、端面は水平で上を向く。端面には2条の凹線があり、外面にも4条の凹線が施されている。ぶい橙で、器肉と外面の一部は黒褐である。ヨコナデで仕上げる。

SK03出土遺物（12～14）

12は直線的に開く体部から短く屈曲する口頭部に続く。端部は丸く肥厚している。内外面ともにハケ整形からナデ仕上げで、口縁部はヨコナデである。内面は灰褐、外面は灰黄褐で砂粒含む。外面には煤付着している。

13は底径10.5cmと大きめの壺底部である。平底から外傾している。内面はユビ成形で黒褐。外面は灰黄褐でヘラミガキを施す。黒斑認められ、クサリ纏含む。

14は外傾する壺体部である。にぶい橙～にぶい黄橙を呈し、クサリ纏多く含む。直線文と波状文が交互に文様帶となる。

SK05出土遺物（15～16）

15は平底から内湾する体部になる。ユビ成形ののち、内面はケズリ、外面はヘラミガキで調整する。底面もナデである。内面は浅黄橙、外面はにぶい橙で砂粒多く含む。煤付着している。

16は接合部はないが、団上で復原した壺である。底部は平たく外反し倒卵形となる。器高は高くスマートである。最大腹径は上位にある。体部上半は内傾し、くの字の頭部となる。内面の接線はやや甘く短く外反する。端部は丸く、口縁部はヨコナデで仕上げる。内面はヘラケズリで薄くしており、全体的にナデ仕上げである。外面はハケ整形からナデ仕上げであるが磨滅している。にぶい黄橙～にぶい橙で砂粒多く含む。

SK06出土遺物（17～22）

17は外反する壺口縁部で端部は下側に肥厚している。端面には大きな刻み目が施されている。ヨコナデ仕上げであるが磨滅している。器表はにぶい黄橙で、器内は黒褐で、砂粒含む。

18は台付鉢口縁部で内湾し端部は内外に水平に肥厚する。ヨコナデで仕上げており、外面はヨコナデによって幅広の凹線状になっている。クサリ纏含み、にぶい黄橙～灰白を呈する。

19は壺か水差しの把手である。ユビ成形で内側はケズリを施している。にぶい橙～橙である。

20は直線的に開く体部で内面はケズリ、外面はハケ整形かと思われる。色調は灰黄褐で磨滅著しい。口縁部は短く外傾し端部は丸く肥厚する。端部は面となり1条の凹線があるかもしれない。

21はバチ形の口縁部で端部は上部につまみ出すように肥厚する。内外面ともにハケ整形でナデ調整を加える。口縁部はヨコナデで仕上げる。にぶい黄橙～にぶい赤褐で砂粒含む。

22は大形の壺で内湾する体部はハケ整形である。ナデ調整を加えているようであるが、磨滅している。口縁部は短く外傾し端部は内外に肥厚する。内側の方がより肥厚している。内面は灰白、外面は淡赤橙で、胎土は緻密だがクサリ纏含んでいる。

SK07出土遺物（23～41）

23は内面に突帯を有する壺口縁部で、にぶい橙をしている。外傾し突帯部から垂下し端部は内外に肥厚する。端部は中央が窪んでおり、そこに細長い刻みを装飾する。突帯端部にも刻み目が入れられている。ナデからヨコナデを行う。

24は内湾する体部から口縁部で端部は水平に内外に肥厚している。端面は平坦でヨコナデで仕上げる。外面には3条の貼り付け突帯が付加される。浅黄橙～にぶい橙でクサリ纏含む。

25は垂下する壺口縁部の破片である。内面に5条の波状文が施され、ヨコナデである。にぶい黄橙で砂粒含む。

26は壺体部の破片である。8条1組であろう4組の直線文帶である。外面はハケ整形で内面はナデ仕

上げ。灰黄褐で砂粒含む。

27は壺頸部である。1条の貼り付け突帯で指頭圧痕が付けられている。外面はハケ整形で、にぶい橙を呈する。砂粒含む。

28は壺体部で2組の波状文が認められる。にぶい黄橙～灰白でハケ整形である。

29は内湾する体部から矧く外反する口縁部となる壺である。端部は上方につまみ上げており丸く納めている。薄く仕上げているが、磨減している。口縁部はヨコナデである。色調は灰白～にぶい黄橙で砂粒含む。

30は直線的に広がる体部から外反する口縁部になる壺である。端部は上方に大きくつまみあげている。内外面ともハケ整形で、口縁部はヨコナデ仕上げ。褐灰～にぶい黄橙である。

31は内湾する体部から矧く外反する口縁部を持つ大きめの壺である。内面は斜め方向のハケ整形で、外面は板ナデをナデで仕上げる。端部は内外に肥厚しておりヨコナデである。灰白～にぶい黄橙で砂粒多く含む。

32は内湾ぎみに外傾する体部から外反する口縁部を持つ壺である。端部は内側を上方につまみ上げている。内面はハケ整形でにぶい黄橙、外面はナデでにぶい橙である。口縁部はヨコナデで砂粒含む。

33壺底部で外面に剣突文ふうのヘラ記号がある。内面はナデで褐灰、外面はハケ整形でにぶい橙～黄灰である。

34～36も壺底部である。内面ヘラケズリで外面ミガキである。底は上げ底ぎみである。

37は鉢口縁部で内湾する体部から水平に聞く口縁部になる。端部に割み目を施す。内外面ともハケ整形で口縁部はヨコナデである。にぶい橙～灰白でクサリ織含む。表面磨減顯著。

38も鉢口縁部で37と似通っている。ハケ整形で口縁部はヨコナデで灰黄褐を呈する。内湾する体部から水平に聞く口縁部である。水平に肥厚するが内側にも肥厚している。2次焼成を受けている。

39は鉢口縁部で内湾する体部に内外に水平に大きく肥厚する口縁部となる。端部上面は平坦でなく中央が窪んでいる。内面は斜め方向のハケ整形で、外面は斜め方向のハケ整形からヘラミガキで仕上げる。にぶい橙～灰白で砂粒多く含む。高杯かもしれない。

40は高杯筒部である。外反しており、円板充填法である。内面は絞り目残りヘラケズリ、外面はミガキである。にぶい橙で砂粒多く含む。

41は高杯もしくは鉢などの脚部である。円板充填法で内面はナデ整形である。外面はハケ性尾系からミガキかと思われる。にぶい黄橙で砂粒含む。

SK08出土遺物（42～43）

42は鉢口縁部で、内湾する体部から端部は面となり内外に肥厚する。強いヨコナデで体部外面は凹線状になっている。器表はにぶい橙で器肉は明褐灰～灰白で、砂粒多く含む。表面磨減顯著。

43は脚部で42と同一個体かもしれない。外反する脚部で端部は肥厚する。体部はナデで端部はヨコナデで仕上げる。灰白を呈している。

SK10出土遺物（44～46）

44は外反する大形の壺口縁部である。端部は内外に肥厚しヨコナデである。内面は灰白、外面はにぶい橙で砂粒多く含む。

45は壺体部で、外面はハケ整形のち波状文を施している。2带ありそうである。外面は暗灰黄。

46は壺底部で平底から外傾する。内面はにぶい黄橙でヘラケズリからナデで整形している。外面はに

ぶい黄橙～灰白で細かいヘラミガキで仕上げる。底面はナデ調整。

SK13出土遺物（47～49）

47は緩やかに屈曲しつつ外傾する口縁部で、端部は内外に肥厚し刻み目を有している。ヨコナデで仕上げており。灰黄褐～オリーブ灰をしている。

48は細かい波状文を施した壺体部の破片である。12条以上認められる。にぶい橙でナデ仕上げ。

49は平底の壺底部である。内面と底面はケズリ、外面はミガキである。

SK14出土遺物（50～51）

50は壺口縁部で内傾する体部から甘い稜線となる頭部から外反する口縁部になる。端部は肥厚しており、刻み目を付けている。刻み目は細長いもので全周している。ヨコナデで、内面はにぶい黄橙、外面は暗灰である。細砂粒含んでいる。

51は平底から内湾する壺で、内面はユビ成形である。灰白～褐灰であるが、器表は淡赤橙である。2次焼成を受けている。

SK16出土遺物（52～74）

前期の土坑で多くの土器が出土している。一括出土として良好な資料である。74を除くとすべて壺である。52は外反する口縁部で端部やや肥厚している。内面は灰～灰白、外面は浅黄で、磨滅している。

53は頭部に7条の沈線を有する。ユビ成形からナデしている。頭部から口縁部へ外反しており、端部は角張りぎみで端面に1条の沈線がある。灰白～浅黄橙で砂粒多く含む。

54も外反する頭部は端部は角張り1条の沈線を持つ。細かい刻み目を沈線の上に施している。頭部は僅かに厚みを増している。外面には5条の沈線があり、ミガキを施しているようである。にぶい橙～にぶい黄橙で砂粒多く含む。

55は外反する口部頭部で6条の沈線を持つ。頭部が薄く1度厚くなつてから端部は尖りぎみに薄くなる。灰白～にぶい黄橙である。

56は体部上半で角張りぎみである。最大腹径上に4条の沈線を施し、その上に5条の沈線で飾り、最上部の沈線を消さないように三角形の刺突文を巡らせている。ユビ成形からナデである。灰白～にぶい黄橙をしている。

57は突出平底から倒卵形の体部になり、外反する頭部につながる。口縁部は残存していない。頭部も接点はないが同一個体と思われる。2条の貼り付け突帯がある。緩やかな三角で低い突帯である。ユビ成形からナデ仕上げで外面は全体にヘラミガキが施されている。体部下半に黒斑があり、にぶい黄橙である。

58は外反する壺口縁部で端部は角張る。灰白～にぶい黄橙でナデ仕上げであろう。磨滅顕著。

59は内湾する壺体部で外面に3条の沈線がある。内面は灰白～黄灰、外面は灰白～灰黄褐で砂粒多い。

60も外反する壺で頭部に3条以上の沈線がある。外面はにぶい黄橙でハケ整形であろう。

61は直線的に内湾する壺体部で肩部に3条の沈線が施される。外面はハケ整形からミガキを施し、灰白～にぶい黄褐を呈する。内面は灰白である。

62はやや肩の張る最大腹径36.4cmを測る球形の体部から外反するものの長めの頭部に続く。口縁部は外反し端部は肥厚ぎみに角張り、端面に大きめの刻み目ふうの刺突文を施す。施文によって端部が被打っている。頭部には中央に3条の沈線を施し上下に各々3条の貼り付け突帯を有する。突帯には刻み目を

付けたかもしれないが磨滅のため明確でない。外面はハケ整形がナデ仕上げでにぶい黄橙～灰白、内面は灰白～灰で砂粒多く含む。

63はなで肩の壺体部上半である。内済しており、肩部に6条の沈線がある。外面はミガキであろう。内面はユビ成形で痕跡強く残る。色調は灰白で砂粒多く含む。

64は平底から側卵形の体部になる。頭部から上は欠失している。ユビ成形からナデ仕上げで頭部下内面にはユビの痕跡が明瞭に残っている。肩部と最大腹径上部に4条沈線が各々施されている。外面は全体に丁寧にミガキで仕上げている。

65は大形の壺で体部の接合部はないが同一個体である。口縁部は残存していない。底部は突出平底から内済する。ユビ成形からナデ整形で外面はミガキと思われる。底面は粗いナデである。底面付近に黒斑がある。内面は灰白～褐灰、外面はにぶい黄橙～明褐灰である。頭部は外反し5条の沈線がある。1本づつヘラで描いている。頭部から肩部にかけてはヘラミガキで仕上げている。

66は平底の大形壺で、直線的に聞く体部に続く。にぶい黄橙～灰で、ナデ仕上げであろう。

67は外反する頭部から口縁部で端部は角張り、1条の沈線を施してから幅広の刻み目をしている。頭部には6条の山形になる貼り付け突帯がある。頭部は綫方向のハケ整形から突帯を付加している。内面は褐灰～にぶい黄橙をしており、ナデ仕上げから突帯を付けている。口縁部に付くように内面に2条の貼り付け突帯を付けている。外面は橙～浅黄橙である。

68も口縁部内面に突帯で装飾する壺である。口縁端部を欠いている。内面の突帯は2条あり、刻み目が付けられている。頭部は外反し4条1単位の貼り付け突帯を上下2帯に付けている。体部は緩やかに内済し、肩部に3条1単位の貼り付け突帯が2単位ある。内面はユビ成形やナデ整形をしているものの指痕跡は明瞭に残る。粘土紐も明瞭に残っている。色調は灰白で砂粒多く含む。

69は中形の比較的残りの良い壺である。平底から長胴に内済する体部で頭部は直立する。口縁部は欠失しているが、内面には裏舟の貼り付け突帯が2条付いている。頭部には6条の刻み目を付けた貼り付け突帯がある。頭部内面には絞り目があり、体部内面には粘土紐の継ぎ目が明瞭に見られる。肩部には刻み目を付加した4条の貼り付け突帯がある。上下2条ずつで刻み目の位置が異なっている。上2条刻み目がある下2条には刻み目はなく、11～12個の刻み目を付けてから両側はなくなる。24.4cmの最大腹径部分にやはり刻み目の付いた貼り付け突帯が4条認められる。上部の突帯と同じく上下で刻み目を付ける位置が交差になっている。その下には逆U字の突帯は波状文様に粘土紐を付けて装飾している。内面は灰白～褐灰、外面は黄灰～灰白で砂粒多く含む。

70は3条の貼り付け突帯を有する壺頭部である。緩やかな頭部で、棱線は認められない。外面はハケ整形であるが、山形文様に整形している。内面は工具の痕跡が残る。灰白で砂粒多く含む。

71は壺胴部で内済し7条の貼り付け突帯が付く。内面は灰白、外面はにぶい橙である。

72は外反する壺口縁部で、内面に突帯で円形の文様を描いている。端部は中央が尖り気味である。3重弧になり、内面は灰白、外面は黄灰となる。

73は突出平底で内済する体部になる。ナデ仕上げで、内面は灰白、外面は浅黄～灰である。

74はSK16出土唯一の壺である。如意状の口縁部で端部は丸く、刻み目が施されている。頭部はユビ成形によって形成している。頭部に1条、体部に5条以上の沈線がある。ナデ仕上げで砂粒多く含む。にぶい黄橙～灰白をしている。

SK17出土遺物（75）

古代末から中世の土師器と思われる。楕底部ではないかと思われ、平底は斜切りではないかと思われる。にぶい橙でナデ仕上げ、底部の一端はヨコナデである。

SK19出土遺物（76）

土師質の小皿である。ロクロナデで整形し、底面はヘラ切りである。内面はにぶい橙、外面はにぶい黄橙で平底から外傾する口縁部で端部は尖る。今回調査した中で最も新しい遺物である。

ピット出土遺物（77~83）

77はP03出土で鉢口縁部である。内湾する体部から口縁部になり、端部は水平に内外に肥厚する。内面はにぶい橙で外面は灰白である。端部周辺はヨコナデで仕上げる。

78は直口壺もしくは水差しで内湾する体部から直立する頸部になる。端部は内側に傾くように肥厚させている。内傾する端面になっている。内面は灰白～にぶい橙で、ユビ成形からナデ仕上げ。外面はにぶい橙でナデ仕上げ、口縁部はヨコナデ。頸部に5条以上を1単位とする直線文帯を2帯設け、体部に向かって斜格子文、そしてその下に撚刺突文を列点文状に施す。口縁部は10条の凹線文である。

79はP05から出土しており、壺底部である。上げ底で底面は薄く、体部は外傾する。内面は褐灰～灰白でユビ成形からハケ原体を止め工具痕跡が残るハケ整形である。外面は灰白～灰黄褐でユビ押さえ。

80はP30出土の加飾された壺口縁部である。垂下し端部は内側に肥厚する。上面には貼り付け突帯を巡らせ、端部には刻み目を付ける。粘土紐を貼った棒状浮文を2個単位で貼付している。浮文部分には刻み目がないので、貼付してから刻み目を施している。垂下部分には端部近くに円形に近い扇形文を施し、その後内側突帯近くに径の大きい竹管文を巡らせていている。端面にも同じ竹管文を施す。灰白～にぶい黄橙でヨコナデである。砂粒多く含む。

81・82はP33出土で壺口縁部である。81は外反し端部内外に肥厚し端面となる。外側に刻み目を有する。褐灰～灰白で、ハケ整形で端部周辺はヨコナデである。82は外反しない常に肥厚しヨコナデである。

83はP41出土で壺体部である。内湾しており、内面はハケ整形、外面はハラミガキを施している。黄灰～灰白をしており、文様は上から斜格子文・径の大きい竹管文・直線文となっている。

SD01出土遺物（84~92）

84は端部が垂下する壺口縁部で、上面と端面に竹管文を施している。端面上部に刻み目をしている。浅黄橙で砂粒含む。

85は壺口縁部であるが端部を欠いている。内面に2条の突帯を付け刻み目を施している。ヨコナデで内面はミガキも行う。にぶい黄橙。

86は把手部で、断面隅の取れた台形状となり手捏ねである。にぶい黄橙をしている。

87は壺頭部で内傾する体部から外反する口縁部になる。ハケ整形で頭部に突帯を貼り、指圧痕で文様としている。灰黄褐で砂粒含む。

88は平底から内湾する体部に続く壺でユビ成形から底面も含めてハケ整形している。淡黄～にぶい橙。

89は器内の薄い平底から外傾する壺底部でナデ整形から外面はミガキを行う。浅黄橙～灰白。

90は大形の壺口縁部で内湾する体部から短く外反する口縁部になる。頭部内面は棱があり、端部は内側につまみ上げている。ハケ整形で口縁部はヨコナデ。灰黄褐で砂粒含む。

91も壺口縁部で内傾する体部から外傾し端部は大きくなっている。ハケ整形で口縁部はヨコナデで灰黄掲である。

92は平底から外反する体部となる壺底部である。にぶい橙～灰黄掲をしており、内面は板ナデで外面はミガキか。

S402出土遺物（93）

壺底部で平底から外傾する。ナデ整形で、外面はハケ整形である。にぶい黄橙だが底面だけ色調異なる。

S401出土遺物（94～107）

94は壺肩部で最大腹径57cmを測る大形品である。内湾する体部で肩部に2条の貼り付け突帯に刻み目を付ける。上の突帯に接して直交して棒状浮文（刻み目付き）を貼付する。ナデ整形で外面はミガキで仕上げる。外面はにぶい橙で、内面は橙～にぶい掲である。

95も壺胴部で38.4cmの最大腹径部分に2条の刻み目を持つ貼り付け突帯がある。内面はにぶい橙で外面は灰黄掲を呈し、ナデ仕上げ。

96～101は壺体部の文様片である。96は内湾し4条1単位である櫛描き斜格子文の上に円形浮文で飾っている。97は外反し、ハケ整形のどちらに直線文と波状文を描いている。にぶい黄橙で、内面はユビ成形からナデ仕上げ。98は上に直線文、下に波状文が施されている。僅かに内湾し、にぶい黄橙をしている。99は2条の貼り付け突帯がある。刻み目も付加されていたかもしれない。100は内湾し、内面はにぶい黄掲、外面は灰黄掲～にぶい黄掲をしている。ハケ整形のうち斜格子文を施し、刻み目を持つ2条の貼り付け突帯を付けている。その上には円形浮文の剥がれた痕跡がある。101は斜格子文を施す小片でナデ整形で、内面は黒、外面はにぶい黄橙である。

102・103は壺底部で、内面はユビ成形からナデ・ハケ整形、外面はミガキで仕上げている。102の外面はにぶい黄橙、内面は黄灰である。103は底径14.1cmとやや大きめの底部で内面はにぶい橙、外面はにぶい黄橙をしている。

104～107は壺である。104は短く外反する口縁部で内面はケズリのうちナデ整形で灰黄掲～橙、外面は橙でハケ整形のうちナデしている。端部周辺はヨコナデで端部は角張りぎみである。105は口径34.0cmと大形で内傾する体部から外反する短い口縁で端部は内外に肥厚し端面となる。内面は灰白～黄灰でヘラケズリからナデである。外面はにぶい橙でナデ整形である。口縁部はヨコナデ。106は外反しながら水平に開く口縁部で端部は丸く内外に肥厚する。ヨコナデで、内面は褐灰、外面は灰黄掲を呈している。107は底部で底面の器壁は薄く、上げ底ぎみである。ケズリのうち外面は粗いミガキで仕上げている。底面もナデしており堀が付いている。体部は外反し、内面は灰黄掲、外面は橙～にぶい橙である。

SX03出土遺物（108～111）

4点とも壺で、108は5条以上の突帯を有する外反している頸部である。にぶい黄橙で外面にはミガキも見られる。109は外反する頸部で11条以上の沈線を縱方向のハケ整形のうち施す。内面はナデ仕上げでにぶい橙をしている。110は不安定な平底から外傾しており、灰白～にぶい橙で外面はミガキをしている。111は底径19.2cmに復原される大形の底部である。底面は平坦で器壁も1.8cm前後と厚い。ナデ仕上げで、にぶい橙～橙をしている。

2. II区遺構出土遺物

SX01上層出土遺物 (112~126)

112は外反する壺口縁部で端部は大きく肥厚し下方向に重ねる。端部には5条の凹線を施し円形浮文を付けている。全体に磨滅しているが、ヨコナデでにぶい黄橙～灰白を呈する。細かい砂粒含む。

113は垂下する口縁部を持つ壺で端部は内外に肥厚している。端面には円形浮文が付加される。ヨコナデでにぶい橙である。

114は外傾する広口壺で端部は角張り、内側に肥厚する。端部下に2条貼り付け突帯を回し、刻み目が突帯に施されている。内面はハケ整形で、外面はミガキと思われる。端部周辺はヨコナデで、にぶい橙をしている。

115は把手の付くもので片口になっている。把手自体は外れており、118の把手が同一個体で付くかもしれない。内面は板ナデでにぶい橙、外面はハケ整形で浅黄橙、口縁部はヨコナデ。体部に孔を開けて把手を挿し込んでいる。端面に沈継がある。

116は内湾する体部から口縁部で端部は丸く納めている。イイダコ壺のような形態を探るが断定しかねる。細頸壺などかもしれない。内面はにぶい黄橙～にぶい橙で細いヘラでなで上げている。端部のみヨコナデで仕上げる。外面は灰白である。

117は僅かに内湾ぎみに外開きの直口壺か無頸壺口縁部であろうか。端部は角張り水平になり内外に肥厚する。内面は黄灰～にぶい黄橙で細かいハケ整形である。外面は灰黄褐～にぶい黄橙で粗いハケ整形で上下2段に剥突文を押している。端部周辺はヨコナデ。

118は把手部である。手捏ね断面長楕円形である。灰白～にぶい橙で厚みは1.2cmとなる。

119は無頸壺口縁部で内湾しており、端部は面となり内外に肥厚する。内側に向かって面をなしており、端部外側には刻み目を付ける。端部下に2条の断面三角形の突帯を巡らせ、やはり刻み目を付けている。内面は浅黄橙で外面は灰白である。

120も無頸壺口縁部小片である。内湾し端面は内側に向いている。端部は内外に肥厚し、外側端部下には2条の突帯をつける。ヨコナデで仕上げ、刻み目は有さない。にぶい橙である。

121は平底から外傾する壺底部である。内面はユビ成形からナデしているが、指圧痕明瞭に残る。オリーブ黒～褐鉢をしている。外面は灰白～にぶい黄橙で板状工具を使って整形している。

122は頭部の短い壺で頭部に指圧痕の付いた突帯を巡らす。体部は直線的に開く。口縁部は短く内外に肥厚する端部に統く。端部に2条の凹線を巡らせ上下2段に小さい円形浮文を付ける。灰白～にぶい黄橙で砂粒多く含む。

123はくの字で端部は上方につまみ上げる。端面に1条の凹線がある。灰白～褐鉢で砂粒含んでいる。

124は壺底部で平底から外傾する。内面はにぶい黄褐～灰でヘラケズリ、外面は暗灰黄～オリーブ黒でヘラミガキである。底面はナデ仕上げ。

125は如意状に近い頭部内面の稜線が甘い壺である。端部は丸く肥厚している。浅黄橙～灰白で外面には黒斑が認められる。内面はケズリ、端部周辺はヨコナデである。

126は脚台部で外反しており、端部は角張り、磨滅著しい。にぶい黄橙～にぶい褐を示す。

ピット出土遺物 (127~130)

127はP03出土で内湾する体部から短く外反する口縁部になる。端部はつまみあげている。にぶい黄橙で外面には黒斑がある。内面はハケ整形、外面はナデ、口縁部はヨコナデである。

128はP05出土で端部が重れる壺口縁部である。端部は肥厚し、端面に刺突による長い刻み目を羽状に施し、中央に円形浮文を付けている。にぶい掲でヨコナデである。

129はP19出土で内済する体部から外反する口縁部になる壺口縁部である。端部は内側に肥厚しつまんでいる。にぶい黄橙で、外面はハケ整形、口縁部はヨコナデ。

130はP31出土で細頸壺であろう。反りぎみに外傾し端部周辺は厚くなり角張る。外側端部には刻み目が入れられている。端部下に細く高い突帯が1条存在する。橙～灰黄掲で端部周辺はヨコナデ。

SX01出土遺物（131～137）

図化した7点は前期の壺136を除いた6点すべて壺である。131は垂下する口縁端部で上部には突帯が付いている。にぶい黄橙で磨滅著しい。端部は下方に肥厚し断面三角形になる。

132は外反する口縁部で端部は角張る。にぶい黄橙で端部周辺はヨコナデである。

133は頭部で外面に3条の貼り付け突帯が巡る。貼り付け後ヨコナデで仕上げている。口縁上端に突帯を付け、そこから垂下する口縁部が付くものと思われるが残存していない。灰白～にぶい黄橙。

134は体部の破片で、内面はハケ整形。外面には7条の波状文と8条の直線文が残る。さらに上下にも文様帯が続いているようである。にぶい橙で砂粒含む。

135も文様のある体部で、外面には黒斑がある。残存部上から9条波状文～8条直線文～9条波状文～8条直線文～7条以上は状文となっており、下の2帯の上に竹管文が施されている。外面は縱方向のハケ整形で、内面はナデである。灰黄掲を呈する。

136は弥生前期の壺口縁部である。如意状口縁で端部は尖りぎみに丸い。3条の沈線がある。橙～にぶい橙で砂粒多く含む。小片のため、口径の復原は困難である。

137は僅かに上げ底となり体部は外傾する。磨滅している。灰白で砂粒含む。

SK01出土遺物（138～141）

138は大きめの壺で頭部から上を欠く。平底から稍円球形の体部になる。ユビ成形からナデ整形で、外面はハケ整形からナデである。内面は灰～灰白、外面はにぶい掲～にぶい橙である。最大腹径38cmの上である肩部に5条の貼り付け突帯があり、さらに上に間をおいて4条の貼り付け突帯がある。

139は頭部で8条の貼り付け突帯がある。比較的間を開けて突帯を付けている。体部にヘラ先で先に印を付けて、そこに突帯を回している。橙で、外面はハケ整形している。

140は如意状口縁の壺で端部は丸い。3条と少し開けて3条の計6条の沈線が施されている。外面はにぶい黄橙、内面は灰白でナデ仕上げ。

141はやや角度の甘いL字状口縁の壺である。端部は丸い。直線的に底部に向かう体部で角度は緩やかである。残存部までで16条の沈線が認められる。上から12条と残存部下4条の間は少し間隔が広くなっている。内面は灰白～浅黄橙、外面はにぶい黄橙で砂粒多く含む。磨滅のため端部の刻み日の存在は不明瞭。

SK04出土遺物（142～153）

142は内傾する体部から外反して口縁部に続く。端部は上に尖るように角張る。頭部に2条の沈線がある。外面はハケ整形で、灰白～にぶい黄橙をしている。

143は8条の沈線を持つ壺体部である。外面はにぶい橙でナデ整形、内面は灰掲でナデと思われる。

144は鉢口縁部であろう。端部角張り肥厚し、外側に刻み目を有する。1条の沈線があり黒斑認められる。外面はにぶい黄橙～灰、内面は浅黄橙。

145～147・152・153は底部である。145は平底から外傾する小形の底部で、外面浅黄橙～灰、内面灰白で、黒斑がある。146は平底から外反する。外面は灰白～黄灰で縦方向のハケ整形、内面はにぶい橙でナデ仕上げ。底面未調整。147は底径14.9cmと大きめの平底で中央がやや上がっている。上がった部分はナデ整形によるもので、周囲は未調整である。体部は外傾しナデと思われる。外面はにぶい黄橙～暗灰で内面は灰白である。152は平底から外傾する。内面はにぶい褐色で外面は橙～浅黄橙でナデ整形。底面未調整。153は焼成後に底部穿孔している。上げ底から外傾する体部で外面は橙で縦方向のハケ整形、内面は浅黄橙である。

148～151は壺口縁部で如意状で端部に刻み目を持つ。148は7条の沈線が体部に見られる。直線的な体部で端部は丸い。外面は橙、内面は浅黄橙でナデ整形である。149は内傾する体部で8条の沈線がある。端部は角張りぎみでにぶい黄橙～褐灰をしている。150も直線的に延びる体部で外面ハケ整形のうち8条沈線を施す。暗灰～にぶい黄橙で内面はナデである。口縁部は短く折り曲げ、端部角張る。151は直線的な体部で8条の沈線がある。浅黄橙～にぶい黄橙でナデ整形である。

SK02出土遺物（154～155）

154は外反する頭部から短く水平に開き、端部内外に肥厚する。灰白を呈しヨコナデで仕上げる。

155は頭部に幅広の突帶を有し、頭部に指頭圧痕で押印して文様とする。内湾する体部から外反し端部内外に大きく肥厚する。淡黄～橙で口縁部はヨコナデ、体部はナデである。

SK05出土遺物（156～173）

156は復原して完形となった小形壺である。平底から最大腹径の張った倒卵形の体部、外反する口縁部となる。端部は肥厚ぎみに丸い。ユビ成形から体部内面上半はナデ、下半はハケ整形する。外面はハケ整形からミガキであろうが、磨滅顯著で器表が剥離している。頭部のみハケメがよく残っている。口縁部はヨコナデでにぶい橙～橙をしている。

157は大きく外反する壺口縁部で端部の一部を欠く。にぶい褐色～にぶい橙を呈しヨコナデで仕上げる。

158は外反する口縁部で垂下ぎみに開いている。内面には1条の突帶を付ける。頭部にも2条の貼り付け突帯が付く。にぶい黄橙～橙を呈しヨコナデで仕上げる。

159は口径31.5cmと大形の鉢（もしくは無頸壺）で内湾し端面は水平で肥厚する。外面に高めの突帶を3条付ける。3条の両端2条には刻み目が認められるが、すべてに施文されていたと思われる。明黄褐色でヨコナデ仕上げである。

160～167は壺体部の文様片で、大半はにぶい黄橙～橙を呈する。160はハケ整形から斜格子のうちに7条以上の直線文を施す。161は7条以上の波の大きな波状文である。162は細かい原体を使用している。上から10条以上の波状文、20条以上の直線文、10条以上の波状文となっている。上の2帯は接しており、波状文の方が後に施文している。163も細かい原体で13条以上の波状文と6条以上の直線文が施される。164はハケ整形のうちに9条以上の直線文、8条以上の波状文、7条以上の波状文を施し、上2帯の間に竹管文を配している。165も細かい原体で6条以上の波状文である。166は10条以上の直線文と斜格子文である。167はハケ整形の後、下半はミガキで仕上げている。文様の大きな斜格子と9条直線文を施し、直線文の下に刺突文も施す。

168・169は底部で、168の底面はナデ、外面はミガキである。169は内面ケズリである。

170は壺口縁部小片である。外反し端部は角張り、内側につまみあげている。ヨコナデでにぶい黄橙をしている。

171は非常に薄手の壺で、内湾する体部から大きく外反している。端部は丸く納める。底部169が同一個体かと思われる。強く焼けており赤褐色に変色している。磨滅顯著。

172は高杯で、内湾する体部から水平に口縁部が聞く木器模倣形である。口縁部は内側にも突出している。端部は角張り、端面に円形浮文を附加している。単位（3個1単位？）があるようで間隔が開いている。橙をしている。

173は土器片を利用した紡錘車である。4.65cm×3.8cmの楕円形で中央に孔径0.55cmの円孔を両面から開けている。厚さは1.05cmと厚めである。

SK07出土遺物（174～176）

174は垂下する壺口縁部の一部である。上部に刻み目の付く突帯を1条存在する。細かい丁寧な刻み目で浅黄橙である。

175は外反する壺口縁部で端部は下方に垂下するようにつまみ出している。端面に円形浮文の剥がれた痕跡が残る。にぶい橙でヨコナデ仕上げ。

176は壺底部で平底から外反する。内面と底面はナデ、外表面はミガキである。にぶい黄橙。

SK08出土遺物（177～187）

177は垂下する口縁端部で角張りぎみである。端面の棱線を境に利用して上下に綾糸状に細長い刻み目を入れてから、上下ともに竹管文を並べる。

178は内傾する肩部から直立ぎみの頸部となる。肩部に11条の直線文を入れ、頸部に2条の貼り付け突帯を置く。内面はにぶい橙、外表面は褐灰～にぶい褐である。

179は無頭壺で外傾して端部近くで屈曲し短く内傾する。端部は丸く、上端に細かい刻み目を施す。径の大きくなる外側曲部にも刻み目を付けている。その下に2個1対の孔径4mmの円孔が穿たれている。ヨコナデ仕上げで内面は灰白～明褐灰、外表面はにぶい橙である。

180は内湾する口縁部で端部は内外に肥厚して水平な面となる。外側に1条の突帯があり、端部外側と突帶に刻み目がされている。灰白～にぶい橙で砂粒含む。ヨコナデである。

181は内湾する壺体部でハケ整形である。磨滅しているが、波状文と直線文が施されている。灰白。

182は平底から外傾する大きめの底部である。灰白で内面はナデ、外表面は粗いミガキのようにヘラと思われる工具で調整している。

183・184も壺底部で平底から外反する体部になる。底面はナデ調整し僅かに上げ底になる。外表面はミガキである。183は内面浅黄橙、外表面灰白～黄灰、184は内面にぶい橙、外表面褐灰である。内面ハケ整形。

185は口径40cmを測る大形の壺である。内湾する体部から外傾し端部内外に肥厚する。内面はユビ成形で口縁部はヨコナデである。にぶい橙。

186は突出した小さな平底から外に聞く。胎土・焼成など他の土器と差がないことを思えば天地逆で蓋とすべきであろうか。ハケ整形のち、外表面はナデでいる。褐灰～灰白。

187は壺底部で内面はナデ、外表面は黄灰でミガキ、内面は灰でケズリである。平底から内湾する体部になる。

SK12出土遺物（188～189）

188は外反する壺頭部で2条の突帯を有する。外表面は縱方向のハケ整形で灰黄褐、内面はナデでにぶい黄橙～褐灰を呈する。

189は高杯壺部と思われる。僅かに外反し端部は内側に肥厚し端面となる。端部周辺のみヨコナデで

仕上げる。内面は明褐灰～灰白、外面は黄灰である。

3. Ⅲ区遺構出土遺物

SX01出土遺物（190～206）

190は外反する口縁部で端部角張る。端面になり中央に1条の沈線がある。断面は灰で器表は灰白で砂粒多く含む。

191は内傾する頭部からくの字に外傾し端部断面三角に肥厚する。端面には6条前後の波状文で装飾し2個1対の竹管付きの円形浮文を回す。端部内面にも4条の波状文で加飾する。頭部は上から4条直線文、8条波状文、6条直線文、6条波状文で飾っている。灰白で、砂粒多く含み装飾の割りには胎土が悪い。口縁部はヨコナデである。

192は短い頭部から外反し端部内外に大きく肥厚している。端面に3条の凹線を施しヨコナデである。にぶい橙で砂粒含んでいる。

193・194・195は体部で文様が残されている。194は外傾しナデ仕上げで、上から7条の直線文、条数不明の波状文、5条の直線文、斜格子文になっている。表面磨滅著しいが、黒雲母・長石の砂粒含み、にぶい黄橙～黄灰を呈している。河内からの搬入品の可能性がある。195も外傾しており、ハケ整形のうちに施している。上から11条以上の波状文、13条の直線文、13条の波状文、8条以上の直線文になっている。にぶい黄橙で細砂含んでいる。193は内済する体部で頭部下と思われる部分に三角形に面的に埋ませた刺突文を連続して巡らす。その下に4条以上の直線文の上に円形浮文を巡らす。その下に斜格子文、3条以上の直線文を施している。にぶい黄橙で細砂を含む。

196は底面が歪で上げ底になっている。僅かに内済する体部に続く。内面は板ナデ、外面は粗いヘラミガキで調整しているが平滑である。器壁は黒で器表はにぶい橙～にぶい黄橙を呈している。

197は平底であるが、周囲が僅かに高くなるドーナツ状の底部である。体部は内済する。灰白で、器壁はやや暗く砂粒多く含む。

198は内済する体部から短い頭部で大きく屈曲し外傾する口縁部で端部角張り内外に肥厚する。端面は凹んでおり凹線状になっている。灰白で細砂含む。

199は大きく外反する口縁部で端部角張り中央やや凹んでいる。内面はケズリで、外面はナデ、口縁部はヨコナデである。にぶい黄橙で細砂多く含む。

200は外傾し端部内外に肥厚している。端面には2条の凹線がありヨコナデである。橙～黄灰で砂粒多く含む。

201は平底から外傾しており、底中央を焼成後に径6mmの円孔を穿っている。にぶい橙～灰黄褐で細砂多く含み、焼成良好である。外面はハケ整形から板ナデ・ナデで整形しミガキで仕上げる。内面はナデである。

202は平底から直線的に開いている。底面から体部下部に黒斑が認められる。ユビ成形からナデ、外面はヘラミガキで仕上げている。内面はヘラケズリである。にぶい黄橙～暗灰で細砂含む。

203は平底から外傾する底部で強く被熱している。にぶい橙～黒で砂粒含む。外面はハケ整形。

204はつまみ部だけの破片である。にぶい橙で砂粒含むもので体部内済する。

205は土器体部を利用した紡錘車である。周囲を打ち欠いて作ったもので、製品の一部を欠いているが、径5.25cmと思われる。中央に3mmの円孔が開けられている。色調・胎土から中期の土器と思われる。

206は小片であることから時期・天地など確実ではない。外傾する体部に2条の突帯が付き、小さな刻み目を施す。ヨコナデで仕上げ、灰白を呈し細砂を含む。下側には円形の上側には方形の透孔が存在しそうである。透孔の大きさ・個数などは小片のため不明である。

SX02出土遺物（207~209）

207は内湾する体部から短く外傾する口縁部になる。端部はバチ形に肥厚している。ヨコナデによって頭部が薄くなっている。表面磨滅しているが、内面はハケ整形かと思われる。色調は器表がにぶい橙で器内が黒褐である。金雲母・長石の砂粒多く含んでおり、地元産ではない。譜岐からの搬入品であろうか。口径29.3cmと大きい。

208は不安定な平底から内湾する体部になる。底部中央に焼成前の穿孔がある。外面はタタキを縱方向のハケ整形で消している。内面はラセン形に近い不定方向のハケ整形である。工具痕を残しており、7本/cmとやや粗い原体である外面はにぶい黄橙で、断面は黒で、クサリ縛合んでいる。

209は体部の小片である。内湾しており、内面ヘラケズりからナデ、外面ハケ整形である。10条以上の細かい直線文と波状文が施されている。器表はにぶい黄橙～灰黄褐、器内はオリーブ黒で、チャート・石英などのクサリ縛合している。

SX03出土遺物（210~211）

210は突出平底の底部で体部内湾する。底部ユビ成形からナデをする再成形である。2次焼成を受けており、外面は橙～にぶい橙で、内面はにぶい黄橙である。クサリ縛合、表面磨滅している。

211は細身の体部で平底から内湾している。内面はユビ成形・ケズりからナデ、外面はヘラミガキで仕上げている。底面との接合部はユビによって成形している。器表はにぶい黄橙～浅黄、器内はオリーブ黒で、クサリ縛合む。外面に大きな黒斑がある。

SK01出土遺物（212~218）

212は外反する口縁部で頭部に断面山形の貼付突帯が4条配されている。口縁端部付近でやや開き端部は角張り、端面に1条の沈線を有する。口縁部は歪になっており、端面には大きな刻み目が施される。にぶい黄橙で長石・チャートなどの砂粒多く含む。

213は外反する頭部で口縁部を欠いている。頭部に5条の貼付突帯を付けている。2次焼成を受けており、赤橙～にぶい橙をしている。砂粒多く含む。

214の外面はにぶい橙でヘラミガキで仕上げる。内面は橙でユビ成形からナデである。最大腹径15.5cmとやや細身である。砂粒多く含む。

215は内湾し最大腹径のすぐ上の位置に6条以上の沈線を施す。内面はユビ成形からナデ、外面はハケ整形からナデ・ミガキを行っている。外面の方が色調はやや暗く、橙～にぶい黄橙をしている。砂粒多く含む。

216は平底から外傾しており、極端に部厚くはない。ユビ成形からナデしている。底面はハケをナデ消しているように思われる。器壁は灰で他はにぶい黄橙～灰白で大きめの砂粒多く含む。

217は口径の大きい（浅め）大形の素で体部は内湾する。口縁部に向かって直立し、短い如意形の口縁部になる。端部は丸く、刻み目を入れている。ユビ成形ののち内面はナデで、外面はハケ整形である。頭部下に2条1対の沈線を入れている。ハケ整形ののちに施踏みし重なり合っている部分があるが、4対8条の沈線が施されている。口縁部はヨコナデでにぶい黄橙を呈し砂粒多く含む。

218は口縁部がほぼ完存し体部から底部にかけては約半分残存している。底径8.5cmとやや大きめの平

底から下半は内湾し上半は直立する体部になる。口縁部は短く如意状に外反し端部丸い。端部は丸く刻み目を有している。口縁部は歪で梢円形になっており、長径24.2cm、短径22.9cmとなる。器高は27.85cmと高く、口径との比率から長胴に見える。内面はユビ成形から強いナデを施し、外面はハケ整形からナデ調整している。底面には粘土縫の痕跡が看取され、ナデ仕上げである。外面の一部は橙であるが、全体的には灰白を呈す。石英・チャート・長石の砂粒多く含む。

SK03出土遺物（219）

219は底部で焼成後に穿孔している。平底から内湾している。外面は斜め方向から底部近くでは縱方向のハケ整形で底部端部のみナデ仕上げである。にぶい橙で長石などの小石粒と砂粒多く含む。内面はナデ。

ピット出土遺物（220～222）

220は内湾する体部から外反する口縁部で端部丸く、僅かに下方につまみ出している。体部はナデで口縁部はヨコナデである。にぶい橙で端部周辺のみ煤が付着している。雲母などの細砂粒少量含む。

221は体部破片でハケ整形の上に竹管文を施す。内傾しており、器壁は黄灰、器表はにぶい橙で砂粒含む。

222も小片で全体像は不明ながら刺突文を2条施している。外面橙で内面黒褐で砂粒含む。

SD01出土遺物（223～239）

223は大きく外反する口縁部で端部は内外に肥厚するものと思われる。下側端部は欠失している。上部端部には刻み目が施され、その内側には刻み目を付けた突帯が巡っている。頭部には断面三角形の突帯が2条以上付けられている。外面部にもハケ整形からヨコナデで、内面にはミガキも行われている可能性が高い。にぶい橙で、一部と器壁は灰黄褐で、砂粒多く含んでいる。

224は外反する頭部から口縁部で、端部を欠いている。口縁部内面に突帯を有し、刻み目を付加している。頭部には2条の貼付突帯を施す。断面三角形で幅広く、ヨコナデで仕上げる。全体的にヨコナデであろうが磨減顯著である。橙で砂粒多く含む。

225は口縁部上部に突帯が巡られ、端部に刻み目が附加される。口縁部は斜めに内湾して垂下し端部内外に肥厚する。端面には列点を持つ幅の広い刺突文を施している。器表はにぶい橙で、器壁は浅黄で部分的に黒になっている。ヨコナデで、砂粒多く含む。

226は算盤玉状の体部に平底が付く。底部は中央に円板充填のように粘土をはめている。器内は黒褐で器表は橙～暗灰黄で砂粒多く含む。軽侮近くの内面は強いナデである。磨減著しい。

227は器種不明である。体部に梢円形に粘土が剥がれたような円孔が生じている。把手が外れたようにも思えるが、粘土が梢円形になっていたかもしれない。非常に歪である。にぶい黄橙～黄灰で黒斑がある。粘土粗直が見られ難な作りである。ハケが僅かに見られる。

228は2次焼成を受けている。接合点はなかったが団上復原している。僅かな上げ底から算盤玉状に内湾する体部から短い口縁部が付く。頭部は外反し口縁部はさらに強く外反し、端部は垂下し丸く納めている。磨減顯著であるが、ユビ成形ののちナデ、そしてヘラミガキで丁寧に仕上げているようである。最大腹径28.8cmと口径12.25cmを大きく凌駕している。器高27.15cmよりも数値は大きい。にぶい橙～橙で、器壁や部分的に灰黄である。砂粒多く含む。

229は大形壺底で平底から外傾している。底を中心強く被熱している。内面には有機質が付着しており、砂粒含んでいる。磨減顯著であるが、内面はハケ整形である。SK02出土の土器と接合している。

にぶい橙～灰黄褐色である。

230は被熱している底部で平底から内溝している。ユビ成形からナデ整形し、外面はヘラミガキで仕上げている。淡黄で被熱した部分は橙になっている。砂粒多く含んでいる。

231は完存する底部で平底から外反ぎみに開く。器壁は薄く仕上がっている。ユビ成形からナデ仕上げしている。明黄褐色～淡黄で黒部分が内外にある。砂粒多く含んでいる。

232は大形の壺で表面磨滅著しい。内溝し最大腹径が口径より僅かに大きい32.95cmの体部に頭部内面の縦線が脱くなる。口縁部は短く外傾し端部内外に肥厚する。内面はケズリで外面はハケ整形、口縁部はヨコナデである。器内は灰黃～灰、器表は明黄褐色で砂粒含む。

233は内溝する体部に短く外傾する口縁部が付く。端部は角張っている。明黄褐色で部分的に黒になる。ユビ成形からナデ整形であるが、薄く仕上げられている。口縁部はヨコナデで砂粒含む。

234～236は似た形態の肩の張る壺である。234は内溝する体部に短く内溝ぎみに開く口縁部となり、端部内側に肥厚する。ユビ成形から強い板ナデで整形しており、ヘラケズリ状の痕跡が残っている。頭部に工具痕が明瞭に認められる。口縁部はヨコナデであるが、丁寧でなく歪んでいる。器内は灰、器表は浅黄褐色で砂粒含んでいる。235は234より口縁部・体部が歪んでいる。肩の張る内溝する体部から短く内溝ぎみに開く口縁部になる。端部は内側につまみ出し肥厚している。ユビ成形から強い板ナデを施す。頭部下の体部内面には指圧痕が残る。灰白～褐灰色で、被熱した部分は明黄褐色になっている。236は内溝ぎみながら直線的に広がる体部に短く内溝する口縁部となる。端部は肥厚し浅い沈線を有する。ユビ成形からケズリをし、外面はハケ整形、口縁部はヨコナデである。口縁部内面には成形時の指圧痕が認められる。橙～褐灰色で砂粒多く含む。口縁部は大きく歪んでいる。

237は口縁端部の残存部分が少なく口径を復原することは困難である。ユビ成形からナデであり、口縁部のみヨコナデである。器内は黒褐色で器表にはにぶい橙～褐灰色で、砂粒含む。

238は壺底であるが、焼成後に中央からはずれた位置に穿孔を加えている。底面を中心に強く被熱しており、瓶として使用されたものか。上げ底から内溝ぎみに開き、砂粒多く含んでいる。色調は灰白が基調で、被熱した部分は橙～にぶい橙で、底面は黒になっている。黒斑がある。ナデののち外面にはミガキがある。

239は平底から外傾しており、底部中央に穿孔の意図がある。底面からは径・深さともに8mmの円孔を開けようとしている。内面にも竹管状に窪んでいるが開けてはいない。外面とともに黒斑状の黒部分がある。にぶい黄褐色で砂粒多く含む。ユビ成形から底面内面はナデで体部はいたナデで整形し外面はミガキを加えている。

SD02出土遺物（240・241）

240は最大腹径25.45cmとあまり広がらないスマートな体部で内溝する。口頭部は外反し端部内側が肥厚し端部は尖りぎみである。肩部と頭部に2条ずつの沈線が施される。いずれも沈線間に開いている。ユビ成形からナデ整形で、外面はミガキで仕上げる。肩部に黒斑がある。にぶい橙で部分的に灰白で砂粒多く含んでいる。

241は平底から内溝ぎみに延びている。底部端部はやや突出している。黒斑があり、外面はにぶい橙、内面は灰黄褐色で砂粒含む。外面はハケ整形で器面は丁寧である。残存良好である。

SD05出土遺物（242）

242は平底から外反する体部に続く。底面近くはユビ成形からナデしている。外面はにぶい橙で内面は

灰黄褐色で砂粒多く含む。前期末の壺である。

SD03出土遺物（243～249）

243は外反し端部が垂下し丸く納める口縁部である。端面には3条の沈線があり、刻み目を施している。円形浮文が剥がれた痕跡があるが、1ヶ所だけである。上部に突帯が付いており、丸い端部に刻み目を入れている。突帯内側に2個1対の小さな穿孔が見られる。蓋との接合部である。小片であることから何ヶ所あるかは不明である。にぶい橙～灰黄褐色でクサリ繙含む。

244は平底から外傾している。緩やかに広がることと底径が大きめであることから壺と思われる。底面はナデで、外面はミガキである。にぶい橙～にぶい黄橙でクサリ繙含む。

245は外反する楕部で端部は大きく上につまみ上げている。中央付近外面に突帯を付加する。ユビ成形ののちナデしている。ヨコナデで仕上げているが、磨滅のため範囲は明確ではない。黒斑がある。器内は灰白～灰で器表はにぶい橙である。クサリ繙含む。

246は底部を欠く壺でやはり長胴で器壁薄い。口縁部は短く外反し端部を上方につまみ上げており丸い。磨滅著しいがユビ成形から内面は楕ナデ、外面はハケ整形からナデ・ミガキと思われる。器表はにぶい黄褐色で、内面は浅黄橙～橙で、クサリ繙含む。

247は平底から長胴で内済する体部で、最大腹径は上位にある。底部中央に焼成後の穿孔が認められる。肩は丸く、頭部は明瞭で口縁部は短く外反する。端部は角張り、上方につまみあげている。ユビ成形からハケ・ナデ整形で、口縁部のみヨコナデで全体に薄く仕上げられている。外面は一部ミガキも行われているかもしれないが、磨滅している。にぶい黄橙～にぶい橙で砂粒含んでいる。

248も文様片でやや内済する。竹管など2本1対の施文具を使用している。沈線と山形に近い波状文が施されている。前期の壺体部であろう。

249は列点文を巡らす文様片で黒斑がある。砂粒やや多くにぶい黄橙～にぶい橙を呈する。

SD07出土遺物（250～259）

250は外反し端部内外に大きく肥厚する加飾の壺口縁部である。端面には4条の凹線があり、先に細くて浅く長い刻み目を付けている。上半には上の凹線にはば接して全面に円形浮文を巡らせる。下半は全体の6ヶ所に2個1対の円形浮文を付加する。上の端部には刻み目を施す。内面には端部と同じように断面三角で上部が丸い突帯を2条付けている。端部には刻み目も施す。2条の突帯の間に2個1対の小円孔を穿っている。端面下半の円形浮文に呼応する位置に配されている。にぶい橙で細紗含む。

251は外反する口頭部で端部を欠いている。頭部には断面三角の2条の細めの突帯が回っている。ハケ整形ののちナデで、ヨコナデで仕上げる。端部内面には2条の断面半円の突帯があり、刻み目が施されている。下方に垂下する部分が欠失している。突帯間に小円孔が貫通している。一個しか残存していないが、2個1対にならうか。にぶい橙で雲母などの砂粒含む。焼成良好。

252は垂下する口縁部であろう。端面には3条の凹線があり、その上に竹管付きの大きめの円形浮文が施される。にぶい橙で細紗含む。

253は内面に細い3条の突帯を付ける外反する口縁部である。断面半円で刻み目を付ける。突帯間に2個1対の小円孔を各々開けている。橙で細紗含み、ヨコナデである。

254は外反する頭部で指頭压痕の付いた貼付突帯が造っている。にぶい橙で砂粒含む。ヨコナデ。

255は内済する壺頭部の破片で、器内は暗灰、器表は淡黄である。内面はユビナデの痕跡が明瞭に残っている。上から6条以上の櫛描き直線文、4条の波状文、3条以上の直線文で装飾している。

256は高杯で口縁端部の開く部分を欠いている。直線的に開き、内面に断面方形の突帯を有し、水平ぎみに広がり垂下するか。ハケ整形の内面はミガキで仕上げる。口縁部はヨコナデ[。]にぶい橙で砂粒含む。

257は壺底部であろう。上げ底から広がる。ユビ成形からナデである。底面も同じである。砂粒多く含み、にぶい褐で内面だけ黒褐である。

258はドーナツ底で、器表に化粧土を塗布している。器肉は暗灰で、器表は橙～にぶい黄橙を呈する。体部は外傾する。ナデ仕上げと思われるが、表面磨滅著しい。黒斑が認められる。

259は小さめの平底から開き内湾する体部になる。ハケ整形で内面は板ナデである。にぶい橙で細砂含む。

北半部縦層上落ち込み出土土器（260～310）

260～287は壺、**288～301**は壺、**302～310**は高杯である。

260は外反する口縁部で端部内外に肥厚する。端面に細長い刻み目を入れている。橙～にぶい黄橙でヨコナデ仕上げ。端部に黒斑あり。

261は外反し垂下する口縁部で端部は肥厚する。端部は貝殻状のもので押圧した痕跡（刺突文）がある。外面はハケ整形で全体にヨコナデが加えられる。灰黄褐をしている。

262は外反する口縁部で端部大きく内外に肥厚する。4条の凹線文のち細長い大きな刻み目状の斜線を施してから長さの差がある棒状浮文を貼付する。2個か3個1単位（残存部は3個）と思われ、復原すると9ヶ所になる。頭部には指頭圧痕の付いた幅広の突帯が付く。にぶい褐～灰黄褐をする。

263は口縁端部の破片で端面に12条の波状文を有する。橙をしており、ヨコナデである。

264は外傾し端部が大きく肥厚する口縁部で、端面に3条の凹線があり、その上に棒状浮文を4個貼付している。にぶい黄橙でヨコナデ仕上げ。

265は端部が下方に垂れるもので端面に5条凹線があり、斜線文を加える。端部内側に小孔があり、蓋との結合であろうか。

266は頭部に2条の突帯を持つ。軒悔外面はヨコナデ、内面はナデ。体部は内湾しハケ整形である。外面は上から直線文～波状文～直線文～円形浮文～波状文と装飾している。磨滅しており、単位は上の直線文が7条であることしかわからない。明黄褐～浅黄橙である。

267は外傾する口縁部で端部肥厚する。浅黄橙を呈し、ヨコナデである。器肉厚い。

268は外傾し端部肥厚するもので、端面に円形浮文を付けている。ヨコナデ[。]にぶい橙を呈する。

269は外反し端部近くで直立する広口壺で、端部は角張り、立ち上がる部分は面になっている。内外面ともにハケ整形で、端部周辺はヨコナデで端面には4条の凹線がある。橙で砂粒多く含む。

270は垂下する端部で肥厚している。上に貼り付け突帯があり、刻み目を入れている。垂下する上面には円に近い扇形文を施し、端面には刺突文を入れる。灰黄褐～オリーブ黒で河内からの搬入品である。

271は垂下する口縁部で、端部肥厚し端面には貝殻で押圧し施している。内面には2条の突帯を付け、磨滅しているが刻み目があるようである。オリーブ黒～にぶい黄橙でヨコナデである。

272は外反し端部肥厚する。内面に高い突帯を付け刻み目が施される。橙でヨコナデ仕上げ。

273は外反する頭部で2条の突帯が付く。頭部にある突帯は指頭圧痕の付く低い突帯で、その上の突帯は断面三角形である。ハケ整形からナデ・ヨコナデ仕上げである。

274～281は文様片で、**274**は頭部の小片で4条の貼り付け突帯で上に棒状浮文を付ける。ヨコナデで

にぶい橙である。275は内溝し8条波状文一10条直線文一8条波状文を施している。276は斜格子文と円形浮文が付けられている。にぶい橙で砂粒含む。ナデ仕上げである。277はハケ整形ののち外面はミガキ、内面はナデである。肩部に刺突文があり、にぶい橙である。278はハケ整形後ナデ調整で、17条以上の直線文と8条以上の波状文が見られる。にぶい黄橙～灰をしている。279もハケ整形からナデで橙を呈する。残存部で6条以上の直線文一8条波状文一斜格子文で飾る。280はナデ整形で内溝する。にぶい黄橙で直線文の上に円形浮文が付く。比較的大きめの浮文が4個残存している。281は斜格子文一6条直線文一斜格子文で、橙でクサリ繩含んでいる。上の斜格子文は下の方が開いている。内面はナデで磨滅顯著。

282～284は無頭壺である。282は内溝し端部が最も厚くなり角張る。端部周辺はヨコナデで端部下に2条の突帯が付く。橙でクサリ繩含んでいる。283は282より口径が大きい。内溝し端部角張る。にぶい褐で外面ハケ整形、内面ナデ、端部周辺ヨコナデである。端部下に2条の突帯を持ち、刻み目を入れている。284は内傾し端部丸い。ヨコナデで2条の突帯を端部下に持つ。

285は外反し端部が内外に肥厚して水平面になっている。橙でヨコナデ、外面の端部下に3条の低い突帯を付け指頭圧痕を施す。

286・287は壺底部で平底から内溝する。ユビ成形から外面はミガキ、内面はハケ整形である。ともににぶい黄橙で砂粒含む。286は底面もミガキを行い、黒斑がある。

288は大形壺口縁部で、外反し端部内外に肥厚する。頭部に幅の広い突帯を貼り指頭圧痕で装飾する。にぶい黄橙で端部周辺はヨコナデ。端面に円形浮文が外れたような痕跡が残る。

289は内溝する体部からくの字の頭部になり、短く外傾し端部はつまみ上げる。ハケ整形で口縁部はヨコナデ仕上げ。浅黄でクサリ繩含む。煤付着している。

290は内傾する体部から外傾し、端部は肥厚し上につまむ。体部はハケ整形で口縁部はヨコナデ。灰褐。

291は直立ぎみながら湾曲する体部から緩やかに外反する口縁部になる。端部は丸い。体部はハケ整形で口縁部はヨコナデ。にぶい黄橙を呈し砂粒含む。端部に刻み目がありそうである。

292は器壁の厚い内溝する体部から短く外反する口縁部に続き、端部は丸く肥厚する。内面はユビ成形からハケ整形し指ナデをする。外面はハケ整形で口縁部はヨコナデである。にぶい橙～灰黄褐をしている。

293は内溝する体部から断面バチ形の短く外傾する口縁部になる。端部は開き肥厚する。ハケ整形からナデ仕上げ、口縁部はヨコナデでにぶい橙である。

294は内溝する体部から外反する口縁部で端部は厚く角張る。口縁部はヨコナデ、体部内面はケズリ、外面はナデ。浅黄橙をしている。

295は前期に遡る壺口縁部である。外反し端部は丸く刻み目を有する。頭部には1条の沈線がある。浅黄橙で砂粒多く含む。

296～298は似た形状で平底から外反する体部になる。内面と底面はナデ、外面はミガキである。にぶい黄橙で砂粒含む。297には黒斑がある。

299は底部端が外に聞く平底で外反する体部に続く。2次焼成を強く受けしており、土器器内が層状に剥離しそうに変化している。にぶい橙でユビ成形からハケ整形、ナデである。

300は壺底部としたが、コップ形土器の底部か。平底から内溝する体部になる。内面は指ナデである。

301は大形壺で僅かな上げ底から外傾する。内面はユビ成形からナデ、外面はミガキである。浅黄橙～にぶい橙で墨斑がある。

302は外反ぎみで端部は角張る。ヨコナデで仕上げている。灰白～暗灰。

303は器壁厚く外反し端部角張る。内面はナデで端部から外面はヨコナデである。浅黄で砂粒含む。

304は浅めの杯部で内湾して端部は水平に短く延びる。端部は角張り、端面に3条の凹線を入れる。細長い刺突文を刻み目状に入れ、さらに円形浮文を巡らす。端部周辺はヨコナデで体部は内外面ともにヘラミガキで仕上げる。にぶい黄橙で砂粒含む。

305は木器模倣形の杯部で内湾する体部はヘラミガキで仕上げる。体部延長上に突帯を設け、そこから水平に開き、端部はバチ形に肥厚する。浅黄橙をしており、口縁部はヨコナデである。端面には細長い刻み目状に刺突文を斜めに入れ、円形浮文を貼る。浮文は4個単位で1周せず、8ヶ所に配置しているようである。

306は外傾する体部でヘラミガキで仕上げている。方形の幅広に突出してから水平に開く口縁部であろう。

307～310は脚部である。外反して端部は内外に肥厚する。内面はすべてヘラケズリで端部周辺はヨコナデである。307は端面が凹んでおりにぶい黄橙である。外面は板ナデであろうか。308は端面ではなく裾部に鋸歯文を設けている。右上がりに3本の斜線を入れている。にぶい橙である。309は端部が上に面となって延びている。にぶい橙で内面はハケ整形を加える。310は体部の器壁薄く、橙を呈する。文様は不明ながら線刻を施している。縱方向に1本描かれている。その横の斜線も関連するものかもしれない。その下に三角形のヘラ先で押庄村した刺突文が巡っている。刺突文によって端部の突出がより際立っており、断面はT字形になっている。

北半流路出土土器（311～327）

311は外反し口縁部に突帯を有して垂下する口縁部である。端部を欠いている。突帯は2条あり刻み目を加えている。もう1条上にありそうである。橙で内面は横方向の細かいヘラミガキで仕上げる。外面はナデ、端部近くはヨコナデである。

312は外傾する口縁部で端部は玉縁状になっている。外面は橙で、内面は灰白でヨコナデ。

313は外反し端部内外に肥厚する。ヨコナデで端面に2条の凹線がある。外面は橙～褐灰、内面はにぶい橙～褐灰で砂粒多く含む。

314は外反し端部も大きく屈曲させている。丸みを持った端面に綾杉状に刺突文を施している。外面はハケ整形、内面は細かいヘラミガキである。端部周辺はヨコナデで橙をしている。

315は外反し端部近くで内湾ぎみになり端部内側に肥厚し面となる。外面は縱方向の、内面は縱方向から横方向のハケ整形である。灰白～灰黄をし、端部周辺はヨコナデ。

316は壺頭部かと思われる。外反しており3条の突帯を付け浅い刻み目を施す。棒状浮文を貼付している。残存しているのは2個だけであり巡らせてはいないだろう。頭部外面には縱方向に綾杉状にヘラ先で線刻している。内面は板ナデで橙をしている。

317は外反する壺口縁部で端部は角張る。ハケ整形からナデ仕上げ、端部はヨコナデ、にぶい橙を示す。

318は鉢口縁端部で内湾し端部肥厚する。浅黄～灰白でヨコナデ仕上げ。

319は高杯脚部で外傾し端部上方に肥厚する。外面に三角形の押庄村文を置き、上に鋸歯文を施す。左上がりで3本の斜線が描かれる。内面けずり、外面ナデ、端部周辺ヨコナデで、にぶい黄橙をしてい

る。

320は壺底部で平底から内湾する。内面はハケ整形でぶい橙～灰黄褐である。

321～327は322を除き壺体部の文様片である。321は内傾しており、波状文～直線文～2条貼り付け帯となっており、直線文の上に2段の竹管文帯を設けている。突帯の上に棒状浮文を付加する。にぶい黄橙である。322は鉢口縁部で内湾し端部角張る。端部下に径7mmの円孔が1対存在する。内面ケズリ、外面タタキからナデで、にぶい黄橙をしている。323は内湾し3条の刺み目を付ける突帯を有する。324は外反し3条の低い突帯を持つ。灰黄をしている。325は壺体部で算盤玉状に内湾している。最大腹径上に刺突文を施し、その上端に接して円形浮文を巡らす。その上に波状文もあるが不明瞭である。内面はユビ成形からナデ整形。明黄褐～浅黃砂粒含む。326は内湾し2条波状文～竹管文～2条以上直線文がある。ナデ仕上げで浅黄橙。327は刺突文が見られる。にぶい黄橙を呈している。

4. 包含層出土土器（328～420）

①縄文晚期の土器（328）

1点だけ突帯文が出土している。時期的に弥生土器と併行していくても良いものである。外反し端部は丸く突帯は低い。突帯には刺み目が入れられている。にぶい赤褐～褐灰で、外面は条痕文が内面はナデ。

②弥生前期の土器（329～334）

圓化した土器はすべて壺である。329は内湾し貼り付け突帯2条で刺み目が加えられる。褐灰～にぶい黄橙でナデ仕上げ。330は内面ににぶい赤褐でナデ、外面黄褐でハケ整形のうち5条の沈線を入れる。331はヘラ引きで上から6条沈線～2条波状文～2条沈線～2条波状文～2条沈線を施している。波状文特に下のものは山影に近い。灰黄褐で砂粒含む。332は内湾し頭部したに7条の沈線を有する。内面は浅黄橙～灰白、外面はにぶい黄橙～灰白でナデ仕上げ。333は外反ぎみの肩部で3条の沈線がある。灰白～明黄褐をしている。ナデ調整。334は大形の底部である。ユビ成形から強いナデで整形する。外面はハケからナデである。平底から緩やかに内湾している。外面は灰白、内面はにぶい橙～橙で、砂粒多く含む。

③弥生中期の土器（335～418）

壺（335～392）

壺は口縁部などの特徴から幾つかに分類できる。口縁部からは、A通常に口縁部が開くもの、B通常に口縁部が開き端部は肥厚するもの、C端部が大きく垂下するもの、D直口するもの、E小形で直口するものF広口壺、G無頭壺に分けられる。さらに内面の突帯や文様の有無、端面の凹線・刺突文の有無で細分が可能である。また、頭部の突帯の有無なども分類作業での条件になる。

A通常に口縁部が開くもの（351・352）

頭部に突帯を持つ351と、持たない352に細分できる。351は外反し端部上につまむ。頭部に指頭圧痕を押出した低い突帯を持つ。外面ハケ整形でにぶい橙～にぶい黄橙。352は外反し端部丸くにぶい黄橙。

B通常に口縁部が開き端部は肥厚するもの（339～344・346～350・354）

内面に突帯のないB1と突帯のあるB2（340）に分けられる。339は3条の凹線の上に綾糸状に細長

い斜線を引いている。端部は内外に肥厚しヨコナデで、橙をしている。340は突帯に刺み目がなされている。端面は3条凹線に斜線の刺突文を施し、さらに細い棒状浮文を付けている。にぶい橙を呈しヨコナデである。341は端部の小片でここにしているが、本来は垂下するCの可能性が高い。ヨコナデで丸い端部に円形浮文を付けている。342は3条の凹線を持ち、やや外開きである。にぶい黄橙でヨコナデ。343は端部を欠いている。凹線2条残存し浅い斜線文を引き、細い棒状浮文も貼付している。にぶい橙で砂粒含む。344も似た文様構成である。4条凹線に斜線文と細い棒状浮文を施す。ヨコナデで、にぶい橙～灰白をしている。346は端部下側に突出しており、端面に5条の凹線から棒状浮文を付ける。棒状浮文は4個1単位であろうか。にぶい橙をする。347は内外に肥厚する端部で上と内側突帯に刺み目を入れている。端面には3条の凹線があり斜線文を入れる。端部内側に3mm前後の小円孔がある。にぶい黄橙で内面はハケ整形で他はヨコナデ。348は肥厚する端部で大きめの刺み目のような刺突文を端部全体に入れる。灰黄褐でヨコナデ仕上げ。349はヨコナデで橙をしている。文様のない無地である。350は上側につまむ端部で端面に円形浮文があったと思われる。にぶい橙でヨコナデ。354は小片で外反し端部肥厚し端面には2条の凹線があるか。外面はハケ整形で端部周辺はヨコナデ。にぶい橙。

C 端部が大きく垂下するもの（335～338・345）

内面に突帯のないA 1（335・337）と突帯のあるA 2（336・338・345）に分けられる。345は突帯が2条ある。337は突帯がないが、その部分に円形浮文を這らせている。335は端面上部に1条凹線、下に波状文を施し、その間に円形浮文を配置する。頭部には指顎圧痕のある突帯を付け、内面にも波状文で飾っている。浅黄橙で内面はハケ整形。336は端部上部と突帯に刺み目を有する。にぶい黄橙でヨコナデである。337は短く垂下する。端部は下に尖っている。にぶい橙でヨコナデ仕上げ。338は垂下するが直線的である。端面には交差するような細長い刺突文がある。内面突帯には刺み目が見える。にぶい黄橙をしている。345は小さく垂下し端面両端に刺み目がある。刺み目の間に円形浮文が貼付されている。浅黄橙でヨコナデ調整。

D 直口するもの（364～366）

364は外傾し端部内外に肥厚する。端部下に2条の突帯があり、端部外側も合わせて刺み目を入れられる。突帯の下には波長の高い波状文がある。内面はハケ整形で、外面はナデ、端部周辺はヨコナデでにぶい橙をしている。365は内湾ぎみに直立し端部は角張る。端面中央が凹んでいる内面はナデで他はヨコナデ。明黄褐～橙。366は内湾し端部幅広く角張る。外面には4条の貼り付け突帯が付くにぶい橙でヨコナデ仕上げである。

E 小形で直口するもの（356・357）

356は外傾し端部角張り外側に出る。端部下に2条の凹線がある。橙～にぶい橙でヨコナデ。357は外傾し端部は角張る。端部外側に刺み目を入れている。端部周辺はヨコナデ、橙を呈する。

F 広口壺（370）

口径約4.4cmと大形の口縁部である。外反する頭部には指顎圧痕の付く突帯が付けられる。途中から直立ぎみに外傾し端部は上に尖っている。頭部はナデで端部はヨコナデである。直立部分外面に斜格子文を入れ、端部には刺み目を入れ竹管文の付く円形浮文が貼られている。内面は灰白、外面は浅黄橙。

G 無頸壺（371～376）

371は外傾し端部近くで内傾し端部角張る。屈曲する下に凹線が1条ある。体部はナデかミガキで、端部周辺はヨコナデである。灰白～暗灰である。器高の高いもので脚台が付くであろう。372は口径38.4

cmと大形である。端部下に突帯が1条あり、ヨコナデである。外面はハケ整形で灰白を呈する。**373**は内溝し端部は内外に肥厚する。外面に2条の突帯があり刻み目を入れる。端部周辺はヨコナデで他はナデ仕上げ。にぶい黄橙でクサリ纏含む。**374**は内傾し端部内側に尖る。6条の凹線があり、その下に5条以上の波状文がある。にぶい橙で端部周辺はヨコナデである。**375**は内溝し端部大きく肥厚する。外側に刻み目付ける。浅黄橙～灰白でヨコナデ仕上げ。**376**は大きく内溝し端部内側に尖る。端部中央やや凹んでいる。端部下に2条突帯があり、刻み目を加える。内面はナデで端部周辺はヨコナデ。にぶい黄橙をしている。

口縁部で分類できなかった型も幾つかある。**353**は突帯が2条ありタイプがやや異なる。端面には凹線3条あり棒状浮文を付ける。浅黄橙でヨコナデ。**355**は口唇部に3条凹線があり斜綱文を入れる。口縁部はヨコナデで受け口状になる。橙～灰黄である。

361から**363**は底部である。**361**は突出平底に近く、他は平底である。**361**は内面ハケ整形で外面はミガキ、底面はナデである。浅黄橙である。**362**は外傾する体部で内面にぶい橙でハケ整形、外面灰白～にぶい橙でナデである。**363**は外反する体部でユビ成形から内面はハケ整形で灰黄褐～にぶい赤褐、外面はミガキで赤褐～褐灰をしている。

367～369・377～392は文様部である。口縁部・頸部と体部の部位がある。波状文が多いが、突帯・刻み目もある。**367**は肩部に直線文を引いた上に円形浮文を配する。外面はにぶい黄橙でハケ整形からナデを加える。内面は橙～褐褐でナデ仕上げ。**368**は内傾する体部で頸部に突帯が1条付く。波状文と直線文で飾る。にぶい黄褐～にぶい黄橙でハケ整形からナデである。**369**は頸部で3条の突帯の上に棒状浮文を付ける。内面には絞り目状の痕跡が残る。にぶい橙でナデである。**377**も頸部で幅の広い突帯を付け指頭圧痕が付く。にぶい橙でヨコナデ仕上げ。**378**も指頭圧痕で押圧した突帯を持つ頸部である。にぶい黄橙でヨコナデ。**379**は内溝する体部でハケ整形のもの、4条以上の直線文と斜格子文を施す。にぶい橙で内面ナデ。**380**は低い1条の貼り付け突帯でナデ。**381**は内溝する口縁部で端部肥厚する。5条凹線～5条波状文～6条直線文～5条波状文～2条以上直線文で装飾する。橙で内面ハケ整形、外面ヨコナデ。**382**は6条の波状文である。にぶい黄橙～灰黄褐でナデ整形。**383**は上下2条の凹線（沈線）の間に2条の波状文がある。磨減顯著で不分明であるが、胎土に砂粒多く含んでいることから前期かも知れない。**384**は灰黄褐で竹管文が施されている。ナデ整形。**385**はハケ整形のもの11条以上の直線文と18条以上の波状文が見られる。内面ナデでにぶい黄橙である。**386**は6条以上の直線文～条数不明の波状文（磨減のため）一直線文となされ、円形浮文が貼付される。にぶい橙で内外ともナデである。**387**は内溝し肩部に円形浮文を付ける。明黄褐でナデ。**388**は頸部から内傾する体部で8条波状文と8条直線文を施す。にぶい黄橙でナデ仕上げ。**389**は外反ぎみの体部で6条直線文と波状文が認められる。灰黄褐でナデ。**390**は残存部下端に突帯があり棒状浮文が付く。上に2帯の支管文があり、条数不明の波状文がある。灰黄褐でナデ、河内からの搬入品と思われる。**391**は内溝する体部から頸部には突帯が付く。体部には8条直線文と8条波状文、3条以上直線文がある。ハケ整形からナデで、にぶい橙である。**392**は内溝する体部で9条直線文～7条波状文である。外面は赤褐～灰白でハケ整形、内面はにぶい橙でナデ。

蓋（393）

内溝する体部に短く外反するつまみが付く。ナデ整形で灰黄をしている。黒斑がある。

甌 (394~410・412)

くの字のものと端部が肥厚するものに分けられる。色調はにぶい黄橙のものが大半で端部はヨコナデである。**394**は短く外反する口縁部で端部肥厚する。内外面ともハケ整形である。**395**は内済する体部からバチ形に端部が肥厚する口縁部となる。**396**は頭部内面の棱線が鋭い。内済する体部から外傾する口縁部で端部肥厚する。内外ともハケ整形か。内面は磨滅している。**397**は内済する体部から外反し端部上につまみ上げ丸く納める。頭部に刺突文を施させている。余り見かけないタイプで撮入であろうか。**398**は大きく外反する口縁部で端部角張る。内面ケズリで頭部厚く棱線鋭い。**399**は薄手に仕上げており、内外面ともにハケ整形である。内済する体部から短く外傾し端部つまみあげている。**400**は内傾する体部から外反し端部内外に肥厚する。にぶい橙となり砂粒含む。**401**は内済する体部からバチ形に開く短い口縁部になる。内面はハケ整形。**402**は頭部が外反し外に開き端部肥厚する。丹塗りである。**403**は内傾する肩部から短く外反し端部大きく肥厚する口縁部である。端面に3条の凹線文を施しヨコナデで仕上げる。外面はハケ整形からナデでにぶい黄橙、内面は板ナデで橙。砂粒少量含む。黒斑がある。**404**は外反ぎみの口縁部で端部肥厚し内側につまみあげる。内面ハケ整形。**405**は大きく屈曲する頭部から外傾し端部内外に肥厚する。端面には2条の凹線が施されている。**406**は小形で内傾する体部から短く外傾する。内面ケズリ、外面ハケ整形で、外面は黒褐である。**407**は球形に内済する体部から外傾する。端部厚く丸く肥厚している。**408**は底部に近い体部で外面ミガキで初痕が残っている。**409**は平底から外反する体部になる。内面はナデで外面はミガキである。**412**は平行から右上がりのタタキで底は平坦でナデしている。内面もナデである。

瓶 (411・413)

3点固化している。**411**は平底から直線的に聞く底部で焼成前に穿孔している。底面と内面は板ナデで外面はヘラミガキである。にぶい褐一灰黄褐である。**413**は平底から外傾する。内面ナデで外面ミガキ、焼成前の穿孔である。

高杯 (415~417)

415は内済し端部肥厚する口縁部で、端部の一部を欠く。端面に1条の凹線がある。内外面ともハケ整形である。にぶい橙～にぶい黄橙である。**416**は外傾から急に済曲し端部は面となり水平に肥厚する。端部外面に刻目があり、屈曲した外側に刺突文が施される。内面はハケ整形からナデ、口縁部はヨコナデである。橙で砂粒含む。**417**は脚部である。外反し端部は角張り幅広になる。内面ケズリで端部周辺はヨコナデである。橙～にぶい黄橙をしている。

脚台 (418)

台付き壺・鉢などの脚台であろう。外反し端部は丸く納める。底部は平たくハケ整形である。黄灰～浅黄橙で砂粒含む。内面はハケ整形、外面はナデで端部周辺はヨコナデ。

④弥生時代後期の土器 (358~360・414)

4点とも底部で形態から後期の土器と思われる。3点壺で突出平底である。1点は瓶である。**358**は小形でミニチュアかもしれない。河内からの搬入品と思われる。底面外面もナデしており、外面はミガキを加えている。灰黄褐である。**359**はハケ整形で内面には工具痕が残る。にぶい黄橙である。**360**は内面のハケが原体の痕跡を残すものである。外面はミガキで底面はナデである。灰黄褐である。**414**は尖り底で中央に焼成前に穿孔している。底部の厚さは2.6mmと厚い。外面はタタキ、内面はハケ整形であ

る。大きな黒斑がある。灰黄～にぶい黄橙を呈する。

⑤古墳時代・中世の土器 (419・420)

1点ずつ図化している。419は明確ではないが、古墳時代はじめの器台かと思われる。外反し上部に2条の突帯を付ける。高い突帯で2条の間がくっついており断面M字形になっている。刻み目を施す。円形の透孔がある。

420は土師器壺である。直立する体部で端部から外側に水平に聞く鈎が付く。端部は角張っている。外面はにぶい黄橙でハケ整形である。煤付着している。内面は灰黄褐でナデ整形である。鈎部はハケ整形からナデ、ヨコナデで仕上げる。
(渡辺)

(2) 石器 (図版35～39)

54点を図化した。ここでは、器種別に報告を行う。

打製石鎧 (図版35、S1～S10)

10点を図化した。すべてサヌカイト製である。石鎧の型式設定は、基部形態を次のように5つに分類した。

1類：中央部に抉りがあるいわゆる凹型で、両端が尖るもの。

2類：1類と同様凹型で、両端が丸みを帯びるもの。

3類：基部が平坦で、これまで平基と呼んできたもの。

4類：中央部が突出し、凸基と呼んでいるもの。

5類：その他、分類が不明なもの。

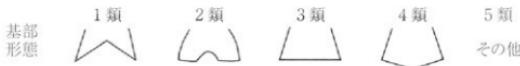


図10 石鎧の形態分類

1類 凹基式石鎧 (S1)

S1は基部の一部が欠損する。作用部のつくりは丁寧ではなく、先端部がやや厚い。

2類 凹基式石鎧 (S2・S3・S8・S9)

S2は抉りのある基部は薄く、先端部に最大厚を持つ。作用部のつくりも雑なことを考えると、未製品に近いと思われる。S3は長さ15.4mm、厚みが2mmと、10点の石鎧の中で最も小さい。作用部のつくりは、先端部に行くほど雑になっている。S8は先端部がやや欠損しているが、両側縁はS字状を呈しており、中央部に最大厚を持つ。繩文時代に属する可能性もある。S9は10点の中では最も大型の石鎧である。裏面に大きな剥離面を残す。

3類 平基式石鎧 (S4～S7)

S4・S5は、ともに裏面に大きな剥離面を残す。作用面も、両面から比較的丁寧な押圧剥離によって調整されている。S5は大きさのわりに厚みが2.8mmと薄く、断面は平坦である。S6は基部付近に最大厚を持つ。表面に比べて、裏面のつくりは荒い。S7は基部が欠損しているので凹基式の可能性もある。S3に次いで小さいが、先端部にいたるまで丁寧に作られている。

4類 凸基式石錐（S10）

基部がやや欠損しているが、作用部と基部の長さはほぼ等しい。最大厚は基部に近い部分にあり、両面ともに剥離面を残すため、断面は菱形を呈さない。表面の先端部付近には、真ん中に接線が通る。

打製石剣（図版35、S11）

両面とも接線は中央を通りず、裏面には大きな剥離面が残る。その為、多くの石剣に見られるような菱形の断面を呈さない。基部側は大きく欠損している。作用部は、連続した剥離によって調整されており、先端と基部には欠損後に再加工された痕が認められる。表面の接線の一部に磨滅が見られるが、全体に見られないことから水磨によるものではないと思われる。サスカイト製である。

石錐（図版35、S12～S15）

S12は作用部と装着部が明瞭に分かれている。基部の「頭部」にあたる部分が欠損しているが、おそらくは両側が張り出した菱形を呈していたと思われる。錐部先端は急角度の棱をなし、断面は三角形に近い形をなす。S13は裏面と錐部先端を欠くが、作用部と装着部に分かれている。先端部付近の断面は平坦である。S14は作用部と装着部の境がなく、一定の幅を持つ棒状のもので、裏面と先端を欠く。一ヶ所に抉られた剥離が見られ、何らかの石器を錐に転用したものと考えられる。S15も厚さが6.8mmと厚く、調整された抉りがあること、切削面の縁辺にも潰れ状の剥離が認められるところから見て、楔形石器から錐に転用したものと思われる。先端部は短く、潰れている。全てサスカイト製で、S15は他の石器に比べてやや色が白く、風化によるものと思われる。

削器（図版36、S16～19）

S16は上部に自然面を残す剥片を利用し、微細な連続した剥離面を持つ一個縁を作用面としている。作用面のエッジの一部と、欠損部の一部に潰れた剥離面が見られる。上部に急角度の棱が見られ、厚みも10.7mmと厚いことから、何らかの石器を作るつもりで剥片を取ったものと手くいかけ、削器に利用したと考えられなくもない。S17は三角形状の剥片のやや湾曲した一個縁を刃部としている。大きめの調整を裏面から行っているが、刃部はかなり潰されている。楔として再利用したとも考えられる。S18は横長剥片の一側縁を刃部としているが、調整は連続して施されてはいない。片側の面は、丸みを帯びて割れているが、後に意図的に数回敲打され（剥片の採取あるいは）調整が行われた可能性がある。S19は大型の剥片の短辺の方を作用面としている。調整は裏面から行われており、表裏面とも大きな剥離面を残す。全てサスカイト製で、S17は他の石器に比べ色が白い。風化によるものと思われる。

打製石包丁（図版36、S20～S22）

S20は約2／3を欠損するが、湾曲した背部と直線的な刃部を持つ打製石包丁である。表裏両面から調整を行って刃部を形成し、背部は階段状剥離の後刃潰しを行っている。全体に磨滅が著しいが、表面は特に顕著である。これは水磨によるものではなく、使用によるものと推察される。S21は上下をやや欠くが、梢円形に近い形状を持ち、周縁全体が丁寧に敲打形成されている。特に背部は両面とも階段状剥離が顕著で、持ち手を意識して刃潰しも重点的に行われている。裏面の接線から左半分には磨滅が見られる。これは、ちょうど石包丁を持ったときに指が当たる部分なので、これも水磨ではなく使用によるものである。S22も上部を欠くが、刃部はやや内湾し、緩やかに外湾する背部を持つと思われる。欠損部に近い背部に刃潰しが施されている。背部の刃が潰された部分と、表裏面の一部に磨滅が認められる。S21・S22と同様に手や指が当たる部分なので、使用によるものと思われる。全てサスカイト製で、S21はS17と同様に色が白く、風化と思われる。

楔形石器（図版37、S23～S36・図版38、S37・S38）

当遺跡では、国化した54点のうち楔形石器は16点と最も数が多い。「1つ以上の縁辺に（微細な）階段状の剥離を有する石器は、楔形石器である（兵庫県教育委員会 1998）。」という考え方を元に、次のように分類した。剪断面のないものをA類、剪断面の存在するものをB類、剪断面がありスパール状の形態と認めたものをS類と大きく3つに大別した。

A類は、階段状の剥離痕が確認できる縁辺の数で、A1、A2、A3、A4と細別した。B類は、剪断面の面数でB1、B2、B3、B4と細別し、B2類については、剪断面が対する2辺に平行なものをB2P型、隣り合った2辺にL字状に剪断面が存在するものをB2L型、剪断面がV字状に存在するものをB2V型とした。S類は、剪断面が一面のものをS1型、2面のものをS2型とした。

なお、今回はA2、A4、B3、B4、S1、S2類は認められなかった。

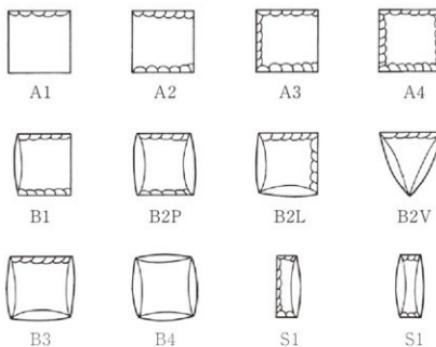


図11 楔形石器の形式分類

A1類（S23）

上辺にのみ段差の大きな階段状剥離が見られる。向かい合う辺は三角形をなし、大きな剥離面のままである。使用により変形し、このような形になったと推測される。

A3類（S24）

3辺に微細な階段状剥離が見られるが、特に上辺が顕著である。

B1類（S25～S31）

S25は縁辺の一部に自然面を残す。S26の縁辺の剥離は微細であるが、階段状剥離と剪断面が見られるることから楔形石器に分類した。S27は上下と右側縁に階段状剥離が見られる。S28は元は台形の剥片を使用したと思われ、使用によって下面が大きく欠損したと考えられる。階段状剥離は段差が大きく、剪断面や下方の折れた部分にも敲打痕が見られることから、かなり使われたものと思われる。S29は潰れた階段状剥離が見られることがから楔形石器としたが、厚みも5.8mmと薄く、上面の加工が丁寧なことから、削器あるいは打製石包丁からの転用も考えられる。S30は厚みのある石を使用しており、階段状

表1 石器計測表

報告番号	器種	石材	形式分類	地図	遺構	土層	長 (mm)	幅 (mm)	厚 (mm)	重 (g)
S01	石鏨	サヌカイト	1	■	北半流路	上層	22.7	14.7	3.5	0.9
S02	石鏨	サヌカイト	2	I	SH01		19.0	15.8	4.1	0.8
S03	石鏨	サヌカイト	2	I	SK08		15.4	11.5	2.0	0.3
S04	石鏨	サヌカイト	3	II	SK08		25.2	19.2	3.9	1.4
S05	石鏨	サヌカイト	3	II	SK01		24.4	16.4	2.8	0.8
S06	石鏨	サヌカイト	3	I	SK16側辺		20.5	13.5	4.0	0.8
S07	石鏨	サヌカイト	3	III		縫隙上面	17.0	19.5	3.3	0.5
S08	石鏨	サヌカイト	2	III		縫隙上面	23.2	15.7	4.9	1.2
S09	石鏨	サヌカイト	2	II	P19		34.1	18.2	5.0	3.0
S10	石鏨	サヌカイト	4	I	SH01		34.5	12.5	4.9	1.8
S11	打製石劍	サヌカイト	1	SH01			97.1	43.2	12.9	43.9
S12	石鏨	サヌカイト	II	SK01			33.7	17.8	5.9	2.5
S13	石鏨	サヌカイト	II	■	北半部縫隙上 (落ち込み)	縫隙上面	26.2	10.7	4.2	0.9
S14	石鏨	サヌカイト	III			包含層	39.2	10.4	5.2	1.7
S15	石鏨	サヌカイト	I	SK06			54.7	27.1	6.8	13.5
S16	削器	サヌカイト	III			包含層 (黒褐色シルト)	46.5	32.0	12.7	16.6
S17	削器	サヌカイト	I	SK06			74.0	58.2	10.2	28.2
S18	削器	サヌカイト	III	北半流路		上層	66.9	29.6	13.0	19.7
S19	削器	サヌカイト	I	SD01			84.8	65.9	11.6	50.6
S20	打製石包丁	サヌカイト	III	北半部縫隙上 (落ち込み)		縫隙上面	43.1	44.3	8.9	20.8
S21	打製石包丁	サヌカイト	I	SH01			92.6	43.7	12.8	72.4
S22	打製石包丁	サヌカイト	III	北半部縫隙上 (落ち込み)		縫隙上面	65.8	46.5	9.8	31.6
S23	楔形石器	サヌカイト	A 1	I	SD01 SK10切り合いで		30.3	36.2	7.0	5.6
S24	楔形石器	サヌカイト	A 3	III	SH04		25.6	33.5	7.0	4.8
S25	楔形石器	サヌカイト	B 1	III		包含層	22.1	26.7	7.1	4.2
S26	楔形石器	サヌカイト	B 1	II	SK01		20.6	29.0	5.8	3.4
S27	楔形石器	サヌカイト	B 1	III	P13		27.7	23.8	7.6	4.7
S28	楔形石器	サヌカイト	B 1	III	北半部縫隙上 (落ち込み)		29.0	33.5	8.7	8.0
S29	楔形石器	サヌカイト	B 1	III	SD03		46.5	29.0	5.7	8.4
S30	楔形石器	サヌカイト	B 1	I	SK07		35.5	38.4	10.5	14.4
S31	楔形石器	サヌカイト	B 1	III		包含層	30.0	52.7	9.2	14.2
S32	楔形石器	サヌカイト	B 2 P 1	SK14			16.2	17.1	5.5	1.6
S33	楔形石器	サヌカイト	B 2 L	III		縫隙上面	35.3	19.6	6.0	3.9
S34	楔形石器	サヌカイト	B 2 L	III	北半部縫隙上 (落ち込み)		42.3	44.7	11.5	22.8
S35	楔形石器	サヌカイト	B 2 L	III		包含層	17.8	21.0	7.2	2.9
S36	楔形石器	サヌカイト	B 2 L	I	P45		24.5	59.8	8.8	7.8
S37	楔形石器	サヌカイト	B 2 P	II	SK01		27.4	48.6	9.4	13.5
S38	楔形石器	サヌカイト	B 2 L	II		包含層	48.0	51.2	12.7	35.8
S39	二次加工剥片	サヌカイト	III	SK01			24.2	26.5	4.0	2.3
S40	二次加工剥片	サヌカイト	III			縫隙上面	42.6	28.3	12.0	12.0
S41	二次加工剥片	サヌカイト	I	SH01			49.3	36.1	9.5	14.6
S42	二次加工剥片	サヌカイト	I	SD01			67.0	50.5	13.7	32.4
S43	剥片	凝灰岩?	II	SK02			27.6	17.8	5.6	1.8
S44	剥片	チャート	III	北半流路		上層	30.8	24.6	8.0	4.3
S45	剥片	サヌカイト	I	画面査			56.3	41.3	12.1	29.0
S46	打製石包丁破片	粘板岩	I	SK16			30.7	28.1	7.4	6.4
S47	敲石	花崗岩	III	SD01			59.5	57.5	57.1	267.3
S48	敲石	安山岩	I	SK16			98.6	35.9	28.2	133.5
S49	磨石	花崗岩	III	SD03			159.1	52.3	48.7	615.3
S50	磨石	花崗岩	I	SK06			59.8	101.8	27.9	209.7
S51	磨石	花崗岩	III	SK01			84.2	92.1	38.5	400.5
S52	磨石	安山岩	I	P42			90.5	47.6	23.7	162.0
S53	砥石	砂岩	I	SK16			110.6	118.5	36.5	604.3
S54	砥石	安山岩	III	P33			199.8	93.8	45.3	1430.0
S55	RF	サヌカイト	I	P17			26.2	17.8	2.1	1.0
S56	RF	サヌカイト	I	SH01			13.6	10.2	1.6	0.1

剥離も顕著である。S31は3辺に剥離面が見られるが、上面の剥離が特に微細である。左側の刃断面にも敲打痕がみられる。

B2P (S32・S37)

S32は16点の中で最も小さい。下部に折れた後に何度も敲打された痕が残る。S37は上下に微細で潰れた階段状剥離が見られるが、その内側には両面からの連続した丁寧な調整が施されていることから、削器を楔に再利用したものと推測される。

B2L (S33～S36・S38)

S33は小さな剥片を利用した楔で、下面の刃断面にも敲打が見られる。S34の階段状剥離は、上面にのみ認められる。S35も小ぶりの楔である。刃断面にも階段状剥離や敲打痕が見られる。S36はL字状の2つの縁辺に階段状剥離を認めたので、楔形石器に分類した。S38は上面に大きく潰れた階段状剥離が見られる。その内側には連続した調整が見られることや、断面の形状から見て、打製石包丁を再利用した可能性も考えられる。すべてサヌカイト製であるが、S29・S33は、色が白く風化が認められる。

二次加工ある剥片、剥片 (図版39、S39～S42・S43～S45)

剥片の一部に、当時の剥離と区別される剥離痕をもつものを、二次加工ある剥片とした。S39は下面に微細な二次加工痕をもつ。S40は切削面をもつ剥片で、表面に連続した二次加工痕が見られる。水磨によると思われる摩滅が見られる。S41は表面に自然面を残し、加工痕は潰れた形状を呈する。S42は剥片を取る段階で大きく階段状に剥がされた面をもち、末端はややヒンジーを呈する。S43～S45の剥片は、いずれも旧石器時代のものと思われる。S43は凝灰岩製 (?)、S44はチャート製、S45はサヌカイト製で、風化は著しいが種類ははっきり確認できる。

磨製石包丁破片 (図版39、S46)

粘板岩製で、表面は背部の一部を残すのみで大きく剥落している。従って、刃部の形跡は残っていないが、裏面には研磨痕が見られる。

敲石 (図版39、S47～S49)

S47は花崗岩製である。丸い石を使っているが、所々に平坦な部分が見られる。他の面はざらついており、敲打痕も認められるが、平坦な部分はつるつとしているところから、磨石として使用された可能性もある。S48は安山岩製。S49は花崗岩製で、両方とも細長い石を利用していている。上下の部分に敲打痕が見られる。

磨石 (図版39、S50～S52)

S52は上下にやや敲打痕が見られることから、敲石として使用した可能性もあると思われる。安山岩製である。

砥石 (図版39、S53・S54)

S53は目の粗い砂岩製の石を利用した砥石である。砥面は表面のみで、明瞭な砥面をもたない。S54は目の細かい安山岩製の石を利用している。4面を利用しているが、砥面はほぼ平坦である。表面の下方に、やや研磨の痕跡がみられる。

(古谷)

参考文献：兵庫県教育委員会1998『細道跡』

(3) 金属器

3点出土している。すべてⅡ区包含層からの出土で時期は確定できないが江戸時代であろうか。

M 1だけは耕土混じりの層から出土しているので新しい時期になる。頭部を曲げた釘である。断面5.5×6.5mmの方形で頭部は13mm曲げている。先端は折れしており、残存長42.5mmである。

M 2は最大幅16mm、残存長33.5mmの薄い銅破片である。片側の弧状部分だけが確實に生きている。厚さは0.5mm以下である。残存状態のためかもしれないが、反っている。

M 3は銅製の煙管である。吸い口部分で最大幅は10.5mmで図化した部分で幅9mm、高さ6.5mmの断面梢円形になっている。0.5mm以下の薄さで曲げている。長さは35.5mm残っている。 (渡辺)

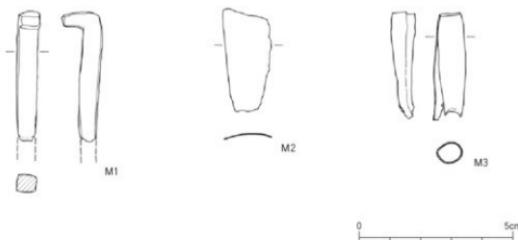


図12 金属器実測図

表2 出土遺物観察表

番号	種別	種類	地区	通横	技法	他	形態的特徴		法長(cm)	口径	高さ	底径	操作
							内面	外側					
1	漆生器	盃	1	SK01	ナヂ、ヨコナヂ、絞模子文、田面落文	外側する山腹部でやくら曲がる	(11.00)	(2.85)	1.1倍径1.9				
2	漆生器	盃	1	SK01	ヨビ底形からナヂ、円孔、白漆	外側する山腹部で山腹内側に彎曲丸い	(11.30)	(6.60)	1.1倍径1.4				
3	漆生器	鉢	1	SK01	タケツのちナヂ、ヨコナヂ	内面し周縁部厚	(24.10)	(4.10)	1.1倍径1.18				
4	漆生器	鉢手	1	SK01	ナヂ	所に不規則厚				(8.35)			把
5	漆生器	盃	1	SK01	ハケ壓形からナヂ、ヨコナヂ、四線	内側する山腹から腹へ聞く山腹	(13.40)	(6.65)	1.1倍径1.9				
6	漆生器	盃	1	SK01	ナヂ、ミヨギ	平らから山腹する	(3.70)	(3.70)	1.1倍径1.4	(7.10)	(6.00)		
7	漆生器	盃	1	SK01	ナヂ、ミヨギ	平らから山腹する	(3.70)	(5.95)	1.1倍径1.2				
8	漆生器	盃	1	SK02	ナヂ、ヨコナヂ、巴縫、扇口、印伝文	外側し周縁部厚	(26.00)	(1.85)	1.1倍径1.12				
9	漆生器	盃	1	SK02	ナヂ、ヨコナヂ、尖節、長縫2条	外側する	(2.45)		1.1倍径1.12				
10	漆生器	盃	1	SK02	ヨコナヂ、印伝	外側し周縁部に削厚	(13.90)	(5.15)	1.1倍径1.12				
11	漆生器	鉢	1	SK02	ヨコナヂ、四線4条	内面し周縁部厚	(33.80)	(4.00)	1.1倍径1.18				
12	漆生器	盃	1	SK02	ハケ壓形からナヂ、ヨガキ、ヨコナヂ	内側する山腹に削り窪く山腹	(13.30)	(6.00)	1.1倍径1.9				
13	漆生器	盃	1	SK02	ナヂ、ヨビ底形からナヂ、ヨガキ	平らから山腹する	(3.65)	(10.30)	1.1倍径1.6				
14	漆生器	盃	1	SK03	ナヂ、ヨコナヂ、透欵文、直縫文	直筋的に聞く	(9.20)	(9.20)	1.1倍径1.2				
15	漆生器	盃	1	SK05	内面ケツメイ、外側ケツメイからナヂ、ヨコナヂ	平らから山腹し外側する山腹	(6.10)	(5.60)	1.1倍径1.12				
16	漆生器	盃	1	SK05	ヨコナヂ、圓面刻文	外側し周縁部厚	(11.10)	(5.55)	1.1倍径1.5				
17	漆生器	鉢	1	SK06	ヨコナヂ、圓面刻文	外側し周縁部に肥厚	(21.90)	(1.80)	1.1倍径1.8				
18	漆生器	鉢	1	SK06	ヨコナヂ	外側し周縁部に肥厚	(26.90)	(4.40)	1.1倍径1.6				
19	漆生器	鉢手	1	SK06	ナヂ	内面し不規則厚			1.1倍径1.6				
20	漆生器	鉢手	1	SK06	内面ケツメイ、外側ハケ、U形底ヨコナヂ	内側する山腹から山腹へ聞く山腹	(12.45)	(3.35)	1.1倍径1.6				
21	漆生器	盃	1	SK06	ナヂ、ヨコナヂ	内側する山腹から山腹へ聞く山腹	(23.85)	(6.30)	1.1倍径1.8				
22	漆生器	盃	1	SK06	ハケ壓形、ヨコナヂ	内側する山腹から山腹へ聞く山腹	(26.90)	(10.50)	1.1倍径1.8				
23	漆生器	盃	1	SK07	ヨビ底形からナヂ、ヨコナヂ、穴開、削み	外側し削りて垂下、周縁厚	(16.00)	(1.30)	1.1倍径1.10				
24	漆生器	鉢	1	SK07	ナヂ、ヨコナヂ、3葉尖突	内側する山腹から山腹肥厚	(22.30)	(3.70)	1.1倍径1.10				
25	漆生器	盃	1	SK07	ヨコナヂ、5葉尖突文	内面し周縁部外へ肥厚	(1.30)		1.1倍径1.0				
26	漆生器	盃	1	SK07	直縫文、管	内面	(6.40)		1.1倍径1.0				
27	漆生器	盃	1	SK07	ハケ壓形、ナヂ、指痕印(突筋)	内面に凸がある	(3.30)		1.1倍径1.0				
28	漆生器	盃	1	SK07	ナヂ、直縫文	内面	(2.40)		1.1倍径1.0				
29	漆生器	盃	1	SK07	ナヂ、ヨコナヂ	内側する山腹、則く外側し重厚つむじ	(15.10)	(4.80)	1.1倍径1.5				
30	漆生器	盃	1	SK07	ヨビ底形からナヂ、ヨコナヂ	内側する山腹から山腹へ聞く山腹	(16.10)	(5.00)	1.1倍径1.10				
31	漆生器	盃	1	SK07	ハケ壓形からナヂ、ヨコナヂ	内側する山腹から山腹肥厚	(25.00)	(6.45)	1.1倍径1.7				
32	漆生器	盃	1	SK07	ヨビ底形からナヂ、ヨコナヂ	内側する山腹から山腹へ聞く山腹	(25.10)	(7.60)	1.1倍径1.12				
33	漆生器	盃	1	SK07	ユビ底形からナヂ、ヨコナヂ	平らから山腹する	(5.00)	(6.20)	1.1倍径1.4				
34	漆生器	盃	1	SK07	ハケ壓形からナヂ	平らから山腹する	(5.10)	(5.25)	1.1倍径1.0				
35	漆生器	盃	1	SK07	ユビ底形、ケズリ、ナヂ	平らから山腹する	(8.30)	(6.30)	1.1倍径1.2				

番号	種別	品種	地区	通帳	経法	他	形態の特徴		口径	基面	底径	疾群	備考
							内葉から外側する	内葉から外側に水平に開く					
36	系生1号	美	1	SK007	ハケヅイリ、ナガ、ミガキ		内葉から外側する	内葉から外側に水平に開く	(26.10)	(8.60)	(7.70)	底肥1/4	
37	系生1号	林	1	SK007	ハケヅイリ、ヨコナラ、削み		内葉から外側する	内葉から外側に水平に開く	(28.10)	(8.60)	(7.60)	上部肥1/6	
38	系生1号	林	1	SK007	ハケヅイリ、ヨコナラ、削み		内葉から外側に水平に開く	内葉から外側に水平に開く	(28.00)	(8.60)	(7.60)	上部肥1/6	
39	系生1号	林	1	SK007	ハケヅイリ、ヨコナラ、ミガキ、ヨコナラ		内葉から外側する	内葉から外側に水平に開く	(27.50)	(9.35)	(8.60)	上部肥3/4	
40	系生1号	高杯	1	SK007	放り目、ズイリ、ミガキ		外側する	田板花壇	(8.60)			箭肥1/4	2次地成
41	系生1号	高杯	1	SK007	ハバキ、ヨコナラ		筒状	筒状	(8.60)			箭肥1/4	
42	系生1号	高杯	1	SK008	ナデ、ヨコナラ		筒状	筒状	(28.20)	(8.60)	(7.60)	上部肥1/8	
43	系生1号	高杯	1	SK008	ナデ、ヨコナラ		筒状	筒状	(4.90)	(14.50)	(14.50)	底肥1/8	
44	系生1号	美	1	SK10	ヨコナラ		外側する	外側に開く	(36.40)	(1.80)		上部肥1/16	
45	系生1号	世	1	SK10	ハケヅイリ、ヨコナラ、萬葉文		外側する	外側に開く	(3.30)			小片	
46	系生1号	世	1	SK10	内葉ケイズ、ナ、外葉ニタキ		外側する	外側に開く	(7.00)			底肥完	
47	系生1号	美	1	SK13	ヨコナラ、削み		外側から内側する	筒状で筒肥が入る	(25.50)	(1.20)		上部肥1/10	
48	系生1号	世	1	SK13	内葉ケイズ、外葉ケイズ、ミガキ		内側から外側する	筒状で筒肥が入る	(3.30)			小片	
49	系生1号	美	1	SK13	内葉ケイズ、外葉ケイズ、ミガキ		内側から外側する	筒状で筒肥が入る	(3.20)	(4.90)	(4.90)	底肥1/4	
50	系生1号	美	1	SK14	ヨコナラ、削み		内側から外側する	筒状で筒肥が入る	(27.80)	(2.50)		上部肥1/16	
51	系生1号	世	1	SK14	ヨコナラ、削み		内側から外側する	筒状で筒肥が入る	(7.00)	(5.70)	(5.70)	底肥1/4	2次地成
52	系生1号	世	1	SK16	削み		外側する	筒状で筒肥が入る	(18.00)	(2.00)		上部肥1/12	
53	系生1号	世	1	SK16	ヨコナラ、削み		外側する	筒状で筒肥が入る	(18.40)	(15.00)		上部肥完	
54	系生1号	世	1	SK16	ユビ葉形からナラ、ヨコナラ、削み		外側する	筒状で筒肥が入る	(11.60)	(8.35)		上部肥1/10	
55	系生1号	世	1	SK16	ユビ葉形からナラ、削み		外側する	筒状で筒肥が入る	(21.00)	(11.45)		上部肥1/4	
56	系生1号	世	1	SK16	ユビ葉形からナラ、5、4、新葉文		内側する	筒状で筒肥が入る	(9.60)			小片	
57	系生1号	世	1	SK16	ナシからナガキ、筒形尖端2葉		内側から外側する	筒状で筒肥が入る	(51.30)	(11.50)		底肥完	
58	系生1号	世	1	SK16	ナシ、筒形尖端2葉		内側から外側する	筒状で筒肥が入る	(26.50)	(3.30)		小片	
59	系生1号	世	1	SK16	3葉沈穢		筒形尖端2葉	筒形尖端2葉	(5.20)			小片	
60	系生1号	世	1	SK16	ハケヅイリ、ヨコナラ、3葉以上の化粧		外側する	筒状で筒肥が入る	(6.80)			小片	
61	系生1号	世	1	SK16	ハケヅイリ、ヨコナラ、3葉以上の化粧		外側する	筒状で筒肥が入る	(8.10)			小片	
62	系生1号	世	1	SK16	ハナ、ナガ、3葉以上の化粧		筒状の体から外側し筒肥を要する	筒状の体から外側し筒肥を要する	(24.20)	(35.30)		上部肥1/3	
63	系生1号	世	1	SK16	ヨコナラ、ミガキ、6、条葉		筒状の体から外側し筒肥を要する	筒状の体から外側し筒肥を要する	(12.70)			小片	
64	系生1号	世	1	SK16	ヨコナラ、ミガキ、6、条葉		筒状の体から外側し筒肥を要する	筒状の体から外側し筒肥を要する	(33.00)	(10.90)		底肥3/4	
65	系生1号	世	1	SK16	ハナ、ナ、5葉沈穢		筒状の体から外側し筒肥を要する	筒状の体から外側し筒肥を要する	(25.30)	(15.00)		底肥1/2	
66	系生1号	世	1	SK16	ナシ		筒状の体から外側し筒肥を要する	筒状の体から外側し筒肥を要する	(25.30)	(14.70)		底肥3/4	
67	系生1号	世	1	SK16	ハケヅイリ、ヨコナラ、6、条葉		外側する	筒状で筒肥が入る	(29.80)	(18.60)		上部肥2/3	
68	系生1号	世	1	SK16	ヨビ葉形からナラ、突節2葉、筒形尖端		筒状の体から外側し筒肥を要する	筒状の体から外側し筒肥を要する	(27.30)			底肥完	
69	系生1号	世	1	SK16	ヨビ葉形からナラ、突節2葉、筒形尖端		筒状の体から外側し筒肥を要する	筒状の体から外側し筒肥を要する	(28.30)	(9.40)		小片	
70	系生1号	世	1	SK16	ヨコナラ、ミガキ、3葉新葉		筒状の体から外側し筒肥を要する	筒状の体から外側し筒肥を要する	(4.20)			小片	

番号	種別	品種	地区	通帳	桂法	他	形態的特徴		口径	基面	底面	種等
							内葉する	外葉する				
71	系生土器	壺	1	SK16	ナデ、7葉尖端				(7.70)	小片		
72	系生土器	壺	1	SK16	内面に突出部で外輪				(3.10)	小片		
73	系生土器	壺	1	SK16	ナデ				(3.70)	8.90	底面/4	
74	系生土器	壺	1	SK16	スピノ形からナデ、縦隔壁み、北國				(4.30)	小片		
75	土器	壺	1	SK17	ヨコナデ、ミガキ、角切?				(1.80)	(4.00)	底面/5	
76	土器	壺	1	SK19	平から外輪に膨る				9.80	1.90	5.70	1.1倍底/5.5
77	土器	壺	1	P01	ナデ、ミキ、ヨコナデ、ヘラ切り				(26.40)	(5.00)	1.1倍底/1.20	
78	系生土器	壺	1	SK65 P04	ナデ、ミキ、10葉凹端、斜格子				10.20	(13.00)	小片	
79	系生土器	壺	1	P05	スピノ形からナデ、ハケ				(2.50)	5.10	底面/6	
80	系生土器	壺	1	P20	ヨコナデ、竹管文、肩有文、脚有文、斜格子				(25.70)	(3.30)	1.1倍底/1.8	
81	系生土器	壺	1	P33	ハッコ形、ヨコナデ、ナデ、脚み				(16.70)	(5.40)	底面/12	
82	系生土器	壺	1	P33	ヨコナデ				(1.70)	小片		
83	系生土器	壺	1	P41	ハケ無文、竹管文、斜格子、直線文				(6.10)	小片		
84	系生土器	壺	1	SD01	ヨコナデ、竹管文、斜格子				(14.50)	(1.60)	1.1倍底/1.12	
85	系生土器	壺	1	SD01	ナデ、ヨコナデ、1ガキ、2枚次元に削み				(3.80)		1.1倍底/1.6	
86	系生土器	肥手	1	SD01	ナデ							
87	系生土器	壺	1	SD01	ハッコ形からナデ、捺压痕のある空窓				(5.50)			
88	系生土器	壺	1	SD01	ハッコ形からナデ							
89	系生土器	壺	1	SD01	ナデ、腹の向のミガキ							
90	系生土器	壺	1	SD01	ナデ、ヨコナデ							
91	系生土器	壺	1	SD01	ナデ、ヨコナデ							
92	系生土器	壺	1	SD01	靴ナデ、ガキ							
93	系生土器	壺	1	SD02	ナデ、ナデ							
94	系生土器	壺	1	SD02	2枚次元、棒状浮文、ミガキ							
95	系生土器	壺	1	SH01	ナデ、2枚空窓(削み)							
96	系生土器	壺	1	SH01	ナデ、斜め下方、田字状浮文							
97	系生土器	壺	1	SH01	スピノ形からナデ、直線文、直線文							
98	系生土器	壺	1	SH01	ナデ、直線文・直線文							
99	系生土器	壺	1	SH01	ナデ、2枚空窓							
100	系生土器	壺	1	SH01	ハッコ形から前縁と、2枚空窓(削み)							
101	系生土器	壺	1	SH01	内壁ハケ、外側ナデからミガキ							
102	系生土器	壺	1	SH01	内壁ハケ、外側ナデからミガキ							
103	系生土器	壺	1	SH01	ナデをちぢらミガキ							
104	系生土器	壺	1	SH01	ナデをちぢらヨコナデ							
105	系生土器	壺	1	SH01	内窓ケズり、ナデ、口縁ヨコナデ							

番号	種別	品種	地区	通稱	桂法 他	形態特徴		口径	基面	底径	疾群	備考
						水生に退化する部分以外に肥厚がある やや上げて体部を反らみ 外にする	外から輪郭に引掛かる体部 可動から輪郭に引掛かる体部					
106	淡水土器	要	I	S101	ヨコナード	ケズリから輪郭部分をミガキ	(32.00)	(1.65)	(4.70)	4.80	黒斑1/6	118番目1/12
107	淡水土器	要	I	S101	ヨコナード	ケズリから輪郭部分をミガキ	(32.00)	(4.70)	(8.40)	8.80	黒斑1/5	
108	淡水土器	泡	I	SX03	ハテ、ミガキ、尖端5条	輪郭部分のケツ型、11条以上化粧	(32.00)	(9.40)	(14.20)	14.40	黒斑1/4	
109	淡水土器	泡	I	SX03	ハテ、ミガキ	輪郭部分のケツ型、11条以上化粧	(32.00)	(9.40)	(14.20)	14.40	黒斑1/2	
110	淡水土器	泡	I	SX03	ハテ、ミガキ	輪郭部分のケツ型、11条以上化粧	(32.00)	(9.40)	(14.20)	14.40	黒斑1/2	
111	淡水土器	泡	I	SX03	ヨコナード、5条凹曲、円筒形	外から輪郭をよく下げる 大きな底盤と外側傾斜	(19.20)	(3.65)	(19.00)	19.80	黒斑1/8	
112	淡水土器	泡	I	SX03	ヨコナード、5条凹曲、円筒形	外から輪郭をよく下げる 大きな底盤と外側傾斜	(19.20)	(3.65)	(19.00)	19.80	黒斑1/8	
113	淡水土器	泡	I	SX03	ヨコナード、円筒形	外から輪郭をよく下げる 大きな底盤と外側傾斜	(19.20)	(3.65)	(19.00)	19.80	黒斑1/8	
114	淡水土器	泡	I	SX03	ハテ、2条含蓄	外から輪郭をよく下げる 大きな底盤と外側傾斜	(14.00)	(6.70)	(14.00)	14.70	黒斑1/4	118番目1/—
115	淡水土器	水系	I	SX03	ハテ、ナード、ヨコナード、円筒形	外から輪郭をよく下げる 大きな底盤と外側傾斜	(14.00)	(6.70)	(14.00)	14.70	黒斑1/4	118番目1/—
116	淡水土器	泡	I	SX03	ハテ形、ヨコナード	外から輪郭をよく下げる 大きな底盤と外側傾斜	(14.00)	(6.70)	(14.00)	14.70	黒斑1/6	製造2
117	淡水土器	泡	I	SX03	ハテ形、浅い側面、ヨコナード	外から輪郭をよく下げる 大きな底盤と外側傾斜	(14.00)	(6.70)	(14.00)	14.70	黒斑1/12	
118	淡水土器	把手	I	SX03	ヨコナード、2条含蓄、刷毛口	内側不規則形	(31.50)	(4.30)	(4.30)	4.30	黒斑1/16	把手1/2
119	淡水土器	把手	I	SX03	ヨコナード、2条含蓄	内側不規則形	(31.50)	(4.30)	(4.30)	4.30	黒斑1/16	
120	淡水土器	泡	I	SX03	ヨコナード、2条含蓄	内側不規則形	(31.50)	(4.30)	(4.30)	4.30	黒斑1/16	
121	淡水土器	泡	I	SX03	ヨコナード、外側含蓄	内側不規則形	(31.50)	(4.30)	(4.30)	4.30	黒斑1/16	
122	淡水土器	泡	I	SX03	ヨコナード、油性墨引く歯突、浮き、凹線	内側不規則形	(31.50)	(4.30)	(4.30)	4.30	黒斑1/16	
123	淡水土器	泡	I	SX03	ヨコナード、凹線	内側不規則形	(31.50)	(4.30)	(4.30)	4.30	黒斑1/16	
124	淡水土器	泡	I	SX03	ヨコナード、輪郭含蓄	内側不規則形	(31.50)	(4.30)	(4.30)	4.30	黒斑1/16	
125	淡水土器	泡	I	SX03	ヨコナード、輪郭含蓄	内側不規則形	(31.50)	(4.30)	(4.30)	4.30	黒斑1/16	
126	淡水土器	高杯	I	P10	ハテ形、ヨコナード	内側不規則形	(31.50)	(4.30)	(4.30)	4.30	黒斑1/16	
127	淡水土器	泡	I	P10	ハテ形、ヨコナード	内側不規則形	(31.50)	(4.30)	(4.30)	4.30	黒斑1/16	
128	淡水土器	泡	I	P10	ヨコナード、棘状突出部、円形容	内側不規則形	(31.50)	(4.30)	(4.30)	4.30	黒斑1/16	
129	淡水土器	泡	I	P19	ハテ形、ヨコナード	内側不規則形	(31.50)	(4.30)	(4.30)	4.30	黒斑1/16	
130	淡水土器	泡	I	P31	ヨコナード、含蓄1条、刷毛口	外側不規則形	(31.50)	(4.30)	(4.30)	4.30	黒斑1/16	
131	淡水土器	泡	I	SX03	ヨコナード	内側不規則形	(31.50)	(4.30)	(4.30)	4.30	黒斑1/16	
132	淡水土器	泡	I	SX03	ヨコナード	内側不規則形	(31.50)	(4.30)	(4.30)	4.30	黒斑1/16	
133	淡水土器	泡	I	SX03	ヨコナード、外側3条、内側1条節	内側不規則形	(31.50)	(4.30)	(4.30)	4.30	黒斑1/16	
134	淡水土器	泡	I	SX03	ハテ形、油性墨文、直線文	内側不規則形	(31.50)	(4.30)	(4.30)	4.30	黒斑1/16	
135	淡水土器	泡	I	SX03	ハテ形、油性墨文、直線文、竹管文	内側不規則形	(31.50)	(4.30)	(4.30)	4.30	黒斑1/16	
136	淡水土器	泡	I	SX03	3条化粧	内側不規則形	(31.50)	(4.30)	(4.30)	4.30	黒斑1/16	
137	淡水土器	泡	I	SX03	筋状の丸み	内側不規則形	(31.50)	(4.30)	(4.30)	4.30	黒斑1/16	
138	淡水土器	泡	I	SX03	2セピアラバモチ、ナード、尖端8条上	内側不規則形	(31.50)	(4.30)	(4.30)	4.30	黒斑1/16	
139	淡水土器	泡	I	SX03	ハテ形、直線文、ナード、尖端8条上	内側不規則形	(31.50)	(4.30)	(4.30)	4.30	黒斑1/16	
140	淡水土器	泡	I	SX03	ナード、浅縫6条	内側不規則形	(31.50)	(4.30)	(4.30)	4.30	黒斑1/16	

番号	種別	器種	地区	通稱	絆法	他	形態の概要		口径	器高	底径	疾群	備考
							内に含むる体部から外に延びる骨	外に含むる骨部から外に延びる骨					
141	祭主土器	甕	日	SK001	ナデ、16条以上北端		各に内含むる体部から外に延びる骨		(24.90)	(7.70)		上部破損/6	
142	祭主土器	甕	日	SK004	ナデ型形、ナデ、2条北端		外に含むる骨部から外に延びる骨	内にする	(16.60)	(7.30)		上部破損/9	
143	祭主土器	甕	日	SK004	ナデ、8条北端		内にする				(3.30)		小片
144	祭主土器	甕	日	SK004	ナデ、滑石刷み目、1条北端		内にする		(2.10)			小片	
145	祭主土器	甕	日	SK004	ナデ		内にする		(2.60)		5.40	底部完	
146	祭主土器	甕	日	SK004	ナデ	ハナ型形からナデ	内にする		(4.80)	(8.05)		底部破損/4	
147	祭主土器	甕	日	SK004	ナデ		内にする		(8.60)	(4.90)		底部破損/12	
148	祭主土器	甕	日	SK004	ナデ、滑石刷み目、7条北端		内にする		(11.80)	(4.00)		上部破損/12	
149	祭主土器	甕	日	SK004	ナデ、滑石刷み目、8条北端		内にする		(21.80)	(4.45)		上部破損/18	
150	祭主土器	甕	日	SK004	ナデ、滑石刷み目、ナデ重毛、8条北端		内にする		(21.80)	(6.10)		上部破損/12	
151	祭主土器	甕	日	SK004	ナデ	ハナ型形からナデ	内にする		(22.00)	(5.90)		上部破損/12	
152	祭主土器	甕	日	SK004	ナデ	ハナ型形からナデ	内にする		(8.20)	(8.20)		底部/3	
153	祭主土器	甕	日	SK004	ナデ、ハナ型形		内にする		(6.10)	(8.40)		底部/2.3	
154	祭主土器	甕	日	SK002	ヨコナデ		内にする		(9.80)	(3.00)		上部破損/6	
155	祭主土器	甕	日	SK002	ヨコナデ、滑石刷み目付き		内にする		(24.20)	(9.35)		上部破損/6	2次地成
156	祭主土器	甕	日	SK002	ヨコナデ、滑石刷み目付き		内にする		(9.45)	(16.20)		ヨリ/2	
157	祭主土器	甕	日	SK002	ヨコナデ		内にする				(3.35)		底部/1.5
158	祭主土器	甕	日	SK002	ヨコナデ、内面2・内面1条欠陥		内にする		(13.80)	(6.60)		上部破損/4	
159	祭主土器	甕	日	SK002	ヨコナデ、3条欠陥刷み目		内にする		(31.50)	(4.35)		上部破損/9	
160	祭主土器	甕	日	SK002	ヨコナデ、新椅子・直線文		内にする				(4.30)		小片
161	祭主土器	甕	日	SK002	ナデ、椅子形		内にする				(7.20)		小片
162	祭主土器	甕	日	SK002	ハナ型形、直線文		内にする				(8.00)		小片
163	祭主土器	甕	日	SK002	ハナ型形、滑石文・直線文		内にする				(11.00)		小片
164	祭主土器	甕	日	SK002	ハナ型形、滑石文・直線文		内にする				(4.60)		小片
165	祭主土器	甕	日	SK002	ハナ型形、滑石文		内にする				(7.40)		小片
166	祭主土器	甕	日	SK002	ナデ、直線文・椅子文		内にする				(4.80)		小片
167	祭主土器	甕	日	SK002	ハナ型形、椅子文・斜斜文・直線文		内にする				(9.80)		小片
168	祭主土器	甕	日	SK002	ヨビ底形からナデ・ヨガキ		内にする				(14.40)		底部完
169	祭主土器	甕	日	SK002	ヨビ底形からナデ		内にする				(3.30)		底部/8
170	祭主土器	甕	日	SK002	ヨコナデ、ナデ		内にする				(1.40)		小片
171	祭主土器	甕	日	SK002	ヨコナデ、直線文		内にする		(15.20)	(4.30)		上部破損/6	
172	祭主土器	高杯	日	SK002	ヨコナデ、田園浮文		内にする		(23.50)	(3.80)		上部破損/10	
173	祭主土器	高杯	日	SK002	ヨコナデ、刷みの付く空腹		内にする		(22.85)	(4.45)		ヨリ/15 完形	
174	祭主土器	高杯	日	SK002	ヨコナデ、田園浮文		内にする		(21.80)	(4.20)		上部破損/7	

番号	種別	品種	地区	通稱	採法	他	形態的特徴		口径	基面	基柱	備考
							外観から外れる	外れる				
176	淡水土器	美	日	SX007	ナデ、外観にガキ		平底から外れる	平底から外れる	(2.40)	6.30	1.1倍径/2.3	
177	淡水土器	豊	日	SX008	ヨコナデ、横斜面削文、竹管文		垂耳する	垂耳する	(2.10)	(5.30)	1.1倍径/1.10	黒褐色/1.28
178	淡水土器	豊	日	SX008	ヨコナデ、削み目、2条筋		外斜面削文	外斜面削文	(3.60)	(3.60)	1.1倍径/1.10	
179	淡水土器	豊	日	SX008	ヨコナデ、削み目、2条筋	1.1倍1.10	外斜面削文	外斜面削文	(26.35)	(4.60)	1.1倍径/1.16	
180	淡水土器	休	日	SX008	ナデ、ヨコナデ、尖端に削み目		内斜面削文	内斜面削文	(8.30)	(4.80)	1.1倍径/1.16	
181	淡水土器	豊	日	SX008	ハナ型形、深狀文		内斜面削文	内斜面削文	(4.80)	(14.00)	1.1倍径/1.18	
182	淡水土器	豊	日	SX008	ヨビ形、ミカナデ		平底から外れる	平底から外れる	(4.30)	(9.50)	1.1倍径/1.3	
183	淡水土器	豊	日	SX008	ナデ、ヨコナデ		今上に上げてから外れる	今上に上げてから外れる	(2.70)	8.40	1.1倍径/1.3	
184	淡水土器	豊	日	SX008	ナデ、削み目、外斜面にガキ		外斜面から外れる	外斜面から外れる	(40.00)	(6.30)	1.1倍径/1.3	
185	淡水土器	美	日	SX008	ヨビ形、ミカナデ、ヨコナデ		内斜面削文	内斜面削文	(4.30)	2.50	1.1倍径/1.3	
186	淡水土器	休	日	SX008	ハナ型、底面円形、ナデ		内斜面削文	内斜面削文	(4.20)	4.90	1.1倍径/1.2	
187	淡水土器	美	日	SX008	ナデ、ヨコナデ		平底から外れる	平底から外れる	(12.40)	(5.25)	1.1倍径/1.0	
188	淡水土器	豊	日	SK12	ハナ型、2条空筋		外斜面削文	外斜面削文	(25.10)	(5.30)	1.1倍径/1.12	
189	淡水土器	高杯	日	SK12	ヨコナデ		外斜面削文	外斜面削文	(12.70)	(7.45)	1.1倍径/1.3	
190	淡水土器	豊	日	SX01	ナデ		内斜面削文	内斜面削文	(14.85)	(1.95)	1.1倍径/1.6	
191	淡水土器	豊	日	SX01	ヨコナデ、直腹、凹縫		内斜面削文	内斜面削文	(7.40)	(9.90)	1.1倍径/1.2	
192	淡水土器	豊	日	SX01	ヨコナデ、四縫3ヶ		内斜面削文	内斜面削文	(3.30)	6.40	1.1倍径/1.4	
193	淡水土器	豊	日	SX01	ヨビ形、ミカナデ、削み目、円筒形		内斜面削文	内斜面削文	(4.30)	(9.50)	1.1倍径/1.2	
194	淡水土器	豊	日	SX01	ナデ、直腹、底面丸形、ガキ文		内斜面削文	内斜面削文	(22.30)	(3.20)	1.1倍径/1.8	
195	淡水土器	豊	日	SX01	ナデ、直腹、底面丸形		外斜面削文	外斜面削文	(25.00)	(2.60)	1.1倍径/1.2	
196	淡水土器	豊	日	SX01	ナデ、削み目、ナデ側面にミガキ		内斜面削文	内斜面削文	(5.75)	5.55	1.1倍径/1.2	
197	淡水土器	豊	日	SX01	靴ナデ、ナデ側面にミガキ		平底から外れる	平底から外れる	(3.30)	6.40	1.1倍径/1.4	
198	淡水土器	要	日	SX01	靴ナデ、1.1倍1.10		平底から外れる	平底から外れる	(4.30)	(9.50)	1.1倍径/1.2	
199	淡水土器	豊	日	SX01	内斜ケイズ、1.1倍1.10ヨコナデ		内斜面削文	内斜面削文	(15.25)	(4.00)	1.1倍径/1.8	
200	淡水土器	豊	日	SX01	ヨコナデ、四縫2ヶ		外斜面削文	外斜面削文	(29.30)	(6.60)	1.1倍径/1.8	
201	淡水土器	豊	日	SX01	ヨケ、削み目、直腹		内斜面削文	内斜面削文	(7.40)	(6.40)	1.1倍径/1.6	
202	淡水土器	要	日	SX01	ヨビ形、削み目、ナデ、ミガキ		平底から外れる	平底から外れる	(7.80)	5.60	1.1倍径/1.4	
203	淡水土器	豊	日	SK01	ナデ、外斜面		平底から外れる	平底から外れる	(2.75)	5.60	1.1倍径/1.4	
204	淡水土器	要	日	SX01	ナデ		小さなつまみから外れる	小さなつまみから外れる	(1.90)	(2.25)	1.1倍径/1.6	
205	土製品	軽舟	日	SX01	ナデ、直腹、中央丸孔		内斜面削文	内斜面削文	(6.25)	6.00	1.1倍径/1.6	
206	淡水土器	若台	日	SX01	ナデ、ヨコナデ、2条筋		外斜面削文	外斜面削文	(29.30)	(6.60)	1.1倍径/1.8	
207	淡水土器	要	日	SX01	1.1倍ヨコナデ、直腹		内斜面削文	内斜面削文	(4.40)	5.10	1.1倍径/1.6	
208	淡水土器	要	日	SK02	ナデ、ハナ型からナデ、内斜文		内斜面削文	内斜面削文	(2.85)	4.45	1.1倍径/1.6	
209	淡水土器	要	日	SX03	ナデ		内斜面削文	内斜面削文				

番号	種別	品種	地区	通帳	接種	他	形態的特徴			口径	基面	疾群	備考
							内面	外側	内面				
211	寄生土苔	寄	三	SX00	内面細いからチダグ、外面シタチダグ		平らから纏へ内折する	外側する筋膜で上筋膜から筋膜へ	(17.45)	(7.45)	3.80	1.1倍幅1/2 黒斑	
212	寄生土苔	寄	三	SK001	薄面細膜、表面新鮮目、斜面空虚、茎コナダ		外側する筋膜で上筋膜から筋膜へ	外側する筋膜で上筋膜から筋膜へ	(9.90)	(9.90)	3.80	1.1倍幅1/2 黒斑	
213	寄生土苔	寄	三	SK001	ビビ皮膜からチダグ、3条筋膜の空虚		平らから纏へ内折する	外側する筋膜で上筋膜から筋膜へ	(10.30)	(10.30)	3.80	1.1倍幅1/2 黒斑	
214	寄生土苔	寄	三	SK001	スピ皮膜からチダグ、外側シタチダグ		外側する筋膜で上筋膜へ	外側する筋膜	(14.10)	(14.10)	3.80	1.1倍幅1/2 黒斑	
215	寄生土苔	寄	三	SK001	6葉以上輪、エラ皮膜からチダグ、ミガキ		内側する	平らから外側する	(9.85)	(9.85)	3.80	1.1倍幅1/2 黒斑	
216	寄生土苔	寄	三	SK001	ビビ皮膜からチダグ、2条以上比較		内側する筋膜で上筋膜から内側する筋膜へ	内側する筋膜で上筋膜から内側する筋膜へ	(2.70)	(8.80)	3.80	1.1倍幅1/2 黒斑	
217	寄生土苔	寄	三	SK001	内面淡い皮膜からチダグ、外側シタチダグ		如皮膜の表面は筋膜から内側する筋膜へ	如皮膜の表面は筋膜から内側する筋膜へ	(37.40)	(21.40)	3.80	1.1倍幅1/6 黒斑	
218	寄生土苔	寄	三	SK001	淡い皮膜からチダグ、外側シタチダグ		平らから纏へ内折する筋膜	平らから纏へ内折する筋膜	(23.60)	(27.85)	8.50	1.1倍幅1/6 黒斑	
219	寄生土苔	寄	三	SK001	ハテ形皮膜からチダグ、底面後端丸		平らから纏へ内折する	内側する筋膜から筋膜へ	(10.10)	(9.40)	4.00	1.1倍幅1/6 黒斑	
220	寄生土苔	寄	三	P01	ナギ、ヨコナダグ		内側する筋膜から筋膜へ	内側する筋膜から筋膜へ	(12.50)	(3.80)	1.1倍幅1/6 黒斑		
221	寄生土苔	寄	三	P22	ハト形皮膜からチダグ、骨質化		内側する	内側する	(3.65)	(3.10)	小片		
222	寄生土苔	寄	三	P22	ナギ、刺突化		外側する	外側する	(3.10)	(3.10)	小片		
223	寄生土苔	寄	三	SD001	ビビ皮膜からチダグ、ハタハタ、ヨコナダグ		外側し縫隙部、前面1筋、外側2筋を含む	外側する筋膜で上筋膜から筋膜へ	(21.15)	(10.90)	1.1倍幅1/2 黒斑		
224	寄生土苔	寄	三	SD001	ヨコナダグ、扁台状2筋		外側から筋膜へ内側する筋膜	外側から筋膜へ内側する筋膜	(20.20)	(20.20)	3.80	1.1倍幅1/4 黒斑	
225	寄生土苔	寄	三	SD001	ビビ皮膜からチダグ、斜面、斜面化		外側から筋膜へ内側する筋膜	外側から筋膜へ内側する筋膜	(12.00)	(6.70)	7.00	1.1倍幅1/5 黒斑	
226	寄生土苔	寄	三	SD001	ビビ皮膜からチダグ、ハタハタ、外面ミキ		内側する	内側する	(11.30)	(11.30)	3.80	1.1倍幅1/4 黒斑	
227	寄生土苔	寄	三	SD001	ハテ形皮膜からチダグ		内側する筋膜から筋膜へ	内側する筋膜から筋膜へ	(12.25)	(27.15)	7.80	1.1倍幅1/4 黒斑	
228	寄生土苔	寄	三	SD001	ビビ皮膜からチダグ、ヘタキギ、ヨコナダグ		平らから縫隙する筋膜へ	平らから縫隙する筋膜へ	(14.10)	(11.25)	3.80	1.1倍幅1/4 黒斑	
229	寄生土苔	寄	三	SD001	ハテ形皮膜、ナギ		内側する筋膜で上筋膜へ	内側する筋膜で上筋膜へ	(11.60)	(9.45)	3.80	1.1倍幅1/2 黒斑	
230	寄生土苔	寄	三	SD001	ビビ皮膜からチダグ、外側ミキ		平らから筋膜へ内側する筋膜	平らから筋膜へ内側する筋膜	(4.80)	(4.80)	6.70	1.1倍幅1/6 黒斑	
231	寄生土苔	寄	三	SD001	スビ皮膜からチダグ、1筋膜厚ヨコナダグ		内側する筋膜で上筋膜へ	内側する筋膜で上筋膜へ	(28.25)	(18.10)	3.80	1.1倍幅1/6 黒斑	
232	寄生土苔	寄	三	SD001	ナギ、外側ミキ、1筋膜厚ヨコナダグ		内側する筋膜で上筋膜へ	内側する筋膜で上筋膜へ	(13.15)	(13.15)	3.80	1.1倍幅1/8 黒斑	
233	寄生土苔	寄	三	SD001	ビビ皮膜からチダグ、ヨコナダグ		内側する筋膜で上筋膜へ	内側する筋膜で上筋膜へ	(9.40)	(7.90)	3.80	1.1倍幅1/2 黒斑	
234	寄生土苔	寄	三	SD001	ビビ皮膜からチダグ、ヨコナダグ		周囲に筋膜する筋膜へ	周囲に筋膜する筋膜へ	(8.70)	(9.70)	3.80	1.1倍幅1/2 黒斑	
235	寄生土苔	寄	三	SD001	スビ皮膜から筋膜厚ヨコナダグ		周囲に筋膜する筋膜へ	周囲に筋膜する筋膜へ	(9.40)	(9.40)	3.80	1.1倍幅1/2 黒斑	
236	寄生土苔	寄	三	SD001	ビビ皮膜からチダグ、ヨコナダグ		内側する筋膜で上筋膜へ	内側する筋膜で上筋膜へ	(11.60)	(11.60)	3.80	1.1倍幅1/8 黒斑	
237	寄生土苔	寄	三	SD001	ナギ、外側ミキ		内側する筋膜で上筋膜へ	内側する筋膜で上筋膜へ	(3.30)	(4.90)	6.70	1.1倍幅1/6 黒斑	
238	寄生土苔	寄	三	SD001	ビビ皮膜からチダグ、奥底厚ヨコナダグ		内側する筋膜で上筋膜へ	内側する筋膜で上筋膜へ	(4.70)	(7.00)	7.00	1.1倍幅1/6 黒斑	
239	寄生土苔	寄	三	SD002	ビビ皮膜からチダグ、表面ミキ		平らから縫隙し、上筋膜へ	平らから縫隙し、上筋膜へ	(18.50)	(25.40)	6.00	1.1倍幅1/2 黒斑	
240	寄生土苔	寄	三	SD002	ビビ皮膜からチダグ、沈殿、ヨコナダグ、ミガキ		内側する筋膜で上筋膜へ	内側する筋膜で上筋膜へ	(4.80)	(8.65)	6.00	1.1倍幅1/3 黒斑	
241	寄生土苔	寄	三	SD002	ハテ形皮膜からチダグ		平らから筋膜へ	平らから筋膜へ	(4.75)	(7.10)	6.00	1.1倍幅1/3 黒斑	
242	寄生土苔	寄	三	SD002	ビビ皮膜からチダグ		平らから筋膜へ	平らから筋膜へ	(11.60)	(11.60)	6.00	1.1倍幅1/12 黒斑	
243	寄生土苔	寄	三	SD003	コナダグ、沈殿後2筋、内形浮子、薄葉等		外側し薄葉の方にまく	外側し薄葉の方にまく	(4.00)	(8.50)	6.00	1.1倍幅1/4 黒斑	
244	寄生土苔	寄	三	SD003	ナギ、外側2筋の向き、突管1筋、薄葉等		外側し薄葉の方にまく	外側し薄葉の方にまく	(10.60)	(13.90)	6.00	1.1倍幅1/4 黒斑	
245	寄生土苔	高杯	三	SD003	ビビ皮膜からチダグ								

番号	種別	品種	地区	通情	接種	形態の特徴		口径	基面	法面(cm)	疾群	備考
						長楕の球状で端部から側面へ延びる瘤つぼむ 平野から山地にかけて上層部多く外見 内寄する	外側ハサク、全体ハサク、1脚筋ヨコナデ 2本1対の内筋文、ナデ					
246	淡水土苔	美	三	SDD03	ユビ底形から内筋からナデ、外面ハサク、ミガキ	(14.00) 1脚筋1/4 小片	(20.00) 1脚筋1/4 小片	13.15 (5.75)	20.50 3.30	5.45 (3.30)	白黒斑/4 白黒斑/4 小片	白黒斑/4 白黒斑/4 小片
247	淡水土苔	優	三	SDD03	外側ハサク、全体ハサク、1脚筋ヨコナデ	(14.00) 1脚筋1/4 小片	(20.00) 1脚筋1/4 小片	13.15 (5.75)	20.50 3.30	5.45 (3.30)	白黒斑/4 白黒斑/4 小片	白黒斑/4 白黒斑/4 小片
248	淡水土苔	優	三	SDD03	ナデ、例文	(14.00) 1脚筋1/4 小片	(20.00) 1脚筋1/4 小片	13.15 (5.75)	20.50 3.30	5.45 (3.30)	白黒斑/4 白黒斑/4 小片	白黒斑/4 白黒斑/4 小片
249	淡水土苔	優	三	SDD07	ヨコナデ、内筋3本寄り筋文、外筋文	(23.60) 1脚筋1/4 小片	(2.20) 1脚筋1/4 小片	23.60 (14.50)	(2.20) (2.10)	1脚筋1/4 1脚筋1/4 小片	白黒斑/4 白黒斑/4 小片	白黒斑/4 白黒斑/4 小片
250	淡水土苔	優	三	SDD07	ヨコナデ、内筋3本寄り筋文、外筋文	(23.60) 1脚筋1/4 小片	(2.20) 1脚筋1/4 小片	23.60 (14.50)	(2.20) (2.10)	1脚筋1/4 1脚筋1/4 小片	白黒斑/4 白黒斑/4 小片	白黒斑/4 白黒斑/4 小片
251	淡水土苔	優	三	SDD07	ハサク、ナデ、ヨコナデ、2本1対の内筋文、外筋文	(23.60) 1脚筋1/4 小片	(2.20) 1脚筋1/4 小片	23.60 (14.50)	(2.20) (2.10)	1脚筋1/4 1脚筋1/4 小片	白黒斑/4 白黒斑/4 小片	白黒斑/4 白黒斑/4 小片
252	淡水土苔	優	三	SDD07	3本四角、竹管文、ヨコナデ、2本1対の内筋文、外筋文	(23.60) 1脚筋1/4 小片	(2.20) 1脚筋1/4 小片	23.60 (14.50)	(2.20) (2.10)	1脚筋1/4 1脚筋1/4 小片	白黒斑/4 白黒斑/4 小片	白黒斑/4 白黒斑/4 小片
253	淡水土苔	優	三	SDD07	3本寄り筋み、例文、ヨコナデ、2本1対の内筋文、外筋文	(23.60) 1脚筋1/4 小片	(2.20) 1脚筋1/4 小片	23.60 (14.50)	(2.20) (2.10)	1脚筋1/4 1脚筋1/4 小片	白黒斑/4 白黒斑/4 小片	白黒斑/4 白黒斑/4 小片
254	淡水土苔	優	三	SDD07	ヨコナデ、ナデ、ヨコナデ、内筋3本寄り筋文、外筋文	(23.60) 1脚筋1/4 小片	(2.20) 1脚筋1/4 小片	23.60 (14.50)	(2.20) (2.10)	1脚筋1/4 1脚筋1/4 小片	白黒斑/4 白黒斑/4 小片	白黒斑/4 白黒斑/4 小片
255	淡水土苔	優	三	SDD07	ナデ、ヨコナデ、内筋3本寄り筋文、外筋文	(23.60) 1脚筋1/4 小片	(2.20) 1脚筋1/4 小片	23.60 (14.50)	(2.20) (2.10)	1脚筋1/4 1脚筋1/4 小片	白黒斑/4 白黒斑/4 小片	白黒斑/4 白黒斑/4 小片
256	淡水土苔	優	三	SDD07	ハサク、ヨコナデ、内筋3本寄り筋文、外筋文	(23.60) 1脚筋1/4 小片	(2.20) 1脚筋1/4 小片	23.60 (14.50)	(2.20) (2.10)	1脚筋1/4 1脚筋1/4 小片	白黒斑/4 白黒斑/4 小片	白黒斑/4 白黒斑/4 小片
257	淡水土苔	底部	三	SDD07	ヨビ底形からナデ	(3.00) 1脚筋1/2 小片	(4.20) 底部1/2 小片	(3.00) (4.20)	(3.00) (4.20)	(3.00) (4.20)	底部1/2 底部1/2 小片	底部1/2 底部1/2 小片
258	淡水土苔	優	三	SDD07	ハサク整形からナデ	(4.65) 1脚筋1/2 小片	(4.65) 1脚筋1/2 小片	(4.65) (4.65)	(4.65) (4.65)	(4.65) (4.65)	1脚筋1/2 1脚筋1/2 小片	1脚筋1/2 1脚筋1/2 小片
259	淡水土苔	優	三	SDD07	ハサク整形からナデ	(21.30) 1脚筋1/2 小片	(21.30) 1脚筋1/2 小片	(21.30) (21.30)	(21.30) (21.30)	(21.30) (21.30)	1脚筋1/2 1脚筋1/2 小片	1脚筋1/2 1脚筋1/2 小片
260	淡水土苔	優	三	SDD07	ハサク整形からナデ、ヨコナデ、2本1対の内筋文、外筋文	(21.30) 1脚筋1/2 小片	(21.30) 1脚筋1/2 小片	(21.30) (21.30)	(21.30) (21.30)	(21.30) (21.30)	1脚筋1/2 1脚筋1/2 小片	1脚筋1/2 1脚筋1/2 小片
261	淡水土苔	優	三	SDD07	ヨコナデ、ハサク、ヨコナデ、内筋3本寄り筋文、外筋文	(23.60) 1脚筋1/2 小片	(2.20) 1脚筋1/2 小片	23.60 (14.50)	(2.20) (2.10)	1脚筋1/2 1脚筋1/2 小片	白黒斑/4 白黒斑/4 小片	白黒斑/4 白黒斑/4 小片
262	淡水土苔	優	三	SDD07	ヨコナデ、ハサク、ヨコナデ、内筋3本寄り筋文、外筋文	(23.60) 1脚筋1/2 小片	(2.20) 1脚筋1/2 小片	23.60 (14.50)	(2.20) (2.10)	1脚筋1/2 1脚筋1/2 小片	白黒斑/4 白黒斑/4 小片	白黒斑/4 白黒斑/4 小片
263	淡水土苔	優	三	SDD07	ヨコナデ、ハサク、ヨコナデ、内筋3本寄り筋文、外筋文	(16.45) 1脚筋1/2 小片	(2.20) 1脚筋1/2 小片	(16.45) (14.50)	(2.20) (2.10)	1脚筋1/2 1脚筋1/2 小片	白黒斑/4 白黒斑/4 小片	白黒斑/4 白黒斑/4 小片
264	淡水土苔	優	三	SDD07	ヨコナデ、ハサク、ヨコナデ、5条間に4:1の横筋が交叉する 3条間に4:1の横筋が交叉する	(2.20) 1脚筋1/2 小片	(2.20) 1脚筋1/2 小片	(2.20) (2.20)	(2.20) (2.20)	(2.20) (2.20)	白黒斑/4 白黒斑/4 小片	白黒斑/4 白黒斑/4 小片
265	淡水土苔	優	三	SDD07	ヨコナデ、ハサク、ヨコナデ、5条間に4:1の横筋が交叉する 3条間に4:1の横筋が交叉する	(10.90) 1脚筋1/2 小片	(10.90) 1脚筋1/2 小片	(10.90) (10.90)	(10.90) (10.90)	(10.90) (10.90)	白黒斑/4 白黒斑/4 小片	白黒斑/4 白黒斑/4 小片
266	淡水土苔	優	三	SDD07	ハサク整形からナデ	(31.50) 1脚筋1/2 小片	(31.50) 1脚筋1/2 小片	(31.50) (31.50)	(31.50) (31.50)	(31.50) (31.50)	白黒斑/4 白黒斑/4 小片	白黒斑/4 白黒斑/4 小片
267	淡水土苔	優	三	SDD07	ヨコナデ、ハサク、ヨコナデ、内筋3本寄り筋文、外筋文	(23.60) 1脚筋1/2 小片	(2.20) 1脚筋1/2 小片	23.60 (14.50)	(2.20) (2.10)	1脚筋1/2 1脚筋1/2 小片	白黒斑/4 白黒斑/4 小片	白黒斑/4 白黒斑/4 小片
268	淡水土苔	優	三	SDD07	ヨコナデ、ハサク、ヨコナデ、内筋3本寄り筋文、外筋文	(23.60) 1脚筋1/2 小片	(2.20) 1脚筋1/2 小片	23.60 (14.50)	(2.20) (2.10)	1脚筋1/2 1脚筋1/2 小片	白黒斑/4 白黒斑/4 小片	白黒斑/4 白黒斑/4 小片
269	淡水土苔	優	三	SDD07	ヨコナデ、ハサク、ヨコナデ、内筋3本寄り筋文、外筋文	(23.60) 1脚筋1/2 小片	(2.20) 1脚筋1/2 小片	23.60 (14.50)	(2.20) (2.10)	1脚筋1/2 1脚筋1/2 小片	白黒斑/4 白黒斑/4 小片	白黒斑/4 白黒斑/4 小片
270	淡水土苔	優	三	SDD07	ヨコナデ、ハサク、ヨコナデ、内筋3本寄り筋文、外筋文	(20.75) 1脚筋1/2 小片	(2.70) 1脚筋1/2 小片	(20.75) (14.50)	(2.70) (2.70)	(20.75) (2.70)	白黒斑/4 白黒斑/4 小片	白黒斑/4 白黒斑/4 小片
271	淡水土苔	優	三	SDD07	ヨコナデ、ハサク、ヨコナデ、内筋3本寄り筋文、外筋文	(21.00) 1脚筋1/2 小片	(2.70) 1脚筋1/2 小片	(21.00) (14.50)	(2.70) (2.70)	(21.00) (2.70)	白黒斑/4 白黒斑/4 小片	白黒斑/4 白黒斑/4 小片
272	淡水土苔	優	三	SDD07	ヨコナデ、ハサク、ヨコナデ、内筋3本寄り筋文、外筋文	(16.90) 1脚筋1/2 小片	(2.65) 1脚筋1/2 小片	(16.90) (14.50)	(2.65) (2.65)	(16.90) (14.50)	白黒斑/4 白黒斑/4 小片	白黒斑/4 白黒斑/4 小片
273	淡水土苔	優	三	SDD07	ヨコナデ、ハサク、ヨコナデ、内筋3本寄り筋文、外筋文	(3.40) 1脚筋1/2 小片	(3.40) 1脚筋1/2 小片	(3.40) (3.40)	(3.40) (3.40)	(3.40) (3.40)	白黒斑/4 白黒斑/4 小片	白黒斑/4 白黒斑/4 小片
274	淡水土苔	優	三	SDD07	ヨコナデ、ハサク、ヨコナデ、内筋3本寄り筋文、外筋文	(5.10) 1脚筋1/2 小片	(5.10) 1脚筋1/2 小片	(5.10) (5.10)	(5.10) (5.10)	(5.10) (5.10)	白黒斑/4 白黒斑/4 小片	白黒斑/4 白黒斑/4 小片
275	淡水土苔	優	三	SDD07	ヨコナデ、ハサク、ヨコナデ、内筋3本寄り筋文、外筋文	(3.70) 1脚筋1/2 小片	(3.70) 1脚筋1/2 小片	(3.70) (3.70)	(3.70) (3.70)	(3.70) (3.70)	白黒斑/4 白黒斑/4 小片	白黒斑/4 白黒斑/4 小片
276	淡水土苔	優	三	SDD07	ヨコナデ、ハサク、ヨコナデ、内筋3本寄り筋文、外筋文	(5.80) 1脚筋1/2 小片	(5.80) 1脚筋1/2 小片	(5.80) (5.80)	(5.80) (5.80)	(5.80) (5.80)	白黒斑/4 白黒斑/4 小片	白黒斑/4 白黒斑/4 小片
277	淡水土苔	優	三	SDD07	ヨコナデ、ハサク、ヨコナデ、内筋3本寄り筋文、外筋文	(8.60) 1脚筋1/2 小片	(8.60) 1脚筋1/2 小片	(8.60) (8.60)	(8.60) (8.60)	(8.60) (8.60)	白黒斑/4 白黒斑/4 小片	白黒斑/4 白黒斑/4 小片
278	淡水土苔	優	三	SDD07	ヨコナデ、ハサク、ヨコナデ、内筋3本寄り筋文、外筋文	(10.40) 1脚筋1/2 小片	(10.40) 1脚筋1/2 小片	(10.40) (10.40)	(10.40) (10.40)	(10.40) (10.40)	白黒斑/4 白黒斑/4 小片	白黒斑/4 白黒斑/4 小片
279	淡水土苔	優	三	SDD07	ヨコナデ、ハサク、ヨコナデ、内筋3本寄り筋文、外筋文	(12.20) 1脚筋1/2 小片	(12.20) 1脚筋1/2 小片	(12.20) (12.20)	(12.20) (12.20)	(12.20) (12.20)	白黒斑/4 白黒斑/4 小片	白黒斑/4 白黒斑/4 小片
280	淡水土苔	優	三	SDD07	ヨコナデ、ハサク、ヨコナデ、内筋3本寄り筋文、外筋文	(14.00) 1脚筋1/2 小片	(14.00) 1脚筋1/2 小片	(14.00) (14.00)	(14.00) (14.00)	(14.00) (14.00)	白黒斑/4 白黒斑/4 小片	白黒斑/4 白黒斑/4 小片

番号	種別	8種	地区	通稱	接頭 他	形態的特徴		口径	基面	疾群	備考
						内側する 内側から外側する	内側し 内側から強張る				
281	糸生土器	壺	■	直脚上、落ち込み 直脚上、落ち込み	ナガデ、外腹にギギ？ 2角 ナガデ、外腹にギギ？ 2角	内側する	内側する	(8.70)	小介		
282	糸生土器	無颈造	■	直脚上、落ち込み 直脚上、落ち込み	ナガデ型からナヂ、2角 ナガデ型からナヂ、2角	内側し 内側から強張る	内側し 内側から強張る	(13.45) (6.10)	上端幅1/8 上端幅1/10		
283	糸生土器	無颈造	■	直脚上、落ち込み 直脚上、落ち込み	ナガデ型からナヂ、2角 ナガデ型からナヂ、2角	内側する	内側する	(16.80) (3.60)	上端幅1/8 上端幅1/8		
284	糸生土器	無颈造	■	直脚上、落ち込み 直脚上、落ち込み	ナガデ型からナヂ、2角 ナガデ型からナヂ、2角	内側する	内側し 内側から強張る	(15.00) (5.65)	上端幅1/10 上端幅1/10		
285	糸生土器	壺	■	直脚上、落ち込み 直脚上、落ち込み	ナガデ型からナヂ、2角 ナガデ型からナヂ、2角	内側から外側する	内側から外側する	(12.60) (7.65)	底部元 上部元		
286	糸生土器	壺	■	直脚上、落ち込み 直脚上、落ち込み	ナガデ型からナヂ ナガデ型からナヂ	内側する	内側する	(15.00) (9.90)	上部元 上部元		
287	糸生土器	壺	■	直脚上、落ち込み 直脚上、落ち込み	ナガデ型からナヂ ナガデ型からナヂ	内側し 内側から外側する	内側し 内側から外側する	(25.20) (5.20)	上部元 上部元		
288	糸生土器	壺	■	直脚上、落ち込み 直脚上、落ち込み	ナガデ型からナヂ ナガデ型からナヂ	内側する	内側する	(13.60) (5.30)	上部元 上部元		
289	糸生土器	壺	■	直脚上、落ち込み 直脚上、落ち込み	ナガデ型からナヂ ナガデ型からナヂ	内側する	内側する	(15.90) (4.10)	上端幅1/8 上端幅1/10		
290	糸生土器	壺	■	直脚上、落ち込み 直脚上、落ち込み	ナガデ型からナヂ ナガデ型からナヂ	内側する	内側する	(16.75) (4.10)	上端幅1/8 上端幅1/10		
291	糸生土器	壺	■	直脚上、落ち込み 直脚上、落ち込み	ナガデ型からナヂ ナガデ型からナヂ	内側する	内側する	(12.20) (5.40)	上端幅1/8 上端幅1/8		
292	糸生土器	壺	■	直脚上、落ち込み 直脚上、落ち込み	ナガデ型からナヂ ナガデ型からナヂ	内側する	内側する	(4.90)	小介		
293	糸生土器	壺	■	直脚上、落ち込み 直脚上、落ち込み	ナガデ型からナヂ ナガデ型からナヂ	内側する	内側する	(18.75) (5.70)	上端幅1/8 上端幅1/8		
294	糸生土器	壺	■	直脚上、落ち込み 直脚上、落ち込み	ナガデ型からナヂ ナガデ型からナヂ	内側する	内側する	(19.00) (1.85)	小介		
295	糸生土器	壺	■	直脚上、落ち込み 直脚上、落ち込み	ナガデ型からナヂ ナガデ型からナヂ	内側する	内側する	(5.15) (5.60)	底部元 底部元		
296	糸生土器	壺	■	直脚上、落ち込み 直脚上、落ち込み	ナガデ型からナヂ ナガデ型からナヂ	内側する	内側する	(3.70) (5.45)	底部元 底部元		
297	糸生土器	壺	■	直脚上、落ち込み 直脚上、落ち込み	ナガデ型からナヂ ナガデ型からナヂ	内側する	内側する	(3.30) (5.20)	底部元 底部元		
298	糸生土器	壺	■	直脚上、落ち込み 直脚上、落ち込み	ナガデ型からナヂ ナガデ型からナヂ	内側する	内側する	(3.20) (6.60)	底部元 底部元		
299	糸生土器	壺	■	直脚上、落ち込み 直脚上、落ち込み	ナガデ型からナヂ ナガデ型からナヂ	内側する	内側する	(6.60) (3.95)	底部元 底部元		
300	糸生土器	壺	■	直脚上、落ち込み 直脚上、落ち込み	ナガデ型からナヂ ナガデ型からナヂ	内側する	内側する	(7.45) (8.20)	底部元 底部元		
301	糸生土器	壺	■	直脚上、落ち込み 直脚上、落ち込み	ナガデ型からナヂ ナガデ型からナヂ	内側する	内側する	(2.65) (18.35)	底部元 底部元		
302	糸生土器	脚台	■	直脚上、落ち込み 直脚上、落ち込み	ナガデ型からナヂ ナガデ型からナヂ	内側する	内側する	(5.40) (14.30)	底部元 底部元		
303	糸生土器	脚台	■	直脚上、落ち込み 直脚上、落ち込み	ナガデ型からナヂ ナガデ型からナヂ	内側する	内側する	(27.20) (3.60)	上端幅1/9 上端幅1/9		
304	糸生土器	高杯	■	直脚上、落ち込み 直脚上、落ち込み	ナガデ型からナヂ ナガデ型からナヂ	内側する	内側する	(28.00) (4.40)	上端幅1/2 上端幅1/2		
305	糸生土器	高杯	■	直脚上、落ち込み 直脚上、落ち込み	ナガデ型からナヂ ナガデ型からナヂ	内側する	内側する	(21.80) (4.30)	上端幅1/10 上端幅1/10		
306	糸生土器	高杯	■	直脚上、落ち込み 直脚上、落ち込み	ナガデ型からナヂ ナガデ型からナヂ	内側する	内側する	(4.35) (10.25)	底部元 底部元		
307	糸生土器	高杯	■	直脚上、落ち込み 直脚上、落ち込み	ナガデ型からナヂ ナガデ型からナヂ	内側する	内側する	(2.40) (10.00)	底部元 底部元		
308	糸生土器	高杯	■	直脚上、落ち込み 直脚上、落ち込み	ナガデ型からナヂ ナガデ型からナヂ	内側する	内側する	(4.75) (15.40)	底部元 底部元		
309	糸生土器	高杯	■	直脚上、落ち込み 直脚上、落ち込み	ナガデ型からナヂ ナガデ型からナヂ	内側する	内側する	(4.20) (12.85)	底部元 底部元		
310	糸生土器	高杯	■	直脚上、落ち込み 直脚上、落ち込み	ナガデ型からナヂ ナガデ型からナヂ	内側する	内側する	(5.30)	小介		
311	糸生土器	壺	■	直脚上、落ち込み 直脚上、落ち込み	ナガデ型からナヂ ナガデ型からナヂ	内側する	内側する	(15.80) (2.40)	上端幅1/6 上端幅1/6		
312	糸生土器	壺	■	直脚上、落ち込み 直脚上、落ち込み	ナガデ型からナヂ ナガデ型からナヂ	内側する	内側する	(23.10) (1.80)	上端幅1/7 上端幅1/7		
313	糸生土器	壺	■	直脚上、落ち込み 直脚上、落ち込み	ナガデ型からナヂ ナガデ型からナヂ	内側する	内側する	(16.40) (2.80)	上端幅1/6 上端幅1/6		
314	糸生土器	壺	■	直脚上、落ち込み 直脚上、落ち込み	ナガデ型からナヂ ナガデ型からナヂ	内側する	内側する	(11.60) (5.80)	上端幅1/6 上端幅1/6		

番号	場所	路線	通過	桂川 他		形態の特徴	口径	基面	横斜	備考
				左岸	右岸					
316	糸生上島	要	三	北・北流路	ナデ、久留良川文、3条支節、船岡洋文	外壁とする1層階で端面外張る	(13.15)	(3.30)	1.1倍強1/4	
317	糸生上島	要	三	北・北流路	ナデ、ナデ、ヨコナデ	外壁とする1層階で端面外張る	(22.40)	(2.30)	1.1倍強1/6	
318	糸生上島	高村	三	北・北流路	ナデ	外壁に端面外張る	(2.40)	(9.20)	1.1倍強1/8	
319	糸生上島	高村	三	北・北流路	ナデ	外壁に端面外張る	(5.40)	(7.70)	1.1倍強1/6	
320	糸生上島	要	三	北・北流路	ナデ	外壁から引張る	(7.00)	(1.00)	小片	
321	糸生上島	林	三	北・北流路	ナデ、2条付田、2側付田、外曲ダム	端面に内蔵し端面外張る	(6.45)	(5.15)	小片	
322	糸生上島	林	三	北・北流路	ナデ、ナデ、ヨコナデ	内蔵する	(5.40)	(5.40)	小片	
323	糸生上島	佐	三	北・北流路	ナデ、3条支節	外壁する	(7.95)	(7.95)	1.1倍強1/6	
324	糸生上島	佐	三	北・北流路	ナデ、3条支節	内蔵する	(3.80)	(1.80)	小片	
325	糸生上島	佐	三	北・北流路	ナデ、所沢文、引御原文、渡御文	内蔵する	(3.70)	(3.10)	小片	
326	糸生上島	佐	三	北・北流路	ナデ、利光文、渡御文	内蔵する	(6.70)	(6.70)	小片	
327	糸生上島	要	三	北・北流路	ナデ、利光文	内蔵する	(10.30)	(10.30)	1.1倍強1/5	
328	糸生上島	林	三	面積査	ナデ、3条の目とく矣文	直角ぎみで端面外張りぎみ	(10.30)	(16.50)	1.1倍強1/2	
329	糸生上島	佐	1	面積査	ナデ、3条の目とく矣文 2条	内蔵する	(13.20)	(4.90)	1.1倍強1/4	
330	糸生上島	佐	1	SHR) 鹿尾	ナデ、ナデ、沈殿槽	端面に内蔵する	(13.80)	(2.90)	1.1倍強1/8	
331	糸生上島	佐	1	包含層	ナデ、2条の目とく矣文、直根文	内蔵する	(14.00)	(2.40)	1.1倍強1/8	
332	糸生上島	佐	1	面積査	ナデ、7条支節	内蔵する	(14.40)	(2.70)	小片	
333	糸生上島	佐	1	面積査	ナビ改形からナナフ、3条支節	端面から端面は外しし内蔵するのみになる	(15.30)	(1.90)	1.1倍強1/10	
334	糸生上島	佐	1	包含層	ユビ改形からナナフ、外曲ダムからナナフ	平らから端面がみで外傾	(10.30)	(16.50)	1.1倍強1/2	
335	糸生上島	佐	1	面積査	ナデ、ナデ、ヨコナデ、上曲付水槽、浮文	外壁し端面あく細直しをもつ、直根文	(13.20)	(4.90)	1.1倍強1/4	
336	糸生上島	佐	1	面積査	ヨコナデ、船ふき日	外壁し端面あく細直し	(13.80)	(2.90)	1.1倍強1/8	
337	糸生上島	佐	1	面積査	ヨコナデ、引影洋文	外壁し端面あく細直す	(14.00)	(1.90)	1.1倍強1/8	
338	糸生上島	佐	1	面積査	ヨコナデ、湖面に移状の品目、矢巣1条	内蔵し端面下しする、上部に矢巣	(15.30)	(1.90)	1.1倍強1/12	
339	糸生上島	佐	1	包含層	ナデ、ヨコナデ、3条支節、利光文	水面上に開口上下に逆凹	(17.40)	(1.90)	1.1倍強1/12	
340	糸生上島	佐	1	面積査	ナデ、ヨコナデ、利光文	内蔵し端面外張	(15.60)	(1.75)	1.1倍強1/12	
341	糸生上島	佐	1	面積査	ヨコナデ、引影洋文	内蔵する	(16.85)	(1.85)	1.1倍強1/8	
342	糸生上島	佐	1	包含層	ヨコナデ、ナデ、3条支節	外壁し端面あく細直	(18.80)	(1.35)	1.1倍強1/7	
343	糸生上島	佐	1	面積査	ヨコナデ、2条付田、2側付田、利光文	内蔵する	(22.60)	(2.30)	1.1倍強1/16	
344	糸生上島	佐	1	黒磯シート	ヨコナデ、4条付田、利光文	外壁し端面あく細直	(18.80)	(2.25)	1.1倍強1/8	
345	糸生上島	佐	1	包含層	ヨコナデ、2条支節、利光文、引影洋文	端面の端面下し	(24.00)	(2.60)	1.1倍強1/12	
346	糸生上島	佐	1	包含層	ハケ整形、ヨコナデ、5条支節に利光文、巴根	外壁し端面凹、空丸	(26.70)	(1.70)	1.1倍強1/6	
347	糸生上島	佐	1	面積査	ヨコナデ、利光文	外壁し端面凹、空丸	(21.90)	(1.30)	小片	
348	糸生上島	佐	1	面積査	ヨコナデ、利光文	外壁し端面凹する	(21.60)	(1.30)	1.1倍強1/12	
349	糸生上島	佐	1	面積査	ヨコナデ、引影洋文	外壁し端面凹する	(28.95)	(1.90)	1.1倍強1/12	

番号	種別	品種	地区	通称	採法	他	形態の概要		口径	基面	疾群	備考
							面削全	側削				
351	糸生土器	巻	1	面削全	ハケ整形、ヨコナギ、指圧顔付きき変形		外径し薄削所につまみあがる		(16.70)	(7.80)	上部削り/10	
352	糸生土器	巻	Ⅲ	側削	ナデ、ヨコナギ				(14.35)	(4.30)	上部削り/12	
353	糸生土器	巻	Ⅲ	側削	ヨコナギ、2条尖削、棒状土器				(2.30)		小片	
354	糸生土器	巻	Ⅲ	側削	ハケ、ナデ、ヨコナギ、2条凹削		外径し薄削所弱まる		(3.35)		小片	
355	糸生土器	巻	Ⅲ	側削	黒陶シント		外径し薄削所強くで立ち上がり		(2.30)		小片	
356	糸生土器	巻	Ⅲ	側削	ヨコナギ、2条凹削		外径し薄削所強まる		(7.80)	(3.60)	上部削り/6	
357	糸生土器	巻	Ⅲ	側削	ヨコナギ、削み目		外径し薄削所強まる		(8.95)	(3.35)	上部削り/7	
358	糸生土器	巻	Ⅲ	側削	ナデ、ミキ		不規定な小さな半から外れる		(2.75)	3.25	底部削り	
359	糸生土器	巻	Ⅲ	側削	ハケ、ナギ、工具痕		半から外れる		(3.30)	(4.75)	底部削り/8	
360	糸生土器	巻	Ⅲ	側削	ハケ、ナギ、ナガ		半から外れる		(4.25)	(5.90)	底部削り/3	
361	糸生土器	巻	Ⅲ	側削	ハケ、ナギ、ミキ		半から外れる		(5.75)	6.55	底部削り/4	
362	糸生土器	巻	Ⅲ	側削	ハケ整形、ナデ		半から外れる		(3.30)	(8.70)	底部削り/3	
363	糸生土器	巻	Ⅲ	SX01 摘瓦			半から外れる		(4.60)	(5.70)	底部削り/2	
364	糸生土器	巻	Ⅲ	側削	ハケ整形、外觀ミニキ		外径し薄削所強まる		(11.60)	(4.30)	上部削り/4	
365	糸生土器	巻	Ⅲ	側削	ナデ、ヨコナギ、底削文		外径し薄削所弱まる		(19.85)	(4.30)	上部削り/10	
366	糸生土器	巻	Ⅲ	側削	ヨコナギ、穴開4枚		内側し薄削地平		(14.70)	(4.30)	上部削り/8	
367	糸生土器	巻	Ⅲ	側削	ヨケ底形ナギ、直線文、圓形浮文		内側する		(5.20)		小片	
368	糸生土器	巻	Ⅲ	側削	ハケ整形、直線文、3条尖削、棒状土器		根柢に圓く外れる		(6.20)		小片	
369	糸生土器	巻	Ⅲ	側削	ナデ、ヨコナギ、指圧顔付、斜削子文		外側する		(4.75)		小片	
370	糸生土器	巻	Ⅲ	側削	ナデ、ヨコナギ、指圧顔付、斜削子文		外側し薄削所から立し直線上につむぐ		(34.40)	(9.20)		
371	糸生土器	巻	Ⅲ	側削	ナデ、ミキ、ヨコナギ、直線文		外側し薄削よくで立ち角張る		(16.50)	(9.00)	上部削り/6	
372	糸生土器	巻	Ⅲ	側削	ナデ、ヨコナギ、1条尖削		内側し薄削地平		(38.40)	(5.30)	小片	
373	糸生土器	巻	Ⅲ	側削	ヨコナギ、ナデ、2条尖削、輪み目		内側し薄削地平		(26.40)	(4.20)	上部削り/10	
374	糸生土器	巻	Ⅲ	側削	ヨコナギ、ナデ、6条凹削、波状文		内側し薄削地平		(24.00)	(4.30)	上部削り/16	
375	糸生土器	巻	Ⅲ	側削	ヨコナギ、削み目		内側し薄削地平		(23.80)	(2.35)		
376	糸生土器	巻	Ⅲ	側削	ヨコナギ、ナデ、2条尖削、輪み目		内側し薄削地平につむぐ		(18.25)	(4.40)	上部削り/12	
377	糸生土器	巻	Ⅲ	側削	黒陶シント		外側する		(5.30)		小片	
378	糸生土器	巻	Ⅲ	側削	ナデ、直線文の外側の尖削		内側する		(3.90)		小片	
379	糸生土器	巻	Ⅲ	側削	ナデ、ナギ、削れ、直線文		内側する		(7.60)		小片	
380	糸生土器	巻	Ⅲ	側削	ナデ、ヨコナギ、1条尖削		内側する		(4.10)		小片	
381	糸生土器	巻	Ⅲ	側削	ナデ、ヨコナギ、直線文、直線文		内側する		(6.70)		小片	
382	糸生土器	巻	Ⅲ	側削	ヨコナギ、6条尖削、直線文		内側に内折する		(6.10)		小片	
383	糸生土器	巻	Ⅲ	側削	ヨコナギ、3条尖削の波状文、直線文		内側する		(6.30)		小片	
384	糸生土器	巻	Ⅲ	側削	ナデ、竹管文		内側する		(3.20)		小片	
385	糸生土器	巻	Ⅲ	側削	ヨコナギ、ナデ、波状文		外側する		(4.30)		小片	

番号	種別	品種	地区	通情	接法	他	形態的特徴		口径	基面	法量(cm)	疾存	備考
							内側	外側					
366	系生土器	燒	Ⅲ	包含層	ナデ、底火文、底火文、円筒浮文		外側 内側する外側		(3.40)	小片			
387	系生土器	燒	Ⅲ	包含層	ナデ、円筒浮文		内側する外側		(4.30)	小片			
388	系生土器	燒	Ⅰ	圓筒壺	ナデ、底火文、底火文		内側する外側		(5.60)	小片			
389	系生土器	燒	Ⅰ	圓筒壺	ナデ、穴穿、輪状浮文、輪状浮文、底火文		内側する外側		(3.30)	小片			
390	系生土器	燒	Ⅲ	包含層	ナデ、穴穿、輪状浮文、底火文		内側する外側		(5.30)	小片			
391	系生土器	燒	Ⅲ	包含層	ナデ、輪型、底火文、底火文、直線文		内側する外側 外側する外側		(8.60)	小片			
392	系生土器	燒	Ⅰ	圓筒壺	ナデ、輪型、底火文、直線文		外側する外側 底火文、底火文、直線文		(5.60)	小片			
393	系生土器	燒	Ⅲ	黑褐色シート	ナデ		底火文、底火文、直線文		(2.70)	つぶみ空			
394	系生土器	燒	Ⅲ	圓筒壺	ナデ、ヨコナデ		底火文、底火文、直線文		(36.00)	直線文			
395	系生土器	燒	Ⅲ	包含層	ヨコナデ		内側する外側		(22.60)	(5.60)	直線文		
396	系生土器	燒	Ⅲ	圓筒壺	ナホ、ナホ、ヨコナデ		内側する外側		(22.40)	(6.20)	直線文		
397	系生土器	燒	Ⅲ	圓筒壺	ヨコナデ、刺突文		内側する外側		(14.90)	(6.80)	直線文		
398	系生土器	燒	Ⅲ	土壤化層	ハラケナデ、ナホ、ヨコナデ		外側する外側		(18.05)	(3.20)	直線文		
399	系生土器	燒	Ⅲ	包含層	ヨコナデ、内側面		内側する外側		(18.70)	(5.90)	直線文		
400	系生土器	燒	Ⅲ	包含層	ヨコナデ		内側する外側		(23.30)	(4.60)	直線文		
401	系生土器	燒	Ⅰ	圓筒壺	ヨコナデ、内側面		内側する外側		(14.15)	(5.50)	直線文		
402	系生土器	燒	Ⅲ	包含層	ヨコナデ		外側する外側		(15.90)	(2.85)	直線文		
403	系生土器	燒	Ⅲ	包含層	ナホ型からナホ、ヨコナデ、3葉西面		内側する外側から外側		(15.60)	(4.75)	直線文		
404	系生土器	燒	Ⅰ	圓筒壺	ナホ型からナホ、ヨコナデ		内側する外側から外側		(17.40)	(2.80)	直線文		
405	系生土器	燒	Ⅲ	包含層	ナホ、ヨコナデ、四瓣2重		内側する外側から外側		(15.20)	(2.90)	直線文		
406	系生土器	燒	Ⅲ	圓筒壺	ナホケナデ、ナホ、ナホ、ヨコナデ		内側する外側		(11.80)	(4.75)	直線文		
407	系生土器	燒	Ⅲ	包含層	ヨコナデ、ナホ		内側する外側から外側		(11.05)	(7.30)	直線文		
408	系生土器	燒	Ⅰ	圓筒壺	ヨコナデ		内側する外側		(6.10)	(5.05)	直線文		
409	系生土器	燒	Ⅲ	圓筒壺	ナホ、ヨコナ		平盤から外側する		(8.70)	底部	/2		
410	系生土器	燒	Ⅲ	包含層	ナホ、ナホ、ヨコナ		外側に突出した平盤から外側する		(8.60)	(8.35)	底部	/3	
411	系生土器	燒	Ⅲ	包含層	ナホ		平盤から外側		(8.75)	6.65	底部		
412	系生土器	燒	Ⅲ	圓筒壺	ナホ		平盤から外側		(4.15)	(5.10)	底部	/2	
413	系生土器	燒	Ⅲ	圓筒壺	ナホ		今上上げで中央に圓筒から穿孔		(2.20)	(5.90)	底部	/2	
414	系生土器	燒	Ⅲ	圓筒壺	ナホ		外側に小さな平底で穿孔		(6.10)	2.20	底部		
415	系生土器	高杯	Ⅲ	包含層	ナホ、ヨコナデ、底面穿孔		内側に穿孔		(30.40)	(4.80)	直線文		
416	系生土器	高杯	Ⅲ	圓筒壺	ナホ、ヨコナデ、刺突文		内側に穿孔		(32.50)	(3.60)	直線文		
417	系生土器	高杯	Ⅲ	包含層	ナホケナデ、刺突文		外側に穿孔		(5.60)	(14.70)	底部	/1.10	
418	系生土器	高杯	Ⅲ	土壤化層	ナホ、ヨコナデ、2重突起、キサギ、直線文		内側に穿孔		(3.80)	(9.00)	底部	/3	
419	系生土器	脚台	Ⅲ	圓筒壺	ナホ、ヨコナデ、ヨコナデ		底に突出する外側		(19.55)	(8.30)	周邊	/10	
420	土師器	羽茎	Ⅰ	圓筒壺	ユビ姿形からナホ		底に突出する外側						

市之郷遺跡における放射性炭素年代（AMS測定）

株式会社 加速器分析研究所

1 検定対象試料

市之郷遺跡は、兵庫県姫路市市之郷（北緯 $34^{\circ}49'36''$ 、東經 $134^{\circ}42'24''$ ）に所在する。検定対象試料は、土坑Ⅱ区SK05埋土から出土した炭化米（1：IAAA-83002）、Ⅱ区SK08埋土から出土した炭化米（2：IAAA-83003）、合計2点である。

2 検定の意義

遺構の時期を特定する。土坑からは時期の明らかな土器は出土しなかったが、周辺遺構では弥生時代前期末の遺物が出土した。

3 化学処理工程

- (1) メス・ピンセットを使い、根・土等の表面的な不純物を取り除く。
- (2) 酸処理、アルカリ処理、酸処理（AAA : Acid Alkali Acid）により内面的な不純物を取り除く。
最初の酸処理では1Nの塩酸（80°C）を用いて数時間処理する。その後、超純水で中性になるまで希釈する。アルカリ処理では1Nの水酸化ナトリウム水溶液（80°C）を用いて数時間処理する。なお、AAA処理において、アルカリ濃度が1N未満の場合、表中にAaAと記載する。その後、超純水で中性になるまで希釈する。最後の酸処理では1Nの塩酸（80°C）を用いて数時間処理した後、超純水で中性になるまで希釈し、90°Cで乾燥する。希釈の際には、遠心分離機を使用する。
- (3) 試料を酸化銅と共に石英管に詰め、真空中で封じ切り、500°Cで30分、850°Cで2時間加熱する。
- (4) 液体窒素とエタノール・ドライアイスの温度差を利用して、真空ラインで二酸化炭素（CO₂）を精製する。
- (5) 精製した二酸化炭素から鉄を触媒として炭素のみを抽出（水素で還元）し、グラファイトを作製する。
- (6) グラファイトを内径1mmのカソードに詰め、それをホイールにはめ込み、加速器に装着する。

4 検定方法

測定機器は、3MVタンデム加速器をベースとした¹⁴C-AMS専用装置（NEC Pelletron 9SDH-2）を使用する。測定では、米国国立標準局（NIST）から提供されたシュウ酸（HOx II）を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

5 算出方法

- (1) 年代値の算出には、Libbyの半減期（5568年）を使用する（Stuiver and Polash 1977）。
- (2) ¹⁴C年代（Libby Age : yrBP）は、過去の大気中¹⁴C濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年（0 yrBP）として測る年代である。この値は、 $\delta^{14}\text{C}$ によって補正された値である。¹⁴C年代と誤差は、1桁目を四捨五入して10年単位で表示される。また、¹⁴C年代の誤差（ $\pm 1\sigma$ ）は、試料の¹⁴C年代がその誤差範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。

- (3) $\delta^{13}\text{C}$ は、試料炭素の ^{13}C 濃度 ($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$) を測定し、基準試料からのずれを示した値である。同位体比は、いずれも基準値からのずれを千分偏差(%)で表される。測定には質量分析計あるいは加速器を用いる。加速器により $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ を測定した場合には表中に(AMS)と注記する。
- (4) pMC (percent Modern Carbon) は、標準現代炭素に対する試料炭素の ^{13}C 濃度の割合である。
- (5) 历年較正年代とは、年代が既知の試料の ^{13}C 濃度を元に描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の ^{13}C 濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。历年較正年代は、 ^{13}C 年代に対応する較正曲線上の历年年代範囲であり、1標準偏差 ($1\sigma = 68.2\%$) あるいは2標準偏差 ($2\sigma = 95.4\%$) で表示される。历年較正プログラムに入力される値は、下限を四捨五入しない ^{13}C 年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、历年較正年代の計算に、IntCal04データベース (Reimer et al 2004) を用い、OxCalv4.0較正プログラム (Bronk Ramsey 1995 Bronk Ramsey 2001 Bronk Ramsey, van der Plicht and Weninger 2001) を使用した。

6 測定結果

^{13}C 年代は、II区SK05出土の炭化米が 2330 ± 30 yrBP、II区SK08出土の炭化米が 2170 ± 30 yrBPである。弥生時代前期から中期の年代となっている。炭素含有率は60%以上であり、処理・測定上の問題は認められない。

表3 試料一覧

測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	$\delta^{13}\text{C}(\text{‰})$ (AMS)	$\delta^{13}\text{C}$ 補正あり	
						Libby Age (yrBP)	pMC (%)
IAAA-83002	1	遺構：土坑(II区SK05) 層位：土坑埋土	炭化米	AaA	-27.58 ± 0.48	$2,330 \pm 30$	74.85 ± 0.28
IAAA-83003	2	遺構：土坑(II区SK08) 層位：土坑埋土	炭化米	AaA	-24.07 ± 0.40	$2,170 \pm 30$	76.31 ± 0.29

[#2790]

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ 補正なし		历年較正用 (yrBP)	1 σ 历年年代範囲	2 σ 历年年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
IAAA-83002	$2,370 \pm 30$	74.45 ± 0.27	$2,327 \pm 30$	406BC-383BC (66.2%) 507BC-439BC (6.0%) 420BC-358BC (86.9%) 278BC-258BC (2.5%)	
IAAA-83003	$2,160 \pm 30$	76.46 ± 0.28	$2,171 \pm 30$	352BC-296BC (41.0%) 228BC-221BC (3.9%) 211BC-176BC (23.3%)	363BC-157BC (92.9%) 135BC-116BC (2.5%)

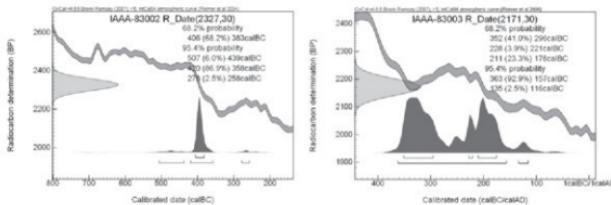
[参考値]

参考文献

- Stuiver M. and Polash H.A. 1977 Discussion : Reporting of ^{14}C data, *Radiocarbon* 19, 355-363
 Bronk Ramsey C. 1995 Radiocarbon calibration and analysis of stratigraphy : the OxCal Program, *Radiocarbon* 37(2), 425-430

- Bronk Ramsey C. 2001 Development of the Radiocarbon Program OxCal, *Radiocarbon* 43(2 A), 355–363
 Bronk Ramsey C., van der Plicht J. and Weninger B. 2001 'Wiggle Matching' radiocarbon dates, *Radiocarbon* 43 (2 A), 381–389
 Reimer, P.J. et al. 2004 IntCal04 terrestrial radiocarbon age calibration, 0–26cal kyr BP, *Radiocarbon* 46, 1029–1058

図13 历年較正年代グラフ



VI おわりに

本報告の大日線に伴う発掘調査は平成18年度の2006年12月から翌2月まで実施した。調査地点東側には市之郷庵寺が存在しており、周辺一帯が市之郷遺跡として理解されていた。市之郷庵寺の土壇が明治33年の地形図に残されている。塔心礎をはじめとする礎石も残っていたが、鉄道用地に編入される際に塔心礎は北側薬師堂に移されたと伝えられ、現在も存在する。市之郷庵寺周辺を姫路市では仮称姫路駅周辺遺跡第3地点として登録されている。遺跡の範囲がほとんど鉄道用地・関連施設となっており、大規模な調査は最近まで行われていなかった。鉄道高架工事を主とする姫路駅周辺一帯の区画整理・再開発が計画されることによって、市之郷遺跡の調査が行われるようになった。広範な鉄道ヤードが活用されることになり、今後とも遺跡の調査が実施されるものと思われる。

新幹線建設時は調査が行われなかつたが、姫路駅を高架とし道路との立体交差事業に伴う発掘調査が平成7・8年度に実施された。その結果、弥生時代前期から室町時代の長期にわたる複合遺跡であることが判明した。弥生時代前半の遺跡は小規模で、中期後半に盛んする。後期から古墳時代前期には遺跡の消長があり規模を縮小するが、古墳時代中期から勢いを増し、市之郷庵寺へと繋がるものと思われる。韓式土器の保有量・率も県下最大である。堅穴住居跡でのカマドの発生も確認される代表となる集落である。

兵庫県教育委員会では、その後大きな調査は行われなかつたが、平成18年度以降に継続して大規模調査が行われることになった。今回の大日線に伴う調査はその端緒であるが、その間に姫路市教育委員会による調査が行われている。播但線高架後の区画整理事業によって複数の地点で発掘調査が実施されている。特に今回調査した1区南東部の姫路市すこやかセンター・福祉センター建設に先立つ調査で市之郷庵寺に関連する遺構遺物が検出されている。今回調査のⅡ・Ⅲ区西側の商業施設に伴う調査では遺跡は確認されなかつた。兵庫県教育委員会では19年度から日出住宅・姫路警察署・ものづくり大学に伴う調査が連続し、多くの成果を得ている。本報告以降連続して報告書も刊行が予定されている。調査面積も広く、多くの遺構が検出されており、今後注目される。

今回の調査は、再開された兵庫県教育委員会が担当する市之郷遺跡の最初の調査である。調査面積はⅠ区160m²、Ⅱ区190m²、Ⅲ区220m²と拡幅部分だけの小面積の調査であった。3地区合わせても670m²と広いとは言えない調査区である。その割には出土遺構・遺物も多く、遺跡の中心地であることが判断できた。

I区は市之郷庵寺塔心礎が置かれている薬師堂に隣接した調査区で、市之郷庵寺の西限が確認されるのではと期待したが、この時期の遺構は確認されなかつた。検出した遺構は南北に集中している。堅穴住居跡1棟、土坑17基以上、溝2条と落ち込み・ピットを調査している。SK17・19は後世の遺構であり、SK16とSX03が弥生前期の遺構である。それ以外は中期後半の遺構で集中して存在している。SK16は1.65×1.35mの不定形の土坑で多量の前期土器が出土している。壺1点以外すべて壺であることが特徴である。深さは0.3mと深いわけではないが22個体以上の多量の壺が入れられていた。大形の壺も含まれる。施文は3条のものが多く、沈線は1条ずつ描いている。5条が最高で2組あるものは4条単位である。沈線と比較すると、突縁の方が条数が多い。口縁内面に突縁で波状の文様を貼付しているものや、同じく内面に溝状の文様を施している壺もあり、装飾性に富んでいる。体部下部に突縁をU字状

に貼り、波状文のように見せている例もある。ピットはある程度検出しているが掘立柱建物には復原できなかったが、存在の可能性はある。堅穴住居跡は隅円方形に近い円形住居で「1〇土坑」を有している。周壁溝があるが、0.1mと残存状態は悪い。径3.2mと通有より小形である。4本柱と思われ、出土土器は装飾性が高く古相を示すものもあるが、壺からは中期後半が妥当かと思われる。他の土坑も大枠は同じ時期である。I区南半までが、市之郷遺跡の中心部分であろうかと思われ、II・III区とは微高地が異なる可能性が高い。

II区は大日線西側に位置し、北側の調査区である。調査区内には多くの擾乱坑がみられ、調査区南側では裸層が隆起しており、遺構は確認されなかった。土坑と溝・落ち込み・ピットを検出している。土坑からは炭化米を持つ土坑やサヌカイトチップが多く出土している。性格が明らかな遺構はないが、遺跡周辺部から余り隔たらない地区であろう。比較的多くの土器が出土している。SX01は堅穴住居跡の可能性を残す落ち込みである。I区SH01と同じ時期である。土坑も多くの中期後半であるが、SK01とSK04だけが前期の土坑である。I区土坑と比べて壺と壺が同量出土していることと、沈縫が多条化している点が異なっている。

III区はII区南側の調査区で遺構の密度は薄くなる。調査区東側には北東から南西方向に流れる旧河道を検出しており、遺構は認められない。検出した遺構は溝・土坑・ピットである。SK01は弥生前期の土坑で壺・壺が出土している。大型壺も出土しており、沈縫は2条1対である。8条以上と多くなっている。溝・ピットも前期の土器も出土しているが、弥生中期と思われる。

3地区的調査から、今回の調査地区では弥生時代前期から中期にかけての集落で、後期まで継続しないことが判明した。また、III区で南北の旧河道を検出し、現在の大日線が流路の可能性が高く、東西調査区は別の微高地であることが確認された。後代の遺構も古代・中世の土坑を僅かに2基検出いただけ



図14 市之郷遺跡周辺空中写真

で、水田として利用されていた可能性が高い。道路前の水田耕土の下層にも耕土が確認されている。南側の市之郷遺跡では古墳時代から奈良時代にかけて盛行しているのとは大きく異なっている。弥生後期自体は位置を変えて小規模となっていることから、弥生時代では大きな差はないが、古墳時代以降は条件が違っているようである。市之郷廃寺の西限の推定もなされているが、全くそれを示唆するものは確認されておらず、東側であるとする説が妥当である。

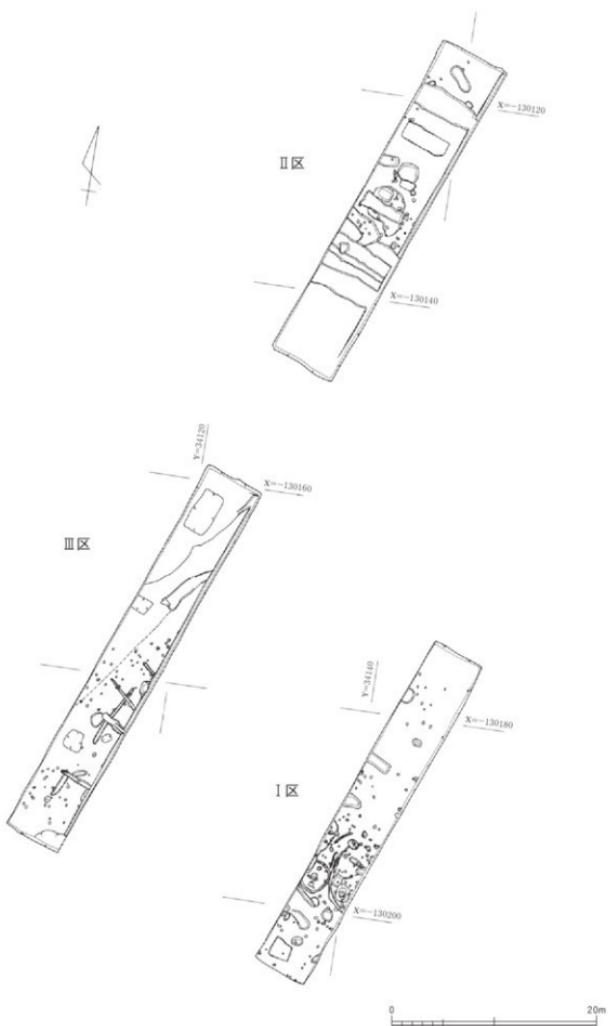
Ⅲ区南西部分の姫路警察署に伴う調査やⅠ区南東部の兵庫県ものづくり大学に伴う調査で多くの成果を挙げている。今回の調査は小面積であったにも限らず、弥生時代の市之郷遺跡の大きさを改めて認識させる結果となった。JR高架部分から今回調査区まで広い面積であることことが確認され、姫路平野の中心集落であることが再認された。古代の遺構は市之郷廃寺を北限とするのではないかと思われる。中世にかけて北側よりも南側の阿保遺跡の方に広がったようである。区画整理事業によっても複数地点が調査が行われており、詳細な変化が理解されるものと期待される。



図15 出土遺物

図

版

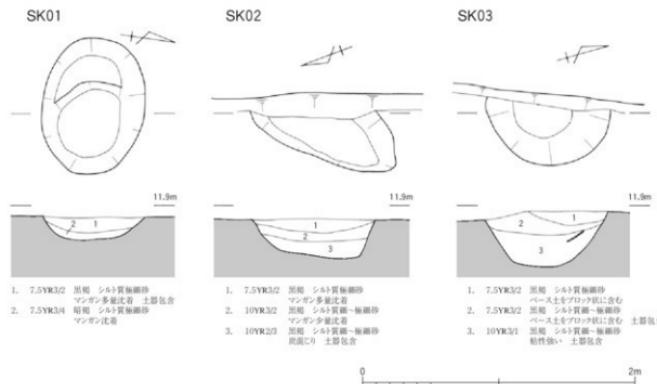
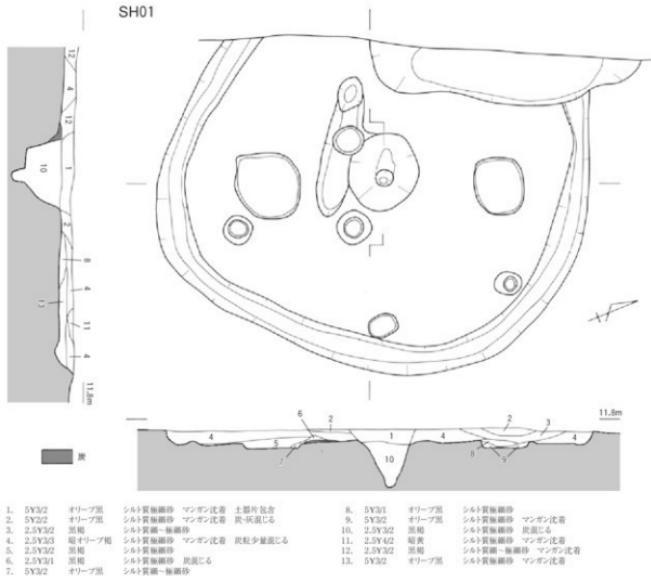


調査区全体図

図版2 I区遺構

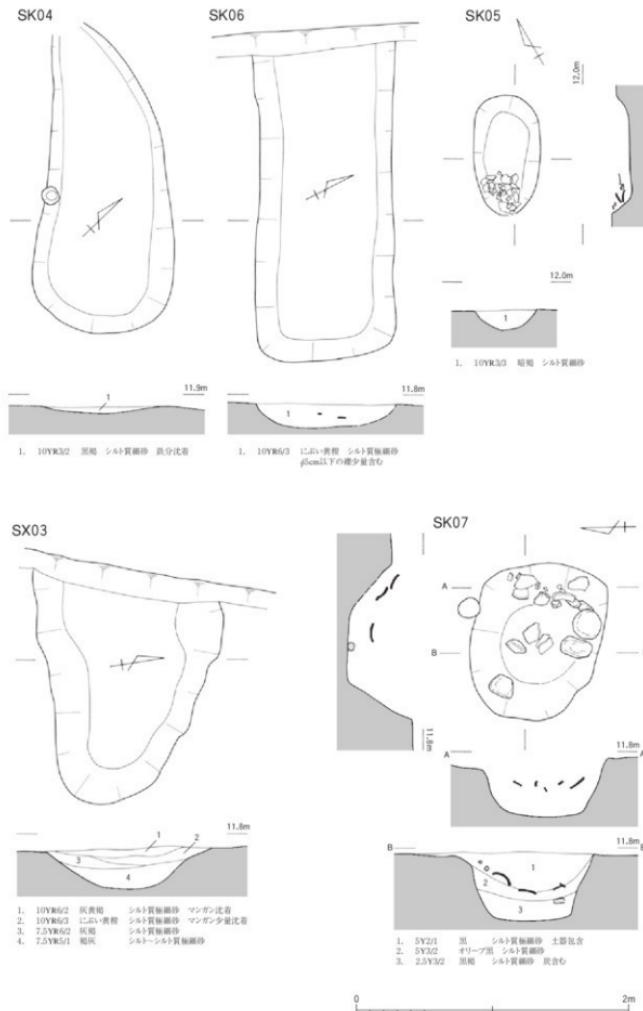


平・断面図

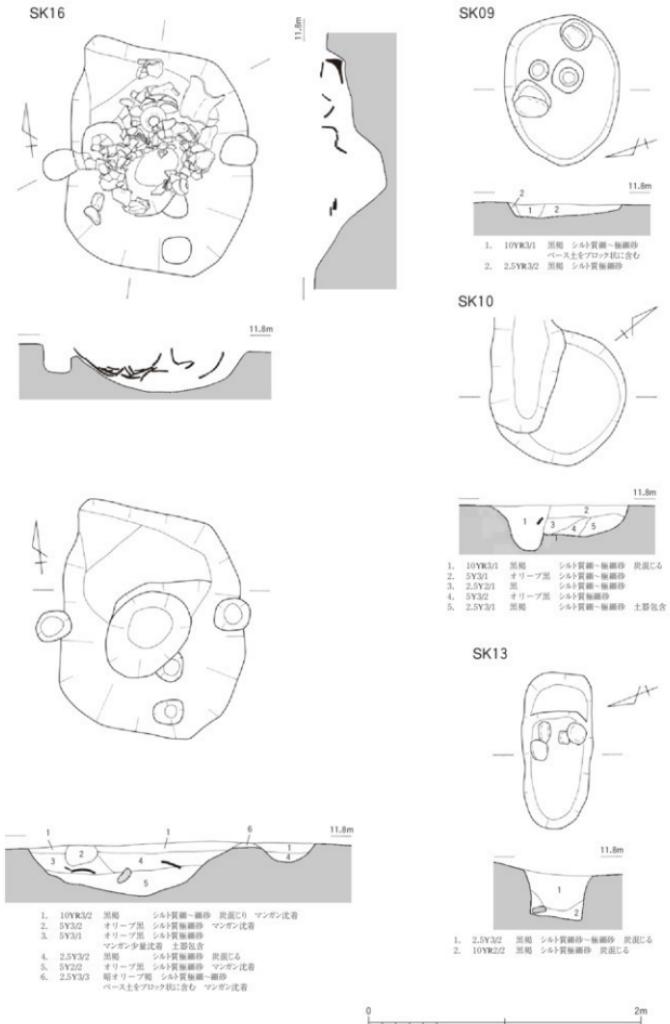


住居跡・土坑 (1)

図版4 I区遺構

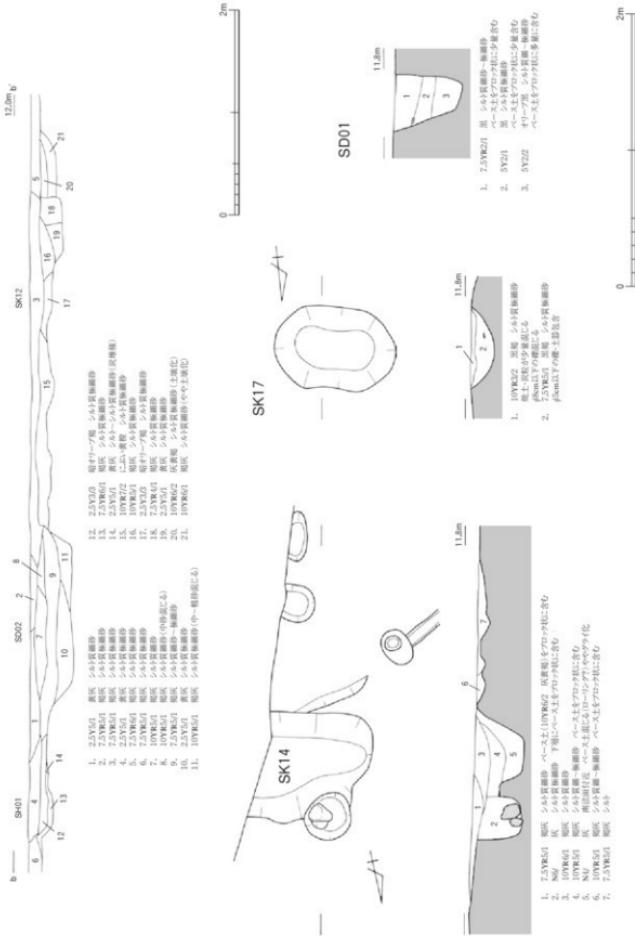


土坑 (2)

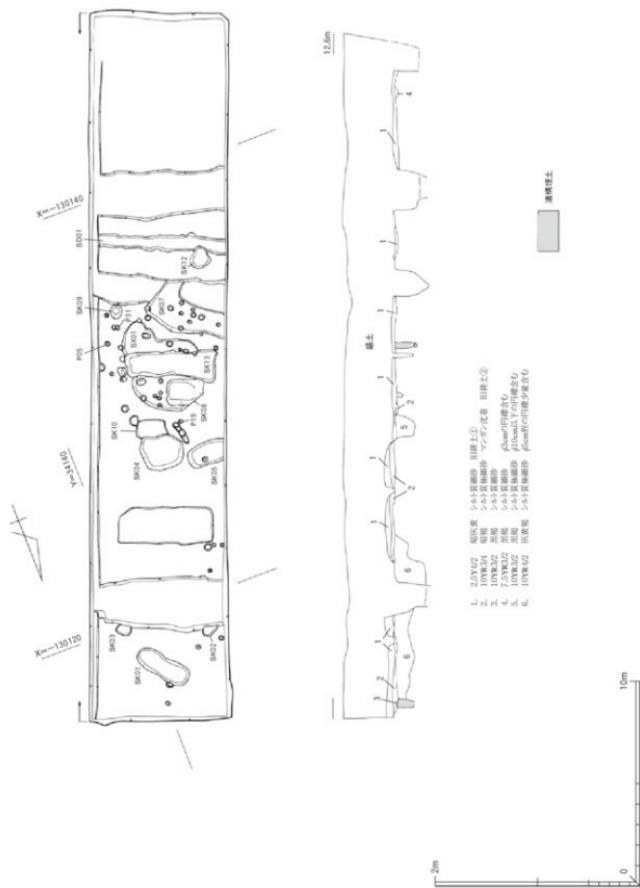


土坑 (3)

図版 6 I 区遺構

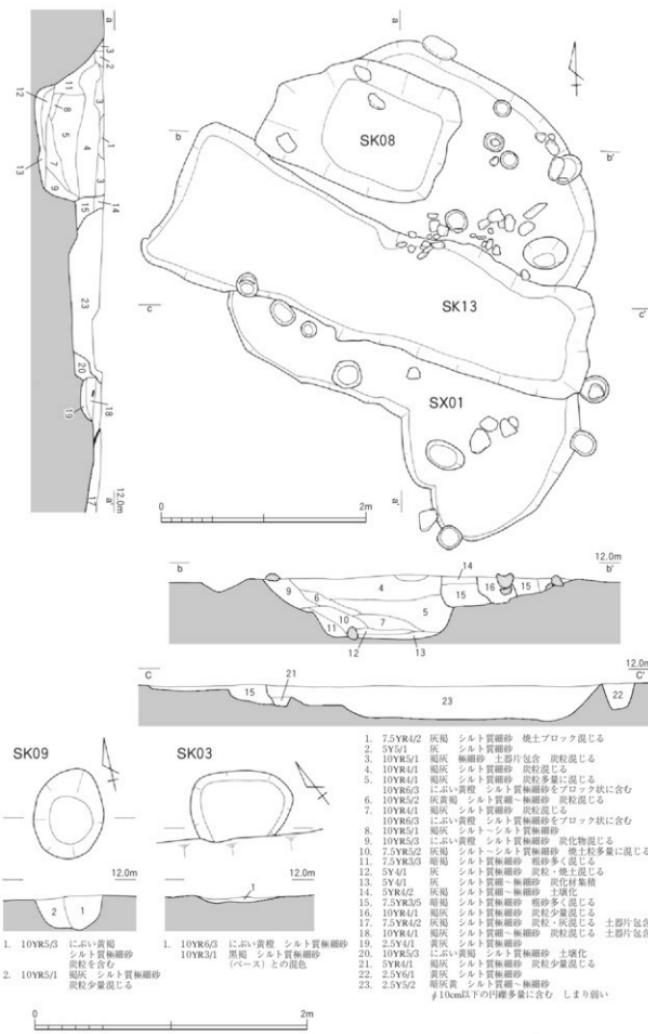


土坑 (4)

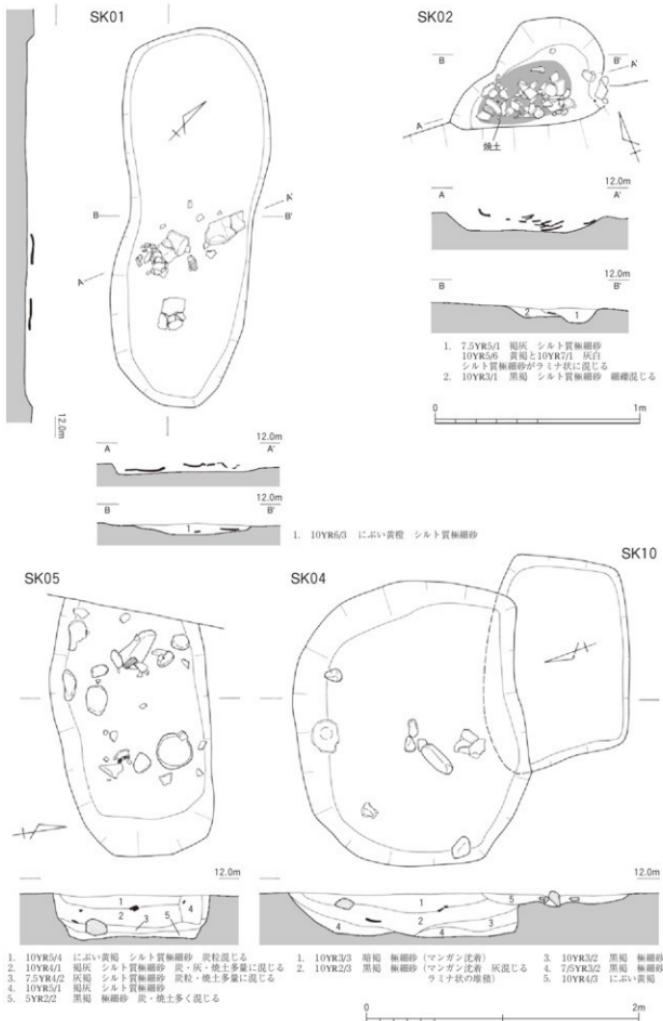


平・断面図

図版 8 II 区遺構

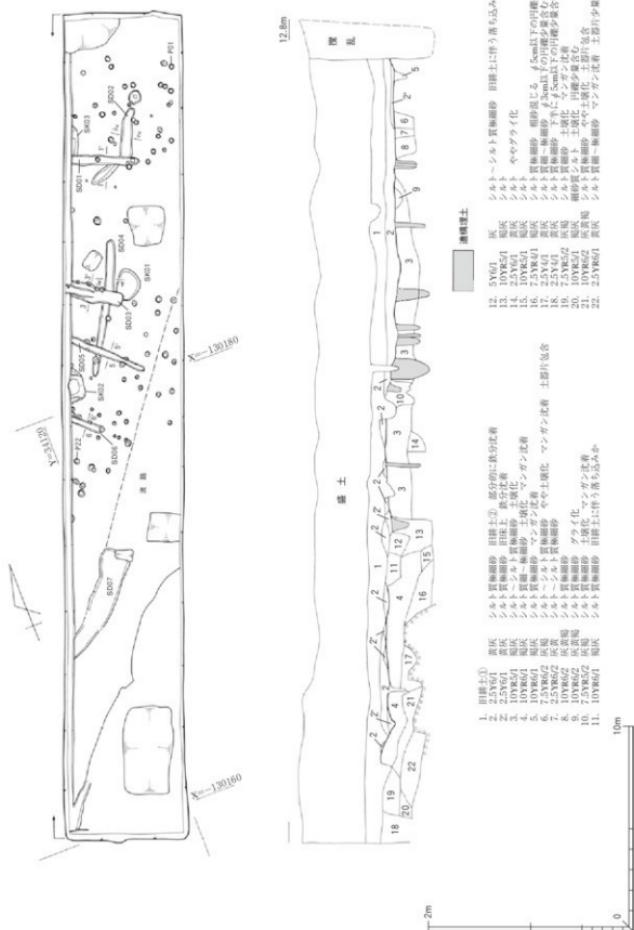


土坑 (1)

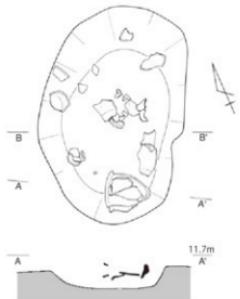


土坑 (2)

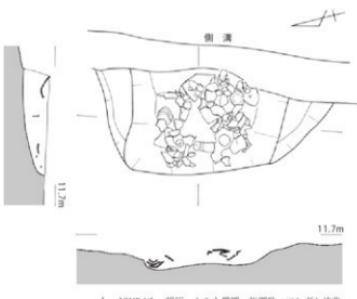
図版10 III区遺構



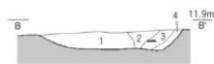
SK01



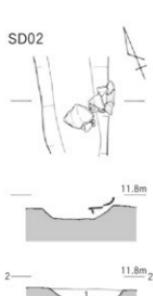
SK02



1. 10YR4/1 開底 シルト質粘土～細砂層 マンガニ沈着



SD02

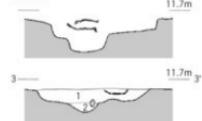


1. 10YR5/1 開底 シルト～シルト質粘土層

SD03



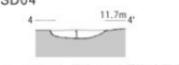
SD03

1. 5YR6/1 開底 シルト質粘土層 黒泥じる
2. 5YR5/1 開底 シルト～シルト質粘土層

SD01

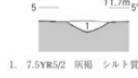


SD04



1. 7.5YR5/1 底面 シルト質粘土～細砂層

SD05



1. 7.5YR5/2 底面 シルト質粘土層

SD06

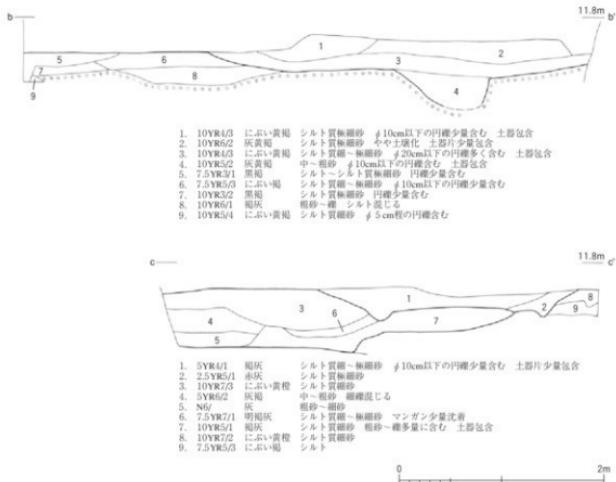
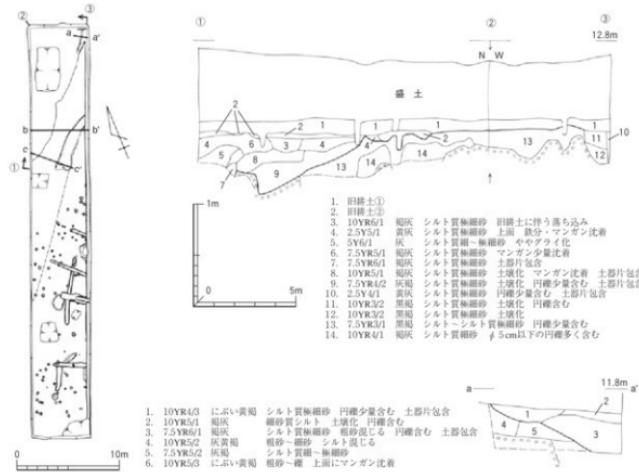


1. 7.5YR5/1 灰 シルト グライ化



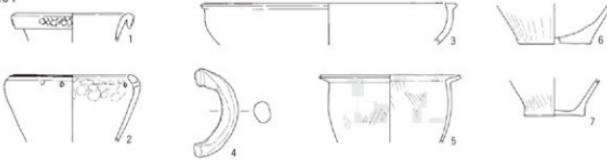
土坑・溝

図版12 III区遺構



流 路

SK01



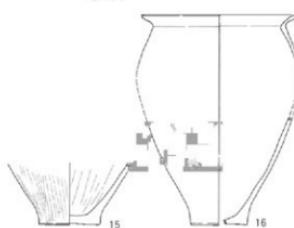
SK02



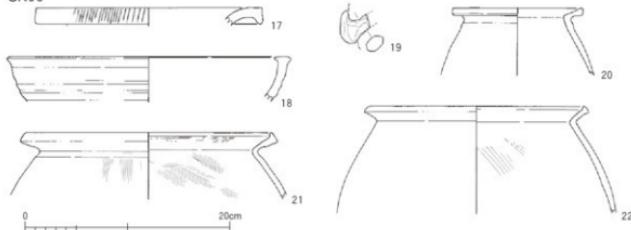
SK03



SK05

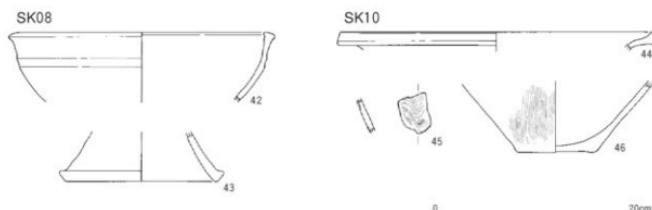
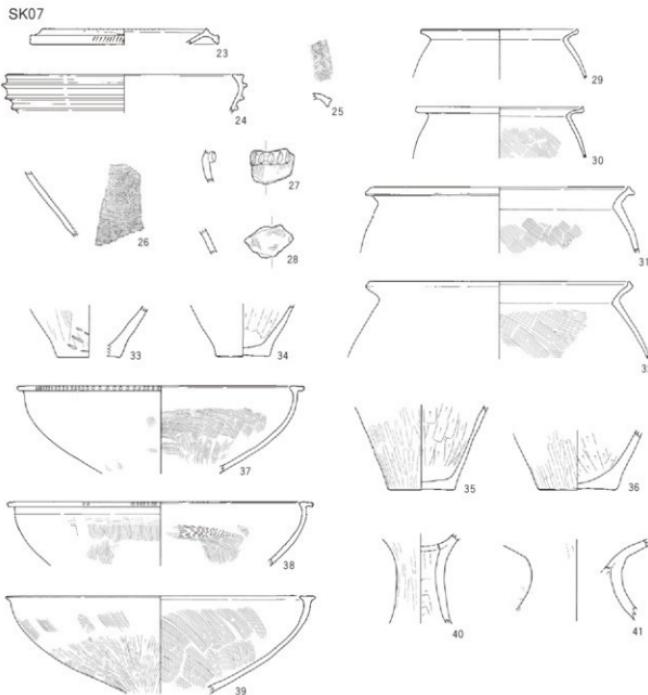


SK06



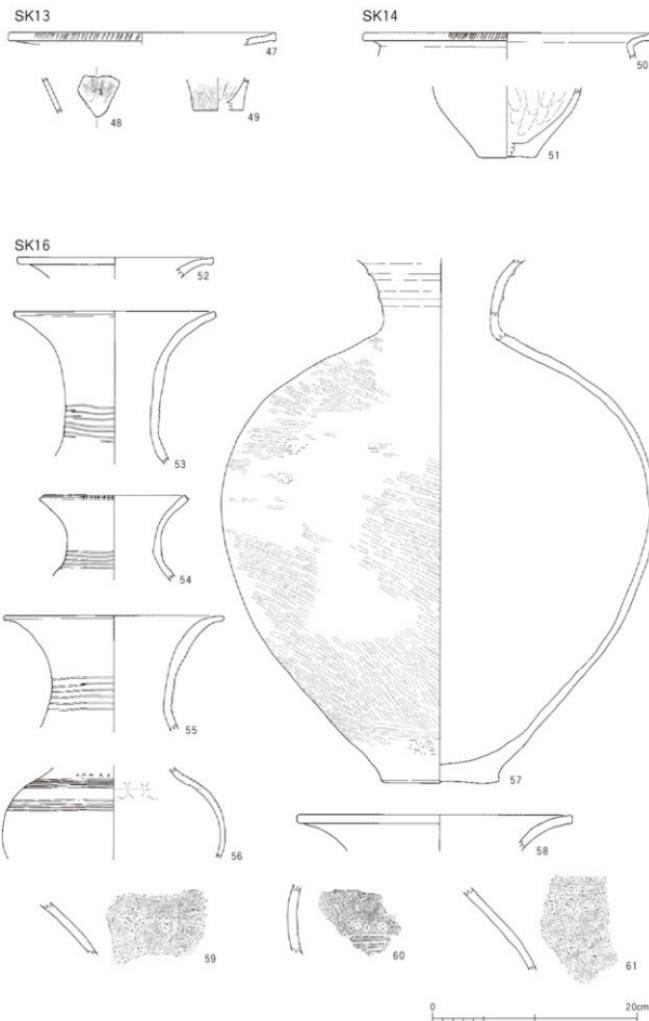
出土土器 (1)

図版14 I区遺物



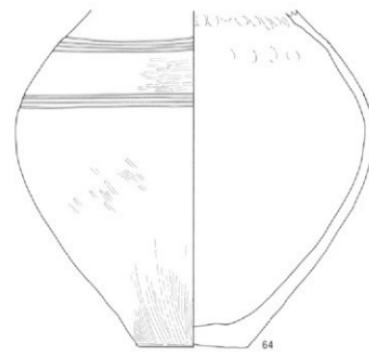
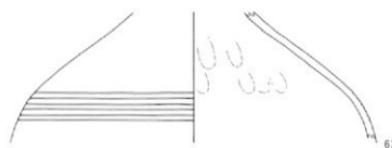
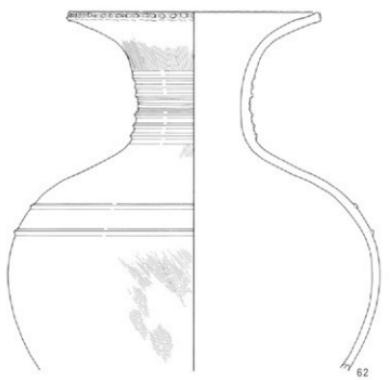
0 20cm

出土土器 (2)

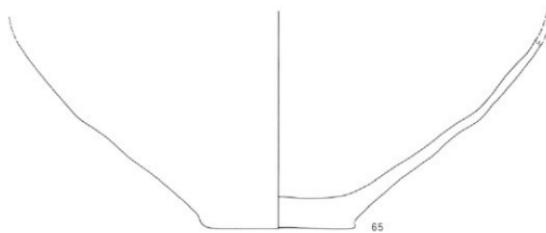
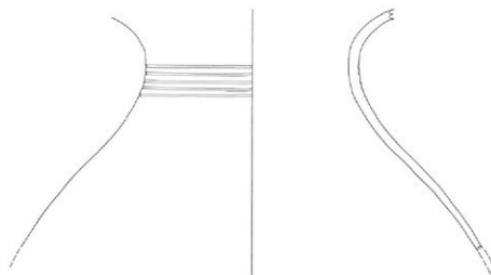


出土土器 (3)

図版16 I区遺物

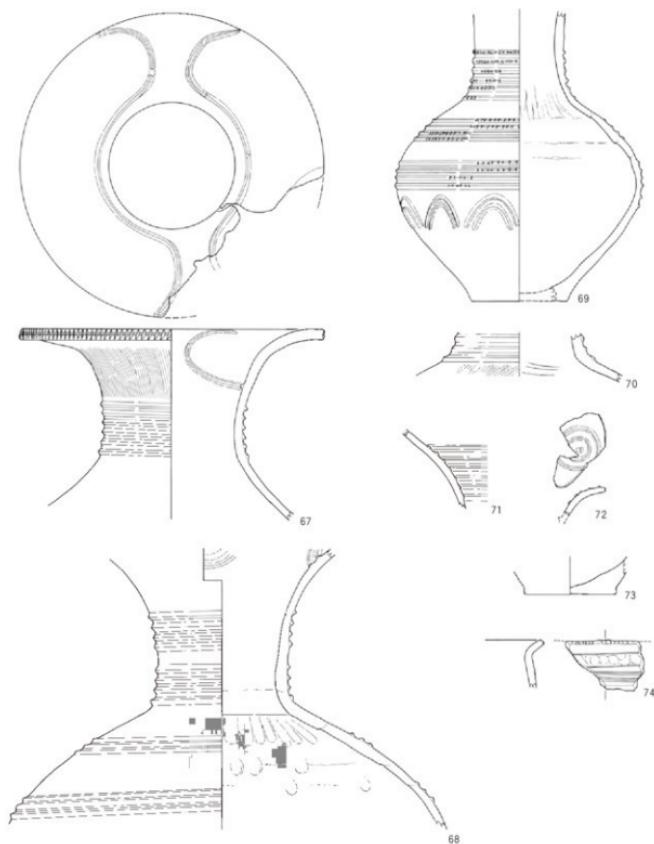


出土土器 (4)



出土土器 (5)

図版18 I区遺物

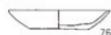


SK17



75

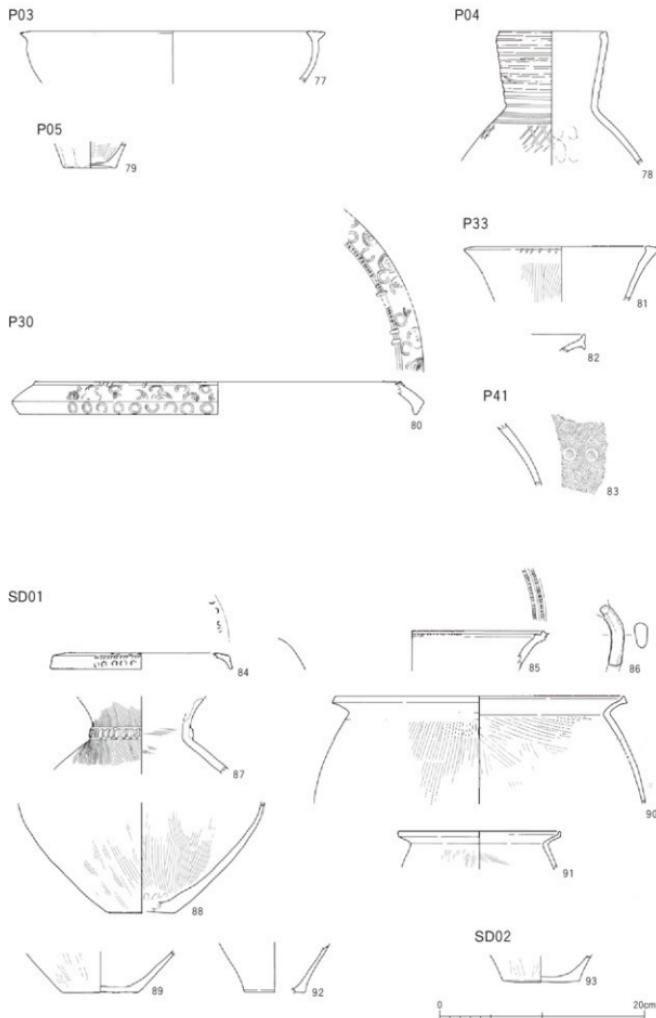
SK19



76



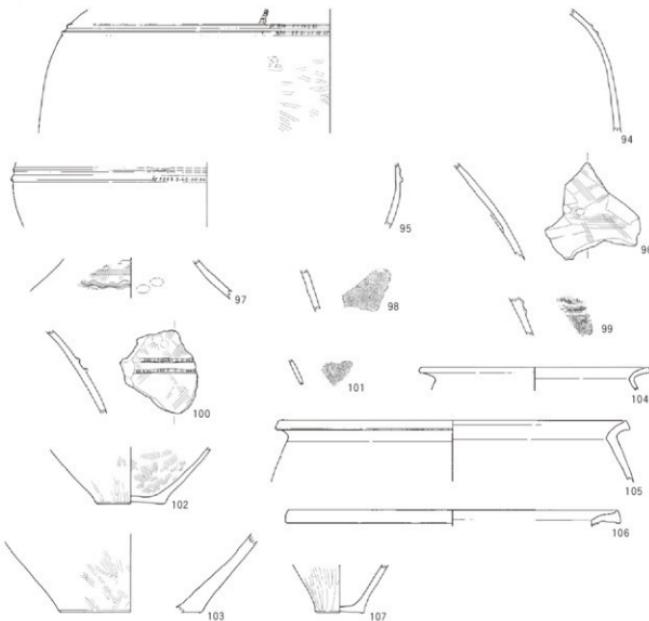
出土土器 (6)



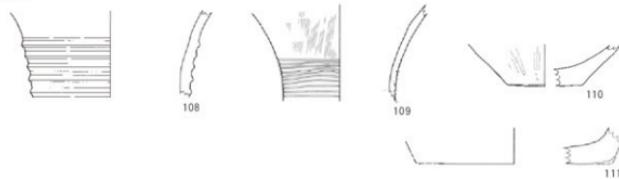
出土土器 (7)

図版20 I区遺物

SH01

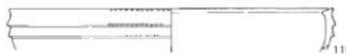
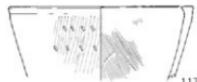
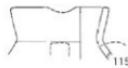
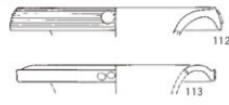


SX03

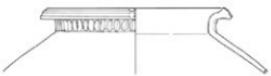


出土土器 (8)

SX01



120



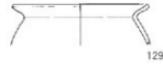
P03



P05



P19



P31



SX01

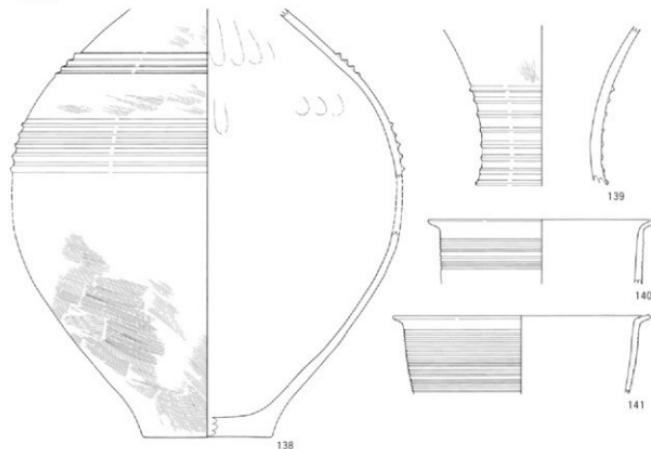


20cm

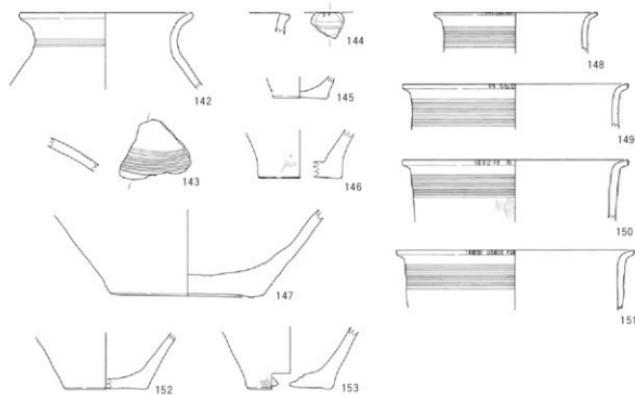
出土土器 (9)

図版22 II区遺物

SK01

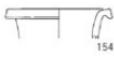


SK04

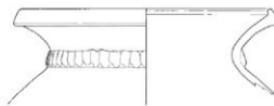


出土土器 (10)

SK02



154

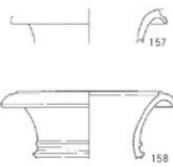


155

SK05



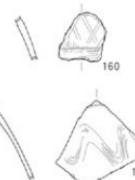
156



157



158



159

160

161



162



163



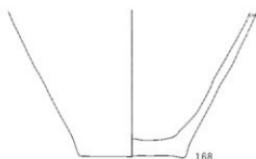
164

165



166

167



168



169

170



171



172



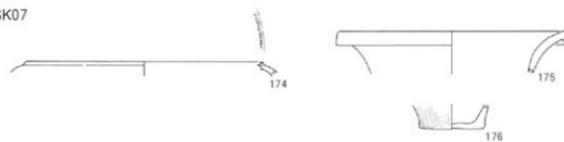
173



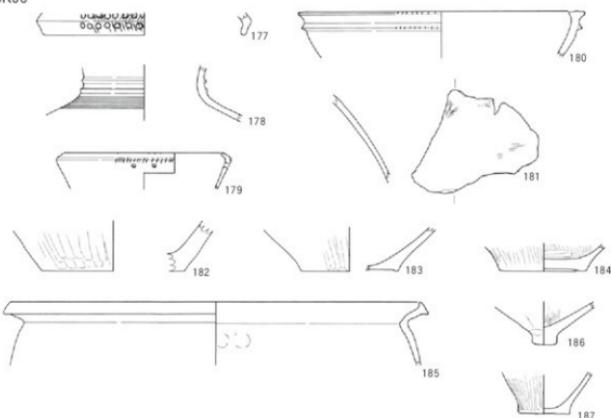
出土土器 (11)

図版24 II区遺物

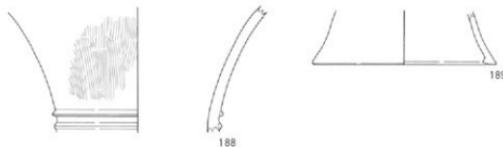
SK07



SK08

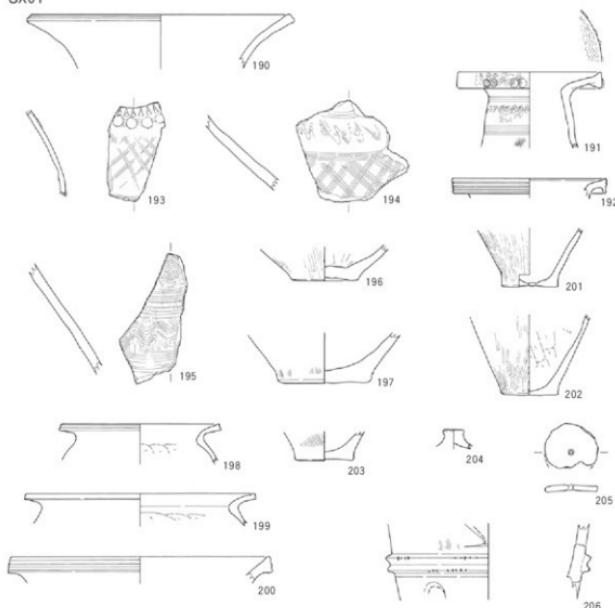


SK12

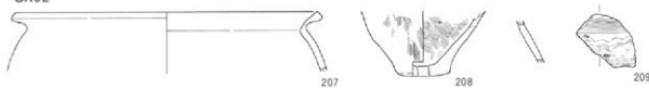


出土土器 (12)

SX01



SX02

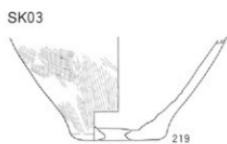
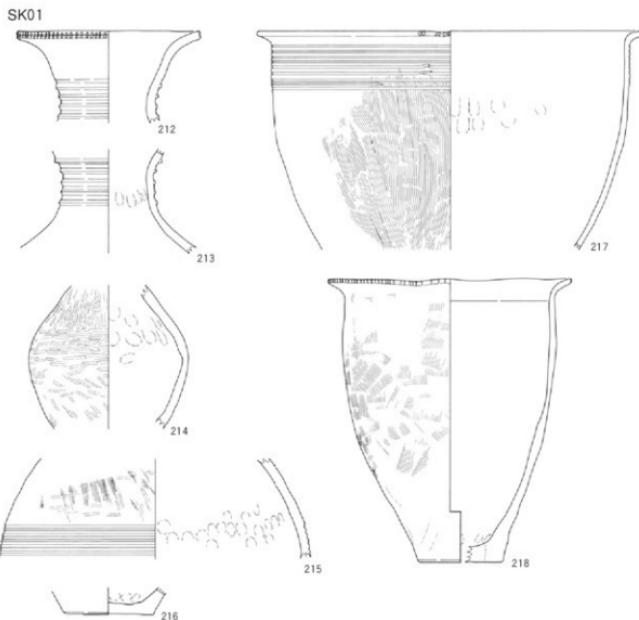


SX03

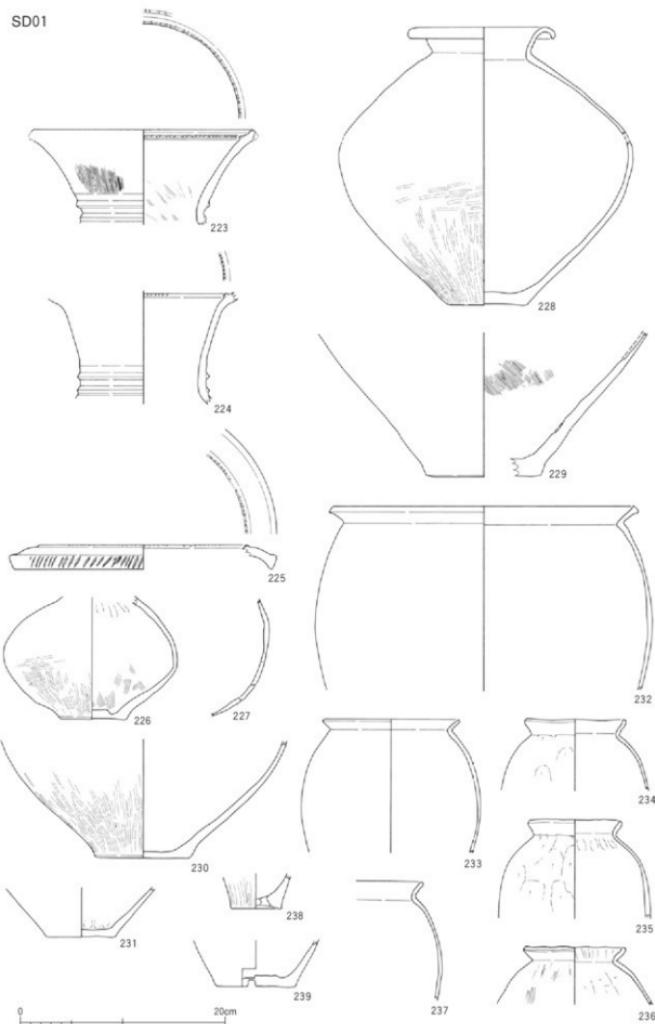


出土土器 (13)

図版26 III区遺物



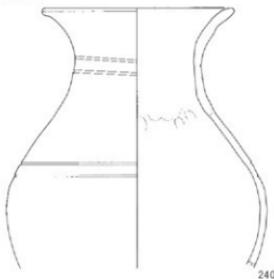
出土土器 (14)



出土土器 (15)

図版28 III区遺物

SD02



240

SD05



242

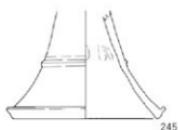
SD03



243



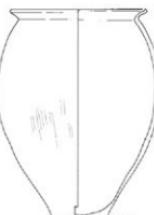
244



245



246



247



248



249

SD07



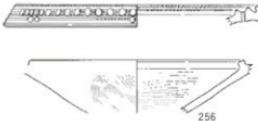
250



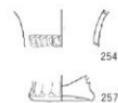
251



252



256



254



255



257



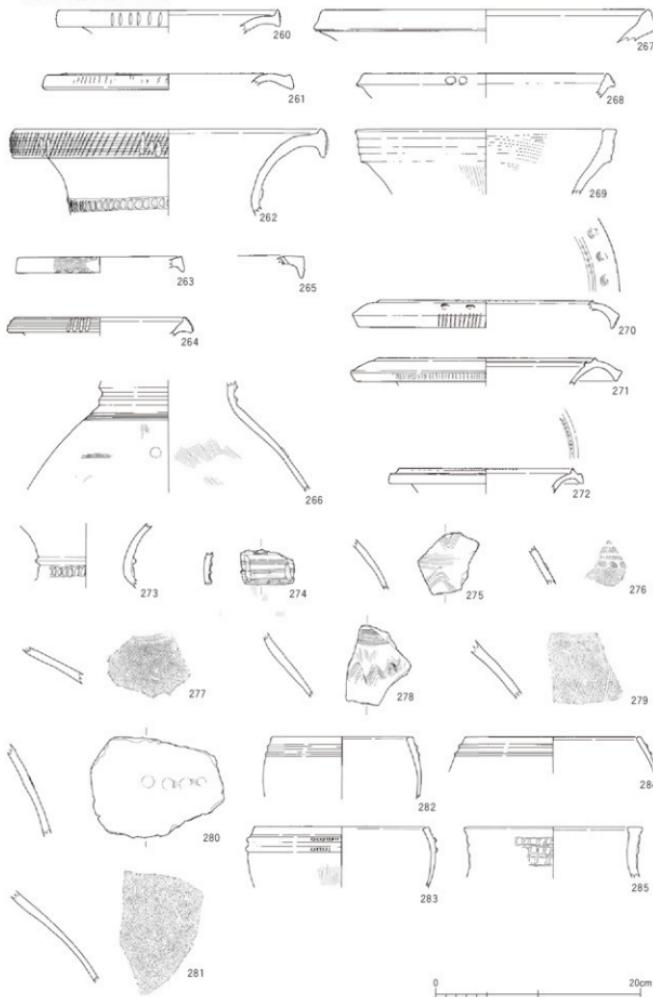
259



20cm

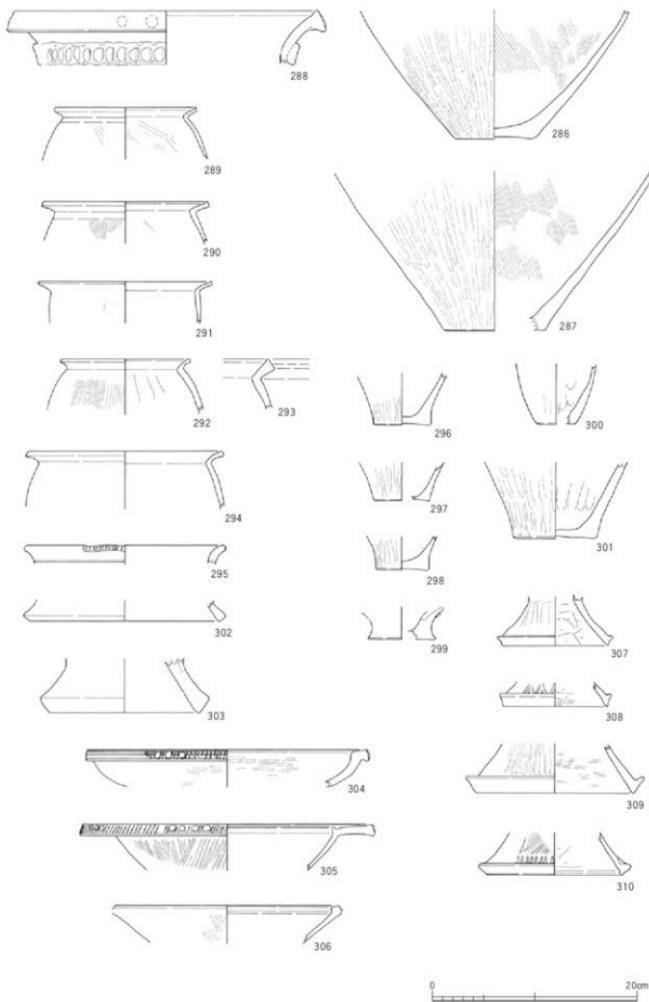
出土土器 (16)

北西部礫層上(落ち込み)



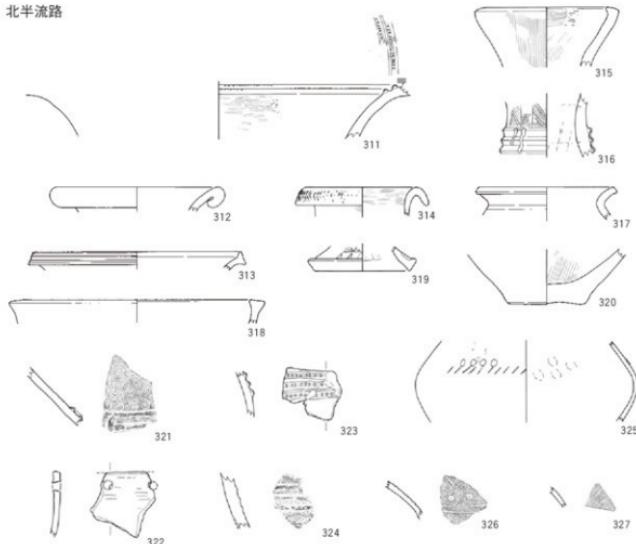
出土土器 (17)

図版30 III区遺物

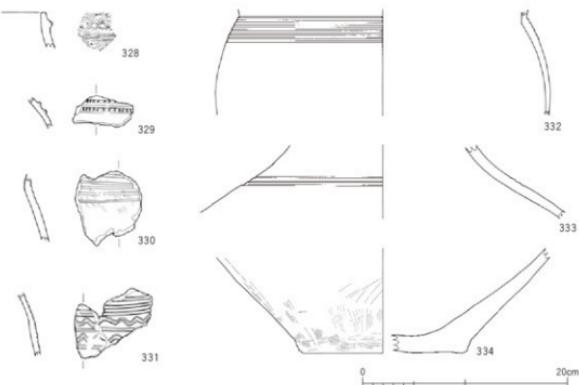


出土土器 (18)

北半流路

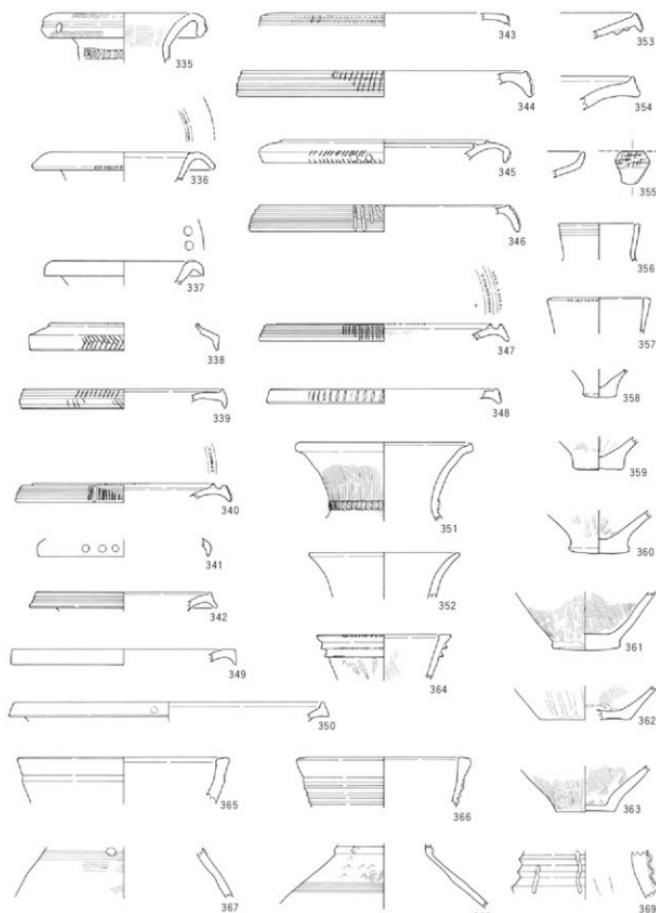


包含層



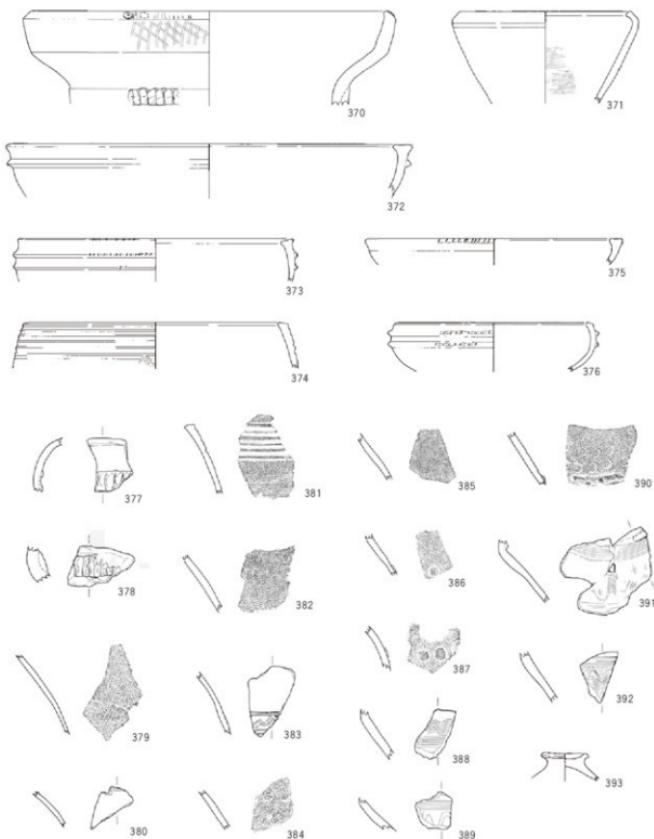
出土土器 (19)

図版32 遺物



0 20cm

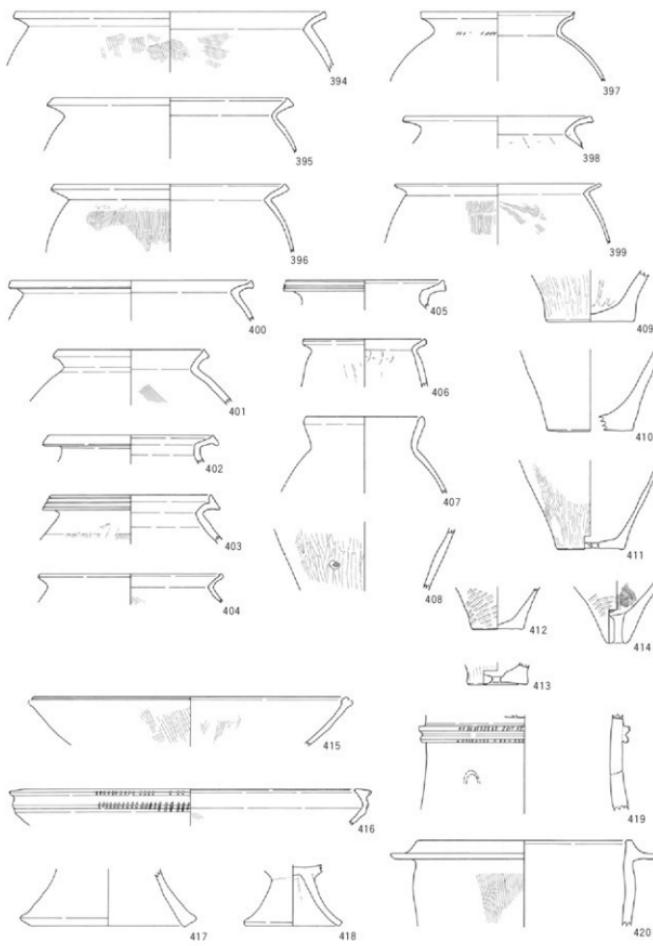
出土土器 (20)



0 20cm

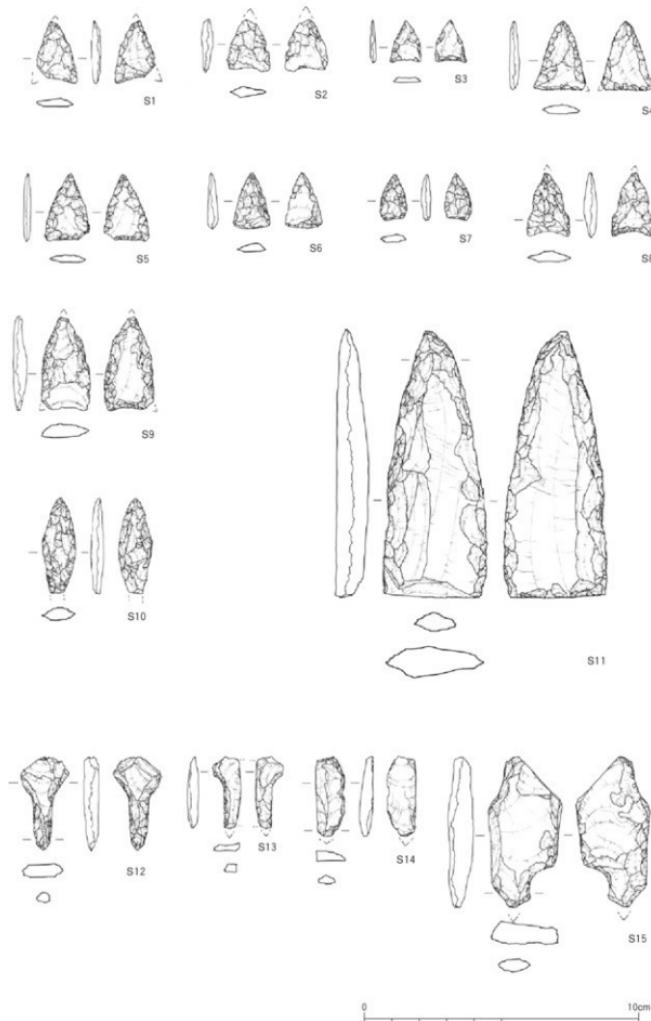
出土土器 (21)

図版34 遺物



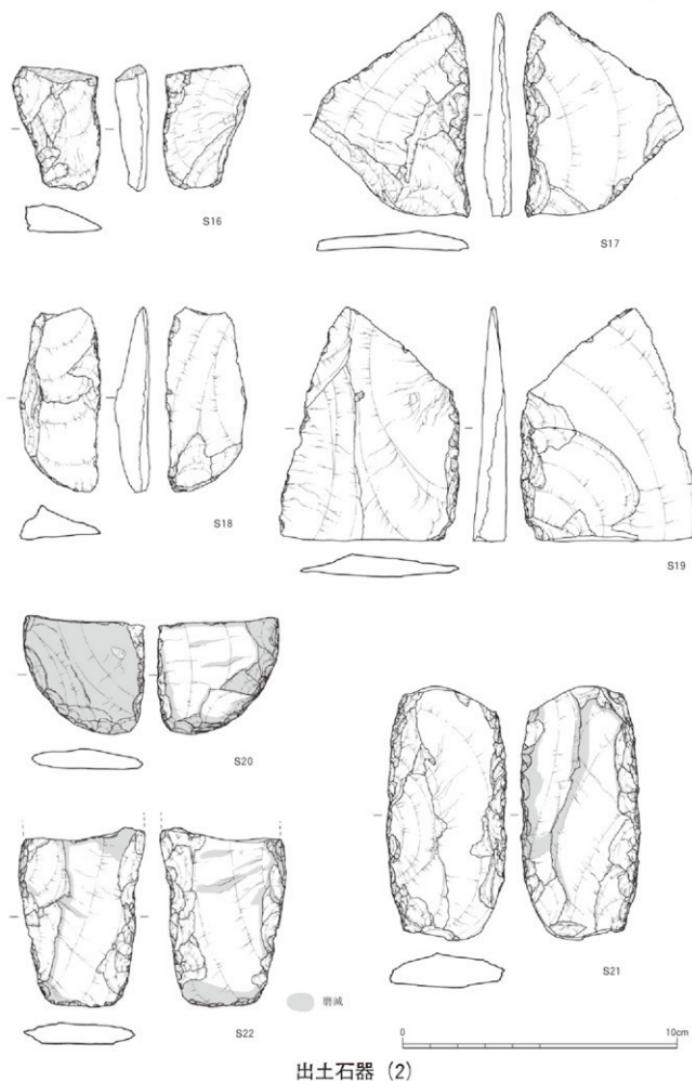
0 20cm

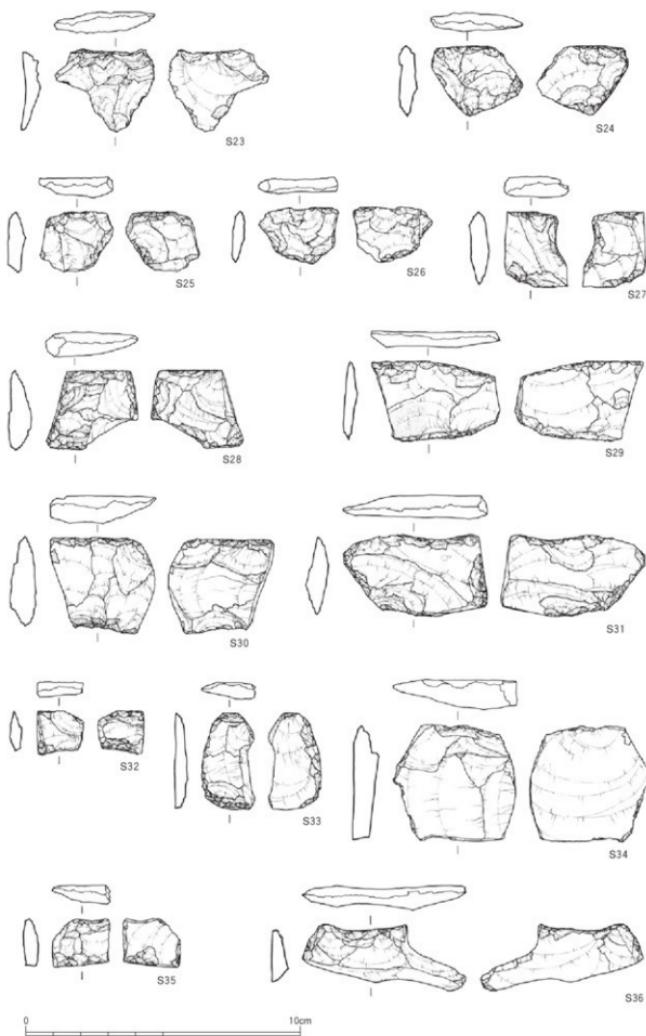
出土土器 (22)



出土石器 (1)

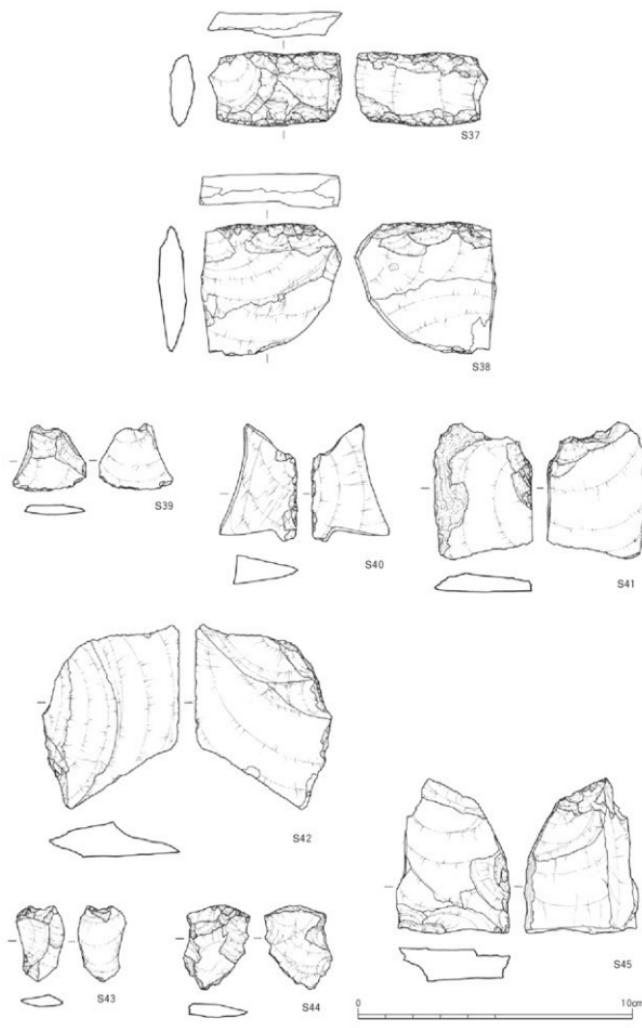
図版36 遺物



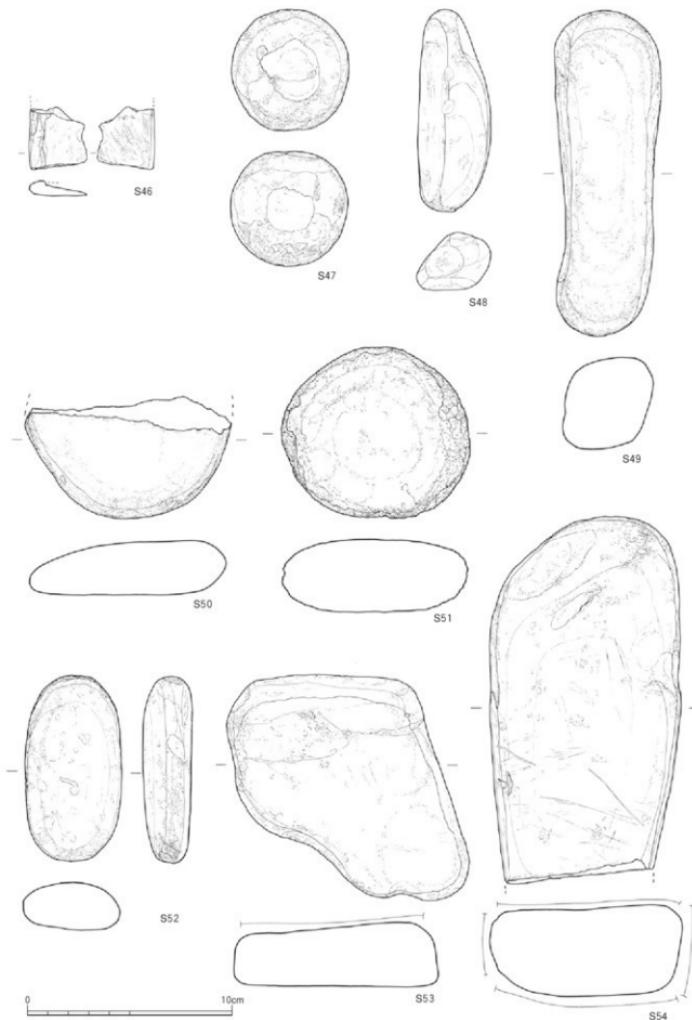


出土石器 (3)

図版38 遺物



出土石器 (4)



出土石器 (5)

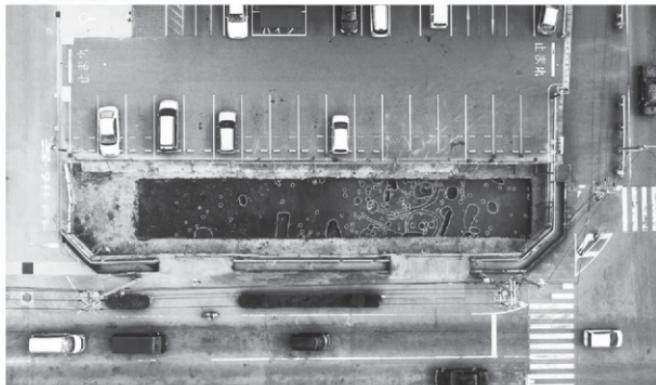
写

真

図

版

写真図版2 I区構造



全景
(垂直写真)



左) 全景 南から
右) 全景 北から



南半部
南から

I 区遺構 写真図版 3



SH01
北から



SH01断面
東から



SK01
東から

写真図版 4 I 区遺構



I 区遺構 写真図版 5



SK05
土器出土状況
南から



SK07
西から



SK07断面
西から

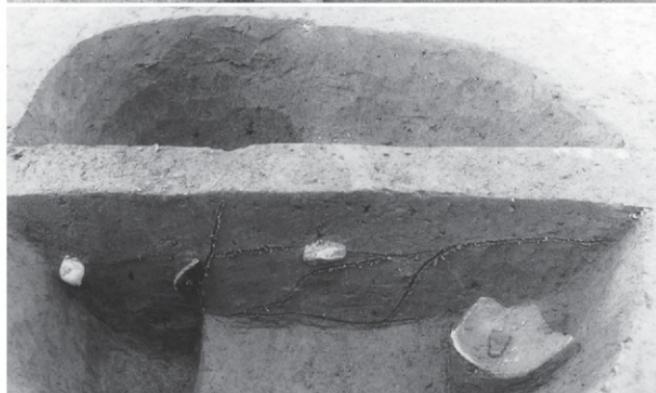
写真図版 6 I 区遺構



SK06
東から



SK06断面
東から



SK10・SD01
断面
東から



SK16
西から



SK16
土器出土状況
西から



SK16
完掘
北から

遺跡 写真図版1

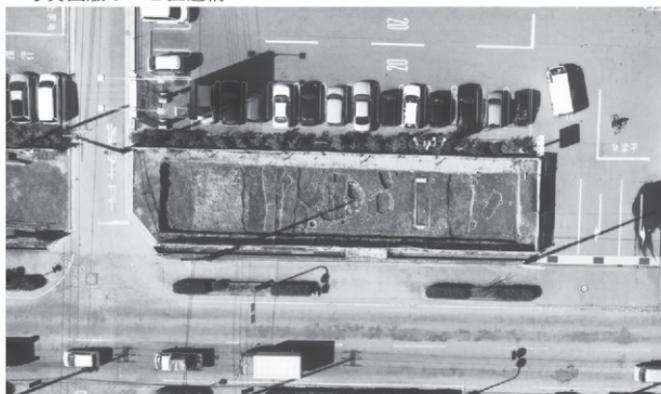


遺跡の遠景 南から



遺跡の遠景 北から

写真図版 8 II区遺構



全景
(垂直写真)



全景
北から



SK01
東から



SK01
土器出土状況
東から



SK02
南から

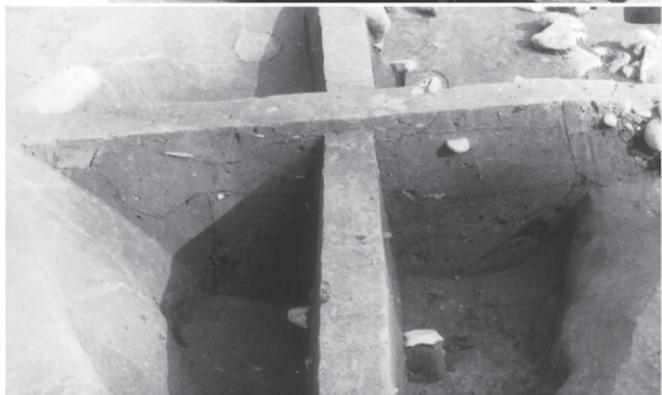


SK04
西から

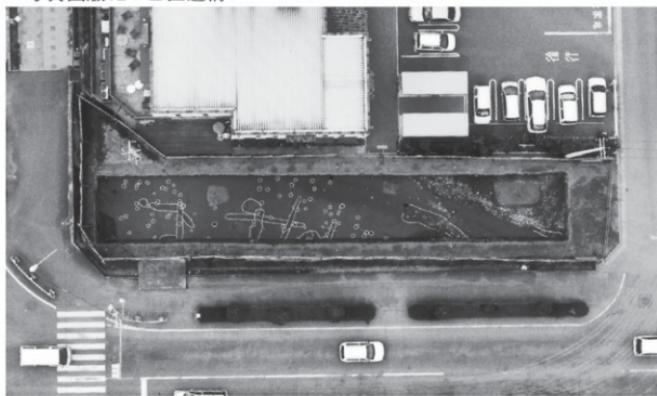
写真図版10 II区遺構



II区遺構 写真図版11



写真図版12 III区遺構



III区遺構 写真図版13



写真図版14 III区遺構



SK02断面
北から



SK02
土器出土状況
西から



SD03・04・05
西から